

清沢冽論文選

——『日本外交史』の補充をかねて

『黒潮に聴く』『自由日本を漁る』から

凡例

本 pdf は、山本義彦編集解説『清澤洲選集』第二、三巻を底本としたが、国会図書館デジタル化資料においては、原本が公開されている。

漢字は、新漢字のあるものは改めたが、いくつかJIS第二水準までになく第三、四水準の字形を使っている。旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。ただし、史料の引用に於ては一部改めたが、旧仮名遣いを残している。また一部、文語体を口語体に改めた。

「洲」と「州」が使い分けされ、当時は「満洲」が基本であったが、すべて「州」に改めた。「ケ年」などの「ケ」は「ヶ」に改めた。

底本においては、「己む」と「巳」であるべき字が全て間違っていたが訂正した。

ルビは底本にもあるが、それは「短艇^{ボート}」の様に日本語に英文を付けたものが大半です。その他のものは作成者が、多くの方にとつて目を通し易いようにと付けたものであり、特に区別はしない。(主にデジタル版大辞林で確認した)

カタカナの地名表記で、「ジェネバ」「ジュネバ」「ゼネバ」は、「ジュネーヴ」に統一した。参考文献において巻号などに使われるローマ数字はアルファベット「J」で代用している。

参考文献で、青字斜体で記したものは、ネット上に公開されているものです。

【】及び「#」は作成者の追加したものである。底本にあった「□」は、「□」に代えた。頁端の脚注も作成者によるものである。

※「#」は判読不明文字を示す。

その他細かな誤植は注記していない。逆に、おかしい字があるとするば、それは本作成者のミスと判断されたい。

目次

『黒潮に聴く』（選集第二巻）

自序

目次

第四編 太平洋に於ける日米関係

第五 日米不戦条約 ———1928.3.22

第六編 支那と日本

第一 満蒙における日本の「特殊地位」 ———1926.1.15

第八編 日本の行くべき道

第一 軍備撤廃の期到る ———1927.3

第二 田中外交と文明史的批判 ———1927.6.5

第四 愛国主義否定に結論す ———1927.2.15

『自由日本を漁る』（選集第三巻）

自序

目次

第一篇 日本の姿を画く

第三編

社会を観る

- 2 政治と学問の衝突
——1928.7
- 5 日本とマルクス主義
——

第四編

政治断層の日本

- 4 警察と裁判所
——1927.3
- 3 嘘だらけの政治
——
- 4 軍人の道徳観
——1927.4.3
- 6 甘粕と大杉の対話
——1929.5.5

第五篇

自由日本を漁る

- 三 立小便と国粹
——1924.10.2
- 三五 広東政府と夢想家
——1917.1.31
- 三六 張作霖の神頼み
——1924.10.9
- 六九 蒋介石君に答ふ
——1927.12

第六篇

世界は動く

- 1 満蒙と日米の立場
——1928.6.1
- 2 不戦条約調印の日
——1928.10.20
- 6 張作霖の最後
——1928.9.6

第二卷 黒潮に聴く

【『[黒潮に聴く](#)』 萬里閣書房昭和三年（1928）刊、国会図書館デジタル化資料】

自序

序というものは、著者がその書の内容について弁解する言葉のことである。

書くには書いたが世の識者は何とみるであらうか。纏めるには纏めたが果してこれが売れるであらうか。立論の基礎に誤謬はないだろうか。自分の態度が偏見に煩わされて居るようなことはないか。こうした不安と満足を一緒に書き集めるのが序文の役目だ。だから見給え、世の中に、何かの形式で哀願と弁解の伴わない序文というものはありはしないから。この意味の序文なら、私もこの書の巻頭で、長々と述べる必要を感じて居る。それほど私はこの書の内容に、沢山の弁解を持っているのである。

併しそれにも拘わらず、私がこの書を世に送る所以は、この書を一貫する私の根本的主張について、今なお何人の前にも悔ゆるところを知らず、世と人との厳正なる批判の前に立ちたいからである。

x

x

確かチェスタートン【Gilbert Keith Chesterton, 1874-1936】だったと思う。英国の米国化とか、米国の英国化とかいうような言葉に業を煮やして、『英国の紅茶は世界でも有名で何処に行っても、こんなうまいのは呑めない。またアメリカのコーヒーは誰にも真似の出来ない味がある。併し、だからといってこの二つをゴツチャにして飲めるか』といったことがある。

いかにも紅茶がうまいからといって、またコーヒーがおいしいからといって、これを混ぜ合せて呑む馬鹿者はない。それは別々に味つてこそ、特殊の味があるのである。東西文化の融合、東西思想の結合といった言葉が持つ危険性はそこにある。

併したわれ等が注意せねばならぬのは、この二つに何れも存在の価値と理由とがあることである。コーヒーを好むが故に、紅茶の存在を否定するのは当らない。われ等はコーヒーを偏愛しながら、一方紅茶の存在に対して寛大でなければならぬ。それが自由主義の精神であり、特長である。

x x

私はこの著で太平洋の諸問題を取り扱おうとした。その昔、道は総べてローマに通じたように、今や万流は結局太平洋に流れ落つるのである。太平洋を論じた私の筆が、いつの間にか止めもなく拡がって、世界の大勢を論ずるに至ったについて、私は私自身を咎め得ない。

これ等の諸問題を論ずるに当つて、私は出来るだけ寛大であらうとした。自身の主張を確守しながら、反対論の存在を肯定しようとした。故に私は米国の排日に対しても、ロシアのボルシェビズムに対しても、大したビタネス【biteness】を持たずに論じ得たつもりである。

× ×

論文というものは自身を喜ばせる文章のことで、文芸というものは読者を喜ばせる文章のことだ。そうある人はいった。この定義からいえば、私のこの著は論文でもなければ文芸でもない。その何に属するかは、縁あつてこの文の読者になられた諸君の判断に訴えるの外はない。希望するところは始めから終りまで通読されんことであるが、一篇、一章にも私の小さな思想は盛られていると思う。

終りにこの書出版に当つて万里閣書房社長小竹即一君の厚意を感謝する、そして標題、体裁なども、殆んど同書店の意志に任した事、但し出版を急がれたので原稿を整理する暇なく、二三重複の個処がある事、更に最後に至つてページ数超過のため七八篇の中を割愛した事等を附記して、読者の寛恕を乞いたい。

著者

清沢冽選集第二卷黒潮に聴く

目次

第壹編 国際日本の創設

第一 タウンセンド・ハリス

- 1 黒船に日本美人差向け of 奇策
- 2 始めの使節としての責任感
- 3 ハリス追払いの策
- 4 下田芸者お吉のエピソード
- 5 ハリスの清教徒的一生
- 6 唐人を排斥した当時
- 7 日本人の「嘘付き」と無数字
- 8 大名行列で江戸に入る
- 9 ハリスの閣老対手の大演説
- 10 暗殺横行の中に江戸に居残る
- 11 ハリスの偉大なる功績二つ
- 12 ハリスの質問に渋沢子答える

第二 鎖国日本の発見

第二卷目次

第貳編

第一

- 1 日本と支那との相違
 - 2 天保年間の米国船
 - 3 米国太平洋を重視す
 - 4 外国の事情に暗かった先覚者
 - 5 ペリー来航の事情
 - 6 傍若無人なペリー一行
 - 7 大勢順応の国民性
 - 8 日本外交官の無策の好評
- 太平洋時代へ
- 1 沈み行く大英帝国
 - 2 英国産業界の煩悶
 - 3 財産たる石炭・鉄の減少
 - 4 食糧輸入国の悲哀
 - 5 有名なペーヅ氏の预言
 - 6 トロッキー氏の英国観
 - 7 本国を離れつつある属領
 - 8 前途を樂觀する者の論拠
- 偉大なる復興力と前途

9 英国民は沈み行かず

第二 太平洋国としてのカナダの擡頭

1 英国領か、米国領か

2 カナダ総選挙の論点

3 米国との合併論

4 カナダ第一主義の外交

5 米国の経済的侵入

6 両国の親善なる理由

7 合併の実現は疑問

8 太平洋問題とカナダの態度

第参編 米国、舞台に現る

第一 新興の米国とその将来

1 国祖罵倒的一幕

2 保守的なる米国人の思想

3 驚く可き米国の富力

4 経済的帝国主義

5 米国の前途に有する不安

第二 米国は何故繁栄するか

1 世界窮して米国独り榮ふ

2 繁栄を招致した諸原因

3 米国が試みつつある大試験

第三 嫌われものの米国

1 フランスの米人迫害

2 英国でも米国を攻撃

3 自己中心の性格

4 米国の得手勝手な議論

5 嫌われる金持国

6 モンロー主義の不人気

7 米国の不人気と将来

第四 米国の中米政策

1 プロレタリア国家の擡頭

2 米国のメキシコ干渉の回顧

3 外人排斥の憲法制定さる

4 カイエス政府の宗教迫害

5 危機を生んだ外人土地法

6 米国の中米に対する帝国主義

7 ニカラガに於ける米墨の衝突

8 米墨關係から得る教訓

第五 米國に於ける禁酒問題

1 経済的には禁酒は成功

2 法律的に觀た禁酒問題

3 政治問題となる

4 選挙に現れた禁酒に関する輿論

5 将来は如何なる

第四編 太平洋に於ける日米關係

第一 米國の東洋政策

1 門戶開放主義を中心の諸問題

2 対支貿易と英國との競争

3 米國の单独行動

4 シーロードの強硬政策

5 ペリー提督の野心

6 領土を侵略せざりし理由

第二 日米移民問題の重要性

1 渋沢子の達見

第二卷目次

2 三期に亘る米國の東洋政策

3 米國の閣議で日米戦争論

4 移民問題の内容の検討

第三 石油疑獄に現れた『日米戦争』

1 内務長官に贈った五万ドル

2 十万ドルの金の出所

3 日米戦争とその準備

4 法律上裁判の結果

5 海軍大佐の証言

6 石油王の証言

第四 日米両國提携の必要

1 提携を必要とする六つの理由

2 モンロー主義と門戶開放主義

3 東洋に於ける米國の積極的態度

4 日本は軍備の競争に堪えず

5 排日に現れたる米人の自己主張

6 「自分勝手主義」と原料品の要求

7 労農ロシアの擡頭と日英米

第五 日米不戦条約 【1928.3.22】

- 1 戦争廃止の暗中模索時代
 - 2 三国軍縮会議の教訓
 - 3 日英同盟と条約の効果
 - 4 不戦条約は必要なり
 - 5 不戦条約案の経過と内容
 - 6 仲裁条約と米国上院の関係
 - 7 米国案による除外例の矛盾
 - 8 得手勝手な米国の立場
 - 9 除外項目に対する私案
- ### 第五編 ロシアと支那の研究
- #### 第一 革命ロシアの十年
- 1 十ヶ年の激しい讚美と弾劾
 - 2 ソヴェート露国は戦争の産物
 - 3 露国に共産主義なし
 - 4 一団の「狂信徒」権を握る
 - 5 産業組織とレーニンの誤算
 - 6 新経済政策以後の問題

- 7 労農政権の下に古いロシア
 - 8 ロシアは何処へ行く
- #### 第二 免疫性の支那
- 1 夜の支那町
 - 2 事大主義の支那
 - 3 傾いた革命運動
 - 4 組織か国民性か
 - 5 支那、英米、ロシア
 - 6 支那は生き行く
- #### 第三 見たままの支那
- 1 支那を旅して
 - 2 生産する支那
 - 3 面倒な金の勘定
 - 4 支那とは何ぞや
 - 5 支那の排外思想
 - 6 安価な労働
 - 7 無遠慮な外交
- #### 第四 支那国民運動に対する疑問

第六編 支那と日本

第一 満蒙における日本の「特殊地位」【1926.1】

- 1 満蒙に対する日本の決心
 - 2 「特殊地位」の変遷と現在
 - 3 振わざる日本の経済的勢力
 - 4 労農ロシア再び擡頭す
 - 5 満蒙調査委員会の提唱
- ### 第二 プロレタリア国家の反意

- 1 無産国支那の得意
- 2 支那の強さ
- 3 何故支那が強いのか
- 4 新しい反抗運動

第七編 現代日本の社会と思想

第一 社会相不安の原因を検討す

- 1 教育と経済と
- 2 事実を教えざる教育
- 3 下層階級の擡頭
- 4 明治維新と中産階級

第二卷目次

- 5 現在の不安相の経済的背景
- 6 明治維新と伊藤公

第二

- 1 人間は生存する権利ありや
- 2 支那の国民運動と生存権
- 3 労働者の要求と支那の産業
- 4 労働する権利と生存する権利
- 5 生存権と日本の現状
- 6 英国の石炭罷業に現れた主張
- 7 米国人と支那人との生産量
- 8 日本、米国、支那の比較
- 9 生産なきところ生存権なし

第三

- 1 新自由主義という事
- 2 『自由』と米国の歴史
- 3 同じ系統の左翼と右翼
- 4 圧迫主義反抗と自由主義
- 5 偶像破壊の一群

第八編

第一

- 1 日本に行くべき道
- 2 軍備撤廃の期到る【1927.3『中央公論』】

- 1 軍備に満足の境地なし
- 2 日本を奪う国があるか
- 3 無産国支那の自己主張
- 4 米国とメキシコの確執
- 5 軍備撤廃の諸理由

第二 田中外交と文明的批判 【1927.6.5】

- 1 同じ国から三つの抗議
- 2 政争の犠牲になった外交
- 3 強硬輿論の没落
- 4 外交を動かす経済的要求
- 5 必要が自由主義の道を辿る

第三 農村産業化の必要

- 1 凶年を喜ぶ階級
- 2 一人歩きの出來ぬ工業
- 3 価格の変動と米穀の専売
- 4 人間が増して土地は増さぬ
- 5 人口増加怒るるに足らず
- 6 町村を経済的単位とせよ

- 7 教育改善から自由貿易へ

第四 愛国主義否定に結論す 【1927.2】

- 1 国家主義と愛国主義
- 2 日本の国家主義の由来
- 3 日本の自給的保護政策
- 4 関税は平和の戦争武器
- 5 欧州国家主義の弊害
- 6 欧州に動く国際協調運動
- 7 愛国主義否定と私の立場

【以下、青字で示した論文を収録】

5 日米不戦条約

日米不戦条約を論ずるに当って、目前に二つの問題がある。第一には不戦条約というようなものが、必要なものかどうかの根本論である。これについては随分反対な議論も見受けるようであるから、この点をまず決定しておかなければ、その内容に関する議論を進めるに困難である。第二に、もし現在の国際関係において不戦条約の必要なることが決定したとすれば、われ等は始めて合衆国が提案しているところの不戦条約は適当なものであるかどうかの技術論に入ることが出来るのである。私のこの文の目的は、この二つの問題を併せて論評し、私自身の私案をも附記せんとするにある。限られたるスペースにおいて、或はその一つをも完全に記述し得ない恐れがあるが、個々の詳評はまた別の機会を得たいと考えている。

一 戦争廃止の暗中模索時代

われ等がこの議論を進めるに当って、「戦争は排斥すべきものである」という立場から出発しても、大して独断の譏りは受けないと思う。

元来、国際的紛争を解決するのに、今のところ二つの方法がある。第一は戦争の手段に訴えて

これを解決することであり、第二は妥協、仲裁の方法によつて解決することである。第一の国際紛議を戦争を以て解決せよとの思想は、長い間この世界を領して来た考えであつて、われ等は過去の歴史の如何なるページを繙くとしても、この思想の現れを見ることが出来る。併し人類の文明の進むに従つて、また特に世界大戦の後半期から、戦争は原則として排斥すべきものであるとの思想が盛んになつて来た。今や余程の武断論者でも、戦争を「最後の手段」として以外には、弁護し、謳歌するものはなからうと思う。

戦争が出来るだけ排斥すべきものであり、かつこれを以て国際紛争を解決するための手段となすことは、原則として避くべきことでありとすれば、世界はこれに代るものを發見せねばならぬ。そして又實際において国際思想の動きに注意するものは、戦後の世界がその努力を最も多くこの点に集中して来た事実を承認するであらう。国際聯盟の機関がそのためであり、軍備縮小會議がそのためであり、また幾つもの国際會議も結局戦争を避け、各国民が和平の間に共存共栄せんがための努力に過ぎないのである。

併しながら各国のこうした努力はこれを認めるけれども、その戦争を防止する方法に至つては、なにしろ人類の歴史にとつて新しいことであるので、暗中摸索の感があつた。始めの考えでは国際聯盟の規約だけで大体戦争を廃し得る筈であつたのが、これで充分でなく、その後ジュネーヴ

の議定書とか、ロカルノ協定とか、軍備縮小条約とか種々なことが試みられ、今や最近の試みとして非戦条約提唱にまで漕ぎつけたのである。後世の歴史家をして現在を評せしめれば、恐らくは「戦争を廃止する目的のもとに暗中摸索した時代」とでもいうであろう。

然らば新しく出現した非戦条約案は果して戦争廃止に有効であろうか。われ等の議論はこの点から始められねばならぬ。

二 三国軍縮会議の教訓

ヴェルサイユで編んだ国際聯盟の規約が、戦争を廃止するのに尚不充分であると気がついた聯盟は、一九二四年において当時の英首相マクドナルドなどの指導の下に一の政策を確立した。その時案出したジュネーヴ議定書は、英国内閣の更迭を最も大なる理由として効力を発生しなかつたけれども、その時の政策は今なお国際聯盟の動かざる政策となつてゐる。それは何であるかといえ、戦争廃止は軍備縮小を前提とし、軍備縮小は一国に保障があつて始めて可能であり、更にその保障は仲裁機関の發達によつてのみ可能であるという一事である。

これ等の事については、今詳細に例を引いて述べる暇はないが、ただこれを最近のジュネーヴに開かれた三国軍縮會議の結果に見るも明らかである。英国のギルバート・ムレー教授はジュネ

ーヴの軍縮會議が失敗に歸したのを左のような理由に歸している――

一、この問題をその政府間の最高政策の問題として見ないで、単に海軍省間の局部的会合として取扱つたのによる。

二、それは充分の準備を欠いた、殊に米國側において。

三、米國はその提案をした直き後で、英國と同率（パリチー【parité】）の協定を結ぶことは、共和党の投票数を増さないで、却つて減少せしめるものであることを發見した。

四、最後に、そして最も重要なことは英米両國間に戰爭を排斥すべき協定がなかつたことである。（尤もそこには一九一三年の古いブライアン條約はあるが、これは時期を遅らせ、會議をなすことを規定するものに過ぎない）しかも不思議なことには兩國政府ともこの條約を作ることを好んで居らなかつたようである。

ムレー教授はこの原因をあげて来て左のように述べている。

『もしあなたが、あなたの隣家と喧嘩することを予期して居り、またそれがため成るべくその自由行動を束縛されない決心であるとすれば、あなたはその隣人と武器縮小の約束――少くとも真面目な約束をなすことは困難である。あなたの望むところは彼の意表に出でんことである。故に軍備縮小に至るの道は保障を確立するにある。もし戰爭が前途に横たわつて居

らなければ、両者とも自然に軍備を縮小するであろうし、またこれに反して戦争の可能性がありとすれば、軍備は生命の必要者である。』

以上極めて平凡な説であるけれども、戦争と、軍備縮小と、保障との因果関係を論じて明らかである。即ち戦争を廃止するためには軍備縮小の必要あり、軍備縮小を実現するためには保障——国際紛議を解決するために戦争の手段に訴えないという両国の諒解あることを必要とするのである。不戦条約の声はここから起つて来る。

三 日英同盟と条約の効果

世には条約というものの効能を軽視しているものがある。併しこの事は事実を顧みるに及んでその理由のないものであることが判明する。

例えばシンガポールの軍港は日本の朝野が英国に対して強く抗議するところのものである。そしてその軍港が日本を目がけたものであることから考えて、この抗議は決して理由のないものではない。併しながらわれ等が考えなければならぬことは、この軍港は日英同盟が失くなつてから、問題になったものである一事である。それまでは日英両国は単に外国からの挑戦に対して、共同して防ぐことを契約して居つたばかりでなく、両国の間には自然に深い諒解があつたが故に、

太平洋方面の事は専ら日本に委せ、しかして日本に対しては何等の危惧を感じなかつたのである。

然るにこの日英同盟はワシントン會議の結果破棄された。それが英国の發意によつたものであつて、日本の意志ではなかつたといふことは、この場合われ等がの結論に何等の変更を与えるものでない。原因は何れにあつても、破棄の結果英国は日本に対して非常な不安を感じるようになった。そして戦後、国をあげて財政の緊縮を実行している間に、シンガポール軍備だけは拡張することになつたのである。英国としては日本がその軍備を拡張すればするほど、この辺の防備を固くすることは明らかである。一個の條約が如何に一國民の精神状態に作用するかはこの一事でも知り得るではないか。

この事は又ロカルノ協定においても明らかだ。ドイツと仏國の歴史的葛藤はロカルノ條約において始めてやや天日を見るに至つたのである。これあるがためにラインからの撤兵（一部ではあるが）可能になり、ドイツに対する聯合國の軍事監督からも手をひき、またドイツの國際聯盟加入も出来た。更にその後軍備縮小會議が開かれて、随分難関はあるけれども、とに角軍縮に一條の光明を齎らしたのはロカルノ條約の賜物といつてもいい。即ち欧州各國間に相互保障の根本條約が出来あがつて、始めて軍備縮小の緒口【いとぐち】が発見されたのである。

この一つの例としてわれ等は英國の航空大臣、サムエル・ホアーの報告を引用することが出来

る。同氏は昭和二年の暮に「英国の航空設備のプログラムは二年前ロカルノ条約調印後変化して来た。当時は出来るだけ迅速に完成せねばならなかったのが、今や欧州の空気が変化して来たので、徐々にそのプログラムを進行して可なるに至った」と声明している。

これに反して相互を保障する条約のない国家間は、絶えず不安を有して、軍備縮小の如きは到庭【到底】真面目に議すべくもない。労農ロシアと欧州諸国との関係がそうであつて、ロシアと国境を接する国は勿論、然らざる国と雖も事、国防に關すると、常にロシアを顧みて躊躇するを常とする。先頃のジュネーヴの軍縮會議にロシアが徹底的な軍備撤廃を提案したに拘わらず、これが寧ろ一笑に附せられたのは、その案が極端なるによるのは勿論であるが、またその間に信頼と仲裁の機関がないからである。

四 不戰條約は必要なり

以上述べたような簡単な事実だけを以てしても、戦争廃止、軍備縮小に到達するためには、各国間の保障と諒解とが必要であることが分明するであらう。

然るにこれに対して、こうした条約を不要なりとする論者がある。それによると左の様な事実をあげて居る。

第一、日米関係は今さら不戦条約を結ぶにあらざれば葛藤の懸念ありと思うほど、薄弱不安の状態にありとは認めず。

第二、又該条約を締結することによりて、初めて両国間の危惧不安を一掃し得べしという如き特殊の事態をも想像する能わず。

『既に両国互い戦わず、又戦うの意思なき関係にあるに拘わらず、不戦条約の締結を必要とする如きは白昼に燈火を点じ、土用に防寒服を持ち出す類にあらずや』というのが、この論者の説である。（『外交時報』昭和三年一月一日号第八ページ）

われ等は不幸にしてこの論者と説を同じうするを得ない。第一に日米関係が『薄弱不安の状態ではない』というけれども、併し乍らわれ等が考えなければならぬことは、戦争は一定の道程を辿つて来るものでないという一事である。欧州大戦の当初に当つて、バルカンの一砲弾が、あの世界大戦を呼び起そうとは何人が信じ得たところであらうぞ。更にその後日本がこれに加入し、米国が参加するであらうことを誰が予想し得たであらう。戦争は常に意外の辺に起つて、意外の辺に飛火するものである。故に各国家は何時起るとも知れないこの事態に対して、国費の重大なる部分を割いてこれに備うるのである。

更に日米の關係が、それ程大盤石の上に立つてゐるとはわれ等の考える能わざるところである。

この事は紙数が許せば、今少し後で説くつもりであるけれども、例の移民問題以来、両国の関係が決してそれほど鞏固なものでないのは、世界の各方面に尚日米戦争を云為するものが跡を断たないのも知ることが出来ると思う。

百歩を譲つて仮りに太平洋上に一抹の暗雲すらもないとする。米国は移民問題を以てクローズド・インシデント【closed incident】だといひ、日本はなおそれが問題であるという立前に居るのは何人も知るところであるが、かりにこれ等も少しも問題とするに足らないとする。然かも両国間には第二段のなすべきことがある。それは軍備をこの上徹底に縮小すべきことこれである。日米両国間の和親がそれ程信賴すべきものであれば、日本の予算の三分の一近くを占むる軍事は全く無用の長物だからである。

この場合不戦条約乃至は仲裁条約は矢張り必要になつて来る。ジュネーヴの會議の失敗がこの辺の機関がないことが重要な原因であつたこと、ムレー教授の説く如くであつたとすれば、日本がその軍備縮小を実行する場合には同じくこれを必要とするは明らかである。何故ならば英米両国が所謂イングリッシ・スピーキング・ピープルとして相互に親善であり、かつ親善ならんと努力しつゝあるは極めて顕著なる事実である。しかもこの血は水よりも濃き両国においてすらも、軍縮を議する場合には、両国の國際的基礎を戦争の上におき、これがために失敗に歸したという

のである。日本が米国と再び軍備縮小を語る時あらば、何よりもまず相互の安全を保障するに足る条約を必要とするは云わずして明らかではないか。

五 不戦条約の経過と内容

国際平和の将来乃至は軍備縮小をなすためには、何等かの機関を必要とする事實は、簡単ながら以上を以て説明し得たとしても、この根本論が直ちに、現在問題になって居るところの不戦条約案を是認すべしとの結論を生ぜざることは勿論である。

目下米、仏、両国間に交渉中なる不戦条約については、今までのところ（昭和三年一月中旬）公式には米国側から二回その覚書を發表したに止まつて、その詳細なる内容及び経過はなお不明であるが、これ等不完全な情報によつて知り得る大略は左の通りである。

第一、不戦条約案は米国ではボラー氏などの提案により早くから問題になつて居り、現に一昨年（一九二六年）十二月九日にこれについてボラー氏は Resolution toward the Outlawing of War を上院に提出したほどだが、併しこれが形をとつたのは昨年（一九二七年）四月六日仏国外相ブリアン氏が、米國聯合通信記者に『仏國は米仏二ヶ國間で戦争を廃止するところの相互的協定あらば、喜んでこれに加入し世界にその範を示したい』といったのに始まる。米國側ではコロンビア

大学総長バトラー博士などが、すばやくこれを取りあげて問題としたのである。

第二、米仏間の仲裁裁判条約は、どうせ本年の二月二十七日に満期になるのであるから（英国とのものは六月四日、日本とのものは八月廿四日何れも満期になる）これが改訂は必要なことであり、仏国外相ブリアン氏はこの世論につられて昨年六月に条約案を草して、これを米国国務省に送致した。米国国務省では予め準備が出来て居らなかったか、大分その返事を遅らせて、半年を経た暮の十二月廿八日に至って仏国に回答を送った。それに対して仏国では折り返し本年一月五日にこれに答え、米国側では再び一月十一日にこれを批評し、米国側の意見を述べている。これが一月中旬までの経過である。

第三、これ等の応酬の文書によって見ると、始めフランス側では不戦条約を米仏両国間だけで結ぶことを提案したのだが、米国側では両国間だけにしないで、多辺的なものとし、米、英、仏、独、伊、日の六ヶ国ぐらいでこの不戦条約を結びたいという意志を発表した。これに対しては仏国側は異議なく賛成することになった。

第四、この点だけは両国に諒解が出来たが、併し非認すべき戦争の定義について、両国の間に意見の不一致が出来た。仏国側は六月の第一回の提案では総べての戦争を排する立前であつたのが、その後は『侵略的戦争』に限ってこれを排することにした。仏国としては二ヶ国だけの条約

ならばだが、多边的になるのならば、国際聯盟の關係からもこれは必要であるといっている。これに対して米国は『是非無条件の戦争廃止に同意しろ』と主張している。

第五、米仏間の交渉文書にはまだ現れていないが、日本側に米国から提示した条約案だと新聞の発表するところでは、不戦条約中の一部を形成する仲裁条約については米国側では三つの問題を仲裁から除外している。三つとは（イ）国内管轄に属する事項（ロ）モンロー主義（ハ）第三国の利益に関する事これである。

以上が目下問題になっている不戦条約の概要である。

六 仲裁条約と米国上院の關係

不戦条約案の内容を觀て、われ等は直ちに数個の感想の起るを禁じ得ない。

第一にはこの不戦条約に対して、米国政府が比較的強い立場に立つて居ることである。なぜならばこの不戦条約の声は、米国政府自身が起したものでなくて、その起原が上院にあるからである。誰も知るように米国の上院がその有する条約締結權について極めて神経過敏であるのは有名な事実である。上院の感情を顧慮せず外国と交渉した条約案が多く失敗に歸したのは、米国の事情に通ずるものの何人も知るところである。ウィルソンの国際聯盟案などがその最も大な

る一例である。

不思議なことには現に改訂しようとしている仲裁裁判条約が又この上院の一喝に会したことである。一九〇七年にヘーグ【Hague ハーグ】会議は仲裁裁判に関する一の模範条約案を草して、各国がこれを採用するに委した。それは外交によつて解決し得ない事件は、これをヘーグ仲裁裁判所に回附することを規定するものである。当時の米王国務長官ヘー氏は、この案によつて数国との間に仲裁条約を結び、大統領ルーズベルト氏の手により上院に回附した。

然るに上院はこの条約案によると、ヘーグに回附さるべき事件は一々上院に附議さるる必要なく、大統領の意志によつて直ちに回附し得べく、かくては上院の存在を無視さるる恐れあるとてこれに反対し、ルーズベルト氏が種々説明するも諾かず【領かず】、ついにその文中に“special agreement”とあるを“treaty”に直し、これを上院に諮らざるを得ざるに至らしたのである。ルーズベルト氏はこの上院の態度に対して非常に憤慨し、それ等の条約に関する交渉を打切つてしまつたが、その後ルート氏が国務長官となるに及んで、上院の意を汲んで、一九〇九年に亘つて日、英、仏その他十六ヶ国と仲裁裁判条約を締結したのである。その後一九一四年に至つて国務長官ブライアンが、更に二十個の新仲裁条約案を草して上院に回附したのは人の知るところである。

米国上院が条約権に対してかかる態度を有する以上、如何なる条約についても上院の態度が最

も重要である。然るに米国上院の関する限り不戦条約案は熟している。今のところ米国議会には三つの非戦案が出ている。二つは上院にあつてボラー、キャッバー両氏の決議案、一つは下院にあつてバートン氏の案である。これ等については今一々説明する暇はないが、非戦論は今米国において最も人気ある題目であることだけは云い得る。

ただ今後、この問題について法律的解釈を中心に尚種々な論争があり得るであらう。即ち米国の憲法によれば開戦の権利は議會に存する。議會が適当なりとする時に、いつでも開戦を宣し得るのである。現在の議會は将来の議會を縛する権利はない。少なくともこうした問題について縛する権利はない。これが不戦条約に対する法律的反対論の根拠である。

七 米国案による除外例の矛盾

米国の不戦条約案を見て第二に感ずることは、米国が（一）国内問題（二）モンロー主義に執着すること如何に大であるかの点である。

現在米仏間の交渉は仏国が非戦条約の目的として『侵略戦争』に限るのに対し、米国は『無条件に戦争を否定』せんとするにある。併しながらこれほど滑稽な交渉は世の中にあるものではない。考えても見給え、米国は既にその条約案の中に三つの除外例を有しているではないか。これ

は仏国の条件よりも更に大なる条件である。自身かくの如き極めて大なる除外例を残して居りながら、相手の僅かばかりの条件を云々するに至つては、われ等は全く何の意たるやを知るに苦しむのである。

これを問題を局限して日本と米国の場合にとつてみると、米国が除外する第一項国内管轄に属する事項即ち主に移民問題は、立派になり得る危険を蔵している。われ等はこれ等に関して、米国内から発表された材料を幾つも有している。

第一にわれ等はウィルソン内閣当時の農務長官ハウストン氏が発表した日記を引照することが出来る。同氏は一九一三年に於て加州土地法が通過した当時の米国閣議の模様を書いて、日米戦争に関して多くの議論を闘わしたことを述べている。これについては前項（日米移民問題の重要性）に書いてあるけれども、今一度引用してみる。

四月十三日（一九一三年）（前略）戦争の可能性に就て論議された。大統領ウィルソン氏は戦争はない、あるように思うのは滑稽である、けれども常に警戒して注意している必要はあるといった。海軍長官ダンエル氏は海軍部内の説だとして『米国は従来防備して来なかつたから、日本はヒリッピン、ハワイ及びアラスカをとることが出来る』といった。ウィルソン氏は『とることは出来るであろう、併し結局米国は前進するから、これを永遠に保持することは出来

ぬであろう』といった。予は『それは欧州諸国の政策及び野心によつて分れる。又彼等が日本の側につくかによつて決するものである』と述べた。大統領ウイルソン氏は日米戦争のなことを繰り返した。

四月十六日（前略）対日回答について、われ等ら再び日本がとるであろうところの道について考慮した。大統領は氏が決して戦争という如き罪惡的思想を真劍に考えているのではないことを述べた。暫らくして陸軍長官ガリソン氏は『戦争の可能性はないけれども、ヒリッピンについて参謀本部が研究した結果、軍艦が支那方面から来ても、米国は同所を少なくとも一箇年持ちこたえ得るように防備をせねばならぬ』と述べた。（後略）

これ等の日記によつても、米国の閣議においてすらも移民問題を中心に、日米戦争が話題になったことを知るべきである。

その後移民問題が戦争説になったことはあげて数えることが出来ないほどである。埴原大使のグレーヴ・コンセンセンス【grave consequences】の文字が如何に米国上院で戦争熱を生んだかは、何人も知るところである。またワシントン会議——大正十一年頃に米国が日本を恐れ、米国の海軍が真劍に日本に対して備えたのは、大正十五年秋における例の油田疑獄事件（石油王ドヘニー及び当時の内務長官フォールを中心にする）の公判において、米国海軍省の高官の証言によつて

明らかである。

かくの如くして米国の所謂国内問題は確かに戦争の原因になるものである。これを条約の適用から除外しながら、なお仏国に向つて『無条件の戦争非認』を強要する如きは、ただ滑稽というの外なく、米国の自己中心主義は正当の論理をさえも忘れさせたというの外はない有様である。

八 得手勝手な米国の立場

以上の外もし米国の不戦条約案を一々批評し来たらば、それは相當に矛盾と得手勝手に満ちているものであることが分る。例えば第一に米国が二国間の条約を結ぶのならば、現在の提案は至極結構であるが、然らずして現に主張しているように多辺的な条約を結ぶのであれば、既に存在するところの国際聯盟に加入し、これを利用して同じ目的を達するのが正道である。米国は何故この方法に出ないであらうか。

第二に米国は非戦条約の除外例として『第三国の利益に関する事』を提案しているようである。これは米国の国家的伝統により他国——特に欧州の紛争に巻き込まれることを嫌つた結果であらうが、併しこれを嫌いながらなお数国——殊に欧州の四強国と多角的な条約を結ぼうとすることが、大なる矛盾ではないか。仲裁裁判については如何なる手続きと組織をとるかは尚分明しない

が、併しいずれにしても第二の小規模なる國際聯盟を作ることだけは明らかである。

第三に米国が非戰條約中に除外例を設けることは何としても許すべからざることである。米国は除外例の中にモンロー主義をあげている。もし日本がこれに対して支那が東洋の問題なるが故に、この非戰條約から除外せよといわば、米国はこれを承諾するだろうか。もし米国がモンロー主義は世界の認めるところだといわば、日本も、日本が支那の滿州に対し接壤地として特殊の地位を占めて居るのは、石井・ランシング協定において米国自身が認めたではないかと云い得る。そして石井・ランシング協定が今や破棄されて効力がないと同じく、米国が國際聯盟によつて認められたモンロー主義は、自からそれを拒絶することにより米国として何等の權利が主張出来ない立場になつてゐるのである。

第四に米国が国内問題——移民問題を非戰條約の中に含まし得ないことにより、日本に関する限り殆んど意味をなさないことは前に述べた通りである。これ以外に日米間に戦争を想像せしめる何物がありやは、われ等が謹んでケロッグ長官に問わんとするところである。

九 除外項目に対する私案

かくの如くして米国の不戰條約案は、日本に関する限り極めて不完全であり、かつ矛盾したも

のである。また米国の必要とするものは悉くこれを保留除外しながら、他国に対しては何等の同じ考慮を払わないことは、随分わが僥倖手な提案である。この点は冷静に考える時に米国と雖も認めざるを得まいと思う。

併しながらただここに注意すべきことは、實際政治の問題として、米国の国情と輿論はこの例外なくして他国と非戦条約を結ぶことが甚だ困難なる一事である。それが如何なる内閣にもせよ、モンロー主義或は移民問題等について、第三者の裁断に服する如き条約を締結したとすれば、米国民は一たまりもなくこれを一蹴するは明らかである。これは善悪可否の問題でなくて、事實の問題である。そして真面目なる政治家の仕事は、現状に処してベストを得るにあるとすれば、われ等は一方米国人にその主張が極めて得手勝手であつて、到底長く世界の承認するところとならざる事實を教えながら、他方この暗礁を避けて最善のものを得るの外はないと思うのである。何故ならばサムシングはナッシングよりベターだからである。

そこで私は私の主張に帰るが、私は前に述べた理由によつて日米間に非戦条約の必要はあると思う。故に日本は米国の希望に応じてこれを締結するために誠意を致すべきである。ただ問題は米国が除外せんとする三個の事項についてである。

私はこれについてこれ等の問題を、強制力を有せざる委員会乃至は裁判機関に附することを主

張したいと思う。たとえば移民問題が起つた場合に、これがその委員会に附せられたとする。その委員会は事件を審査してその是非曲直について報告するのである。或は又妥協を勧めるのである。但しこの機関は何等強制力を有さないから、一国がこれについて法律的義務を負う必要はない。世界はこれによつてその事件の内容と可否について知り得ることが出来、かくて輿論によつて事件は是正される仕組なのである。

米国の国民生活にとつて、かりにそのあげたる三個の除外例が如何に高貴なるものであるとしても、これだけの譲歩はしていい筈である。神は米国だけに対して、如何なる身勝手をしていいという寛量を示しては居らない筈である。もし米国の行為によつて、他国民が非常な苦痛と国辱を受けるような場合がありとすれば、その行為について、何れに理由ありや、何れが是なるやを明らかにする程度の義務は負うていねばならない筈である。これを明らかにされて尚顧みずとするも、それは米国の勝手である。併し米国が正義に向つて勇敢である以上は、公平なる委員の前に、そのケースを投げ出すだけの公明なる心事はあつて差支えないと信ずるのである。

此強制せざる委員会の件は、非戦条約の一項として記入するも可、或は別な附帯条約にしても可である。この事は日米両国でも必らずしも大なる反対はなからうと思う。日本側からは嘗て移民問題の解決策として金子堅太郎子がアラバマ事件の範に則つて、日米高等委員会設置を提案し

たことがあり、これは米国側の顧みるところとならなかったけれども識者の賛助を得たのであった。また米国の有するブライアン条約は消極的ながらこれである。

更に米国側でも近來やや他国の批評に耳を傾くる傾向がある。現に昨年仏国外相ブリアン氏からの非戦条約の提唱あるや、エドワード・ボックによつてきよきん醸金されたアメリカン・ファウンデーションでは、試みに模範条約を作成した。それは要するに「国際紛争を解決するに三つの機関を使用する、法律的解決、仲裁及び妥協の三つである。そして従來の仲裁条約と異なるところは、国家の名誉或はモンロー主義の如きものも、調停委員会にかけて審議すること、それには各国から代表者二名を出だし、その議長は委員が選択するか、乃至は国際裁判所によつて任命するものである。但しこの委員会は調停はするが、その報告は強制的でない」というのがその要旨である。私は日本は米国との戦争を回避するためには、出来るだけの手段と方法とをとるべきものだと信ずる。そしてそのためには現在是最もいい機会であると考える。(二九二八・一・一六)

●附記 この著の印刷ならんとする三月中旬において、米国は現行ルート高平仲裁条約に代えるに、二つの条約を以てすることを、日本政府に提議して來た。二つの条約の内、一つは先頃調印した米仏仲裁条約と同一の内容を有するもので、他は一九一三年のブライアン条約である。二つの条約を同時に

提議して来た理由は、前者には四つの除外事項があるので、この除外事項を蔽うために、ブライアン条約によって、両国の選出する委員会に、問題を回附し、その調査の終了までは戦争の手段に訴えないことを規定せんとするのである。

これは私が、この論文において主張したところと同じである。それはなお不完全であるけれども、現下の政情において、まず以て最上なるものである。私は日本政府が太平洋の平和維持について常に積極的なことを希望せざるを得ない。(三月廿一日)【1928.3.22】

第六編 支那と日本

支那は日本がなくても存在出来るけれども、日本は支那なくては存在出来ないという。日支親善論者がそういうえば、支那人自身もそういう。この点から支那はその『強さ』を常に日本に示そうとしている。

× ×

日本は支那がなくては存在できない。それはある程度まで事実である。併しこの程度は英国が欧州大陸なくして存在出来ないと同じ程度である。いな、英国がその食糧の三分の二を海外から仰がねばならぬ状態からいっても、英国が欧州大陸に頼る程度は日本が支那に頼る程度どころではない。

× ×

英国が欧州に品物を売らねばならず、また買わねならぬが故に、英国は嘗て欧州大陸に対し、無用に遠慮をし、無用に譲歩せねばならなかつたろうか。事實はそうではない。英国はこれを強味にこそして居つたけれども、弱味だと思つたことはない。彼等は大陸に対しては、昔から進んで指導的位置に立つことを決心して来たのだ。

× ×

日本と支那との貿易は多い。それは事実である。併しそれが故に何故日本が支那に向つて哀を乞わね

ばならぬように思っているものが多いのだろうか。貿易は慈悲ではない。安価だから買うのであるし、儲かるから取引するのである。貿易をするがためには両国の親善的關係は絶対に必要であるが、支那が日本の存在をも左右していると思うのは明らかに間違いだ。

× ×

いずれにしても日本と支那との關係は、從來普通に考えられて居るよりも、今少し深い研究が必要である。それに世界の平和のためにも、日本の将来のためにも、是非共緊切である。この編はこの點の關係を明らかにすることを目的とした。

一 満蒙における日本の『特殊地位』

【満蒙における『特殊地位』と日本の行くべき道——『外交時評』1926.1.15】

一 満蒙に対する日本の決心

日本にもし一個の動かない外交政策がありとするならば、それは対満蒙政策についてである。今のところ政友会と民政党とでは、その対支外交に相当な相違があるように見えるけれども、併し民政党と雖も、かつて満蒙におけるわが国の特殊地位に疑いを持つたことがないのみならず、その目指すところは政友会と少しも異なるところはないのである。

この一つの証拠として、われ等は民政党の前身である憲政党内閣——加藤高明内閣当時における満州出兵を数えることができる。当時の外相は不干渉主義の本家本元といわれる幣原喜重郎氏であつて、始め張作霖の幕下郭松齢が反旗を翻えすや、絶対不干渉主義、非出兵政策をとつて居つたに拘わらず、郭松齢の兵が南満州に入ると直ちに、出兵を断行したのである。それまで加藤内閣の不干渉政策を支持していた新聞も、いよいよ出兵に決定するや、例外なくこの事の已むを得ざる所以を述べて、政府の政策を裏書したのであつた。

元来日本の新聞……というよりも、一般の国民は幼時よりの強烈なる国家的教育の結果、政府

の政策が国内的なる場合には、種々これを批難するけれども、その政策が一転して対外的となる場合には、殆んど是非を論ぜずして政策を後援する傾向がある。この特殊なる傾向は、新聞及び一般の輿論を解剖する時に當つて、考慮に入れねばならぬ問題であるけれども、併しわれ等は、この点を割引してもなお日本の朝野が満蒙に対しては、心より利害を感じ、いかなる犠牲を払つても、その秩序と、日本の特殊地位とは之を保持せざるべからざるを感じ居るのを、満蒙の動乱、それから発した日本出兵に対する世論から觀取し得ると思う。即ち日本の出兵と、これをバックする輿論とは、日本の満蒙に対するデタミニネーション【determination】の表現だと觀ることが出来ると思うのである。

この日本の決心デタミニネーションに対して、當時列国も比較的に好意ある態度に出た。英国の新聞は、殆んど声を合せて、日本の政策を承認した。デーリー・エクスプレス紙は、支那が世界の大市场である点を強調した後『日本は断然たる行動によつて奉天の安全を保持した、それは外国人の利益を保護するのに、やむ得ざる手段である』といい、デーリー・テレグラフ紙も同じような同情ある説をなした。もつとも其後同紙は北京通信員ランドン氏の通信により、多少その態度をかえて、日本が内政に干渉する嫌いありとの説をなし、日本の単独行動を責め、かつその末文には『日本の友邦国は、日本が満州における特殊地位に関する重大なる問題を、今更ら提起する意思はない

が、併し輕卒【率】なる行動は國際的紛議を惹き起さないと限らない』と、結んだが（十二月二十一日のテレグラフ紙社説）、併しこれは見やうによつては、却つて日本の特殊地位を承認したとも云えるのである。殊にデーリー・メールの如きは、之等の論調に數歩を先んじて、日本に滿蒙の統治を委任せよ、とまで主張している。これ等の議論は、後で説くように無論東洋における勞農ロシアの活躍と、それから来る自國の不利を考慮の内に入れてのことであるのは明らかであるが、原因が何れにあるにしても、日本の此地方における地位を認めて居るのは即ち一である。更に米國の新聞も比較的に同情ある態度にいで、ニューヨーク・イヴニング・ポスト紙は、「滿州における過去二十ヶ年の歴史は、全く同じ事を繰り返して居る。日本の出兵は滿州に平和を来さしめんためである」といい、またニューヨーク・タイムス紙も「日本軍の派遣は、滿州に対し利あり」と述べて居る（報知新聞の特電による）。是等によつてみるも、大体に、列國が日本のこの滿蒙に対するデータネションについて、何分の理解を有することは明らかである。

すでに日本國民が滿州に対し異常な決心あり、かつ列強が大体に、日本のこの方面における地位につき理解ありとすれば、問題は、然らば滿蒙における日本の地位は、經濟的に、實質的に、甚だ鞏固なるものなるや否やの實際的問題に帰着する。

二 『特殊地位』の変遷と現在

われ等は記述の順序として、第一に滿蒙における日本の『特殊地位』について、簡単に知つて置く必要がある。日本は日露戦争後、あらゆる機会において、滿蒙における日本の特殊権を主張して来たが、私は之等の内、最も重要なものとして、四つをあげたいと思う。第一は大正四年の所謂二十一ヶ条の要求の中に含まれたもの、第二は大正六年の石井ランシング協約であり、第三には大正七年の四国借款国成立の際主張したもの、第四は大正十一年のワシントン会議における日本の立場である。これ等四回に於ける日本の主張の変化を尋ねて来ると、「特殊地位」の意味も、時勢の変化と共に漸次異なつて居るのを觀取し得るのである。

一、二十一ヶ条要求と滿州の利権 大正四年一月に日本は有名なる所謂二十一ヶ条の要求を支那に致した。この二十一ヶ条（呼び方は正確でないが、普通の用法に従う）の要求の内、滿蒙に關するものは第二項に盛られているが、それは

(一) 旅順租借期限並びに南滿及安奉兩鐵道に關する期限を更に九十九ヶ年間延長すること

(二) 日本人に対し各種商工業の建物の建設又は耕作のため必要なる土地の賃借權又は所有權を許すこと

(三) 日本人が居住往来し各種商工業及其他の業務に従事するを許すこと

(四) 日本人に対し特に指定せる鉱山採掘権を許与すること

(五) 他国人に鐵道敷設権を与え、又は鐵道敷設のため他国より資金を仰ぐとき並に諸税を担保とし他国より借款を起す時は予め日本政府の同意を経べきこと

(六) 政治、財政、軍事に関する顧問、教官を要する場合は日本政府に協議すべきこと

(七) 吉長鐵道の管理經營を九十九年間日本国に委任すること

の七ヶ条である、当時欧州では戦争に忙わしく到底東洋を顧みるに暇がなかつた時であつて、日本が対支要求を、この瞬間に選んだことについて、欧米で兎角の批難があつた程であるから、右の要求の中には、日本が滿蒙において欲する殆んど総べてのものを盛られて居ると見て差支えない。即ち日本が滿蒙において完全に自己の意を行つても、まず以上の条項を出づることがないと見ていい訳である。

然るに事實は以上の七ヶ条も支那の容るるところとならず、結局之等を修正讓歩して、左の如き条約が成立したのである。少しく繁に過ぐるが、滿蒙における現在の所謂「日本の特殊地位」が多くこれを根拠にしているものであるからここに掲げる。

(二) 南滿州及東部内蒙古に関する条約

一、両締盟国は旅順大連の租借期限並南滿州鐵道及安奉鐵道に関する期限を何れも九十九年に延長

すべきことを約す

二、日本国臣民に南滿州に於て各種商工業上の建物を建設するため、又は農業を經營するため必要な土地を商租することを得

三、日本国臣民に南滿州において自由に居住往来し、各種の商工業其他の業務に従事することを得

四、日本国臣民が東部内蒙古に於て支那国々民と合併に依り農業及附随工業の經營をなさんとする時は、支那政府は之を承認すべし

五、支那政府は成るべく速かに外国人の居住貿易のため、自から進みて東部内蒙古における適當なる諸都市を開放すべきことを約す

六、支那国政府は從來支那国と各外国資本家との間に締結したる鉄道借款契約規定事項を標準となし、速やかに吉長鐵道に關する諸協約並契約の根本的改訂を行うべきことを約す

將來支那国政府に於て鐵道借款事項に關し、外国資本家に対し、現在の各鐵道借款契約に比し有利なる條件を付与したる時は日本国の希望により更に前記吉長鐵道借款契約の改訂を行うべし

以上が現存する日支間の条約である。もつとも之については二つの問題が付き纏つて居る。一つは支那がヴェルサイユ會議以來常に主張して来て居るところの該条約【条約】無効論——従つて旅大、南滿鐵道の如きは始めのロシアと支那との租借期限二十五ヶ年間が大正十二年三月まで

で満期になったから、当然支那が回収すべきものであるとの議論であり、他は条約通りに九十九ヶ年の租借が有効なりと解して、しかも此租借は日本の領土権と解すべきや否やの問題である。

この二つの問題は、無論甚だ重要な問題であるけれども、前者の条約無効論に対しては、支那以外の各国にしてこの問題が公然議せられたる国際会議の席上にも、支那の立場を保障したるものなく、かつ實際問題として日本が現在の国際的地歩をしむる間当分この点が問題の焦点になるとは信じ得ない。ただ後者については国際的道徳が今のような傾向で進み、ステータス・クオ現状【status quo】を維持することが、正義なりと解する風潮にある以上、他国の領土内において、一国の主権を認めることについては、将来種々なる解釈が起るものと見ねばならない。併し乍らこれも、私が今論ぜんとする現在の日本の特殊地位については、関する事薄いのであるから、此文では一切省略する。ただ茲では二十一ヶ条要求当時においてすら、日本の希望、即ち原案と、最後通牒を發してまで得た条約とは相当距離があつたことを指摘すれば足るのである。

日本はかくして得た条約上の利権については、かつて其効力を疑つたことはないが、併しワシントン会議において、日本全権幣原氏は「事態の変遷に鑑みて」それ迄留保して居つたところの、
(一) 南満州及び東部内蒙古に於る日本資本家の優先権（四国借款団の取り極めの分に除外す）。(二) 同地方における政治、財政、軍事、警察等の日本人の顧問若しくは教官に関する優先権

の二つはこれを自発的に抛棄したことは、後に説く如くである。

二、石井ランシング協約に現れた日本の地位 その後日本は（寺内内閣）この特殊地位を条文に現す必要から、石井菊次郎氏を米国に送つて、当時の米国々務長官ランシング氏と折衝して石井・ランシング協約を作らしめた。大正六年、欧州大戦が酣の時である。右協約の内容は、合衆国及び日本国両政府は領土相近接する国家の間には特殊の關係を生ずることを承認す、従つて合衆国政府は日本国が支那に於て特殊の利益を有することを承認す、日本の所領に接壤せる地方に於て殊に然りとす

というのが骨子である。『スペシャル・インテレスツ特殊利益』【special interests】ということとは、その字義が示す如く、特殊なる利益、即ち日本のみに許されたる特権という意味に解し得る。併しランシング氏が、米国上院になしたる証言によると同氏の解する特殊利益とは、モンロー主義における——即ち米国がカナダ、メキシコ或はラテン・アメリカに対する特殊關係と同じ地理的の意味であつて、同氏は予は、石井大使に語るに、もし同氏の意味が Paramount interests（最高の利益）であるとすれば、予は此問題について、それ以上を相談することは出来ない。併しもし同氏の意味が、地理的地位を土台にするスペシャル・インテレスツというのであれば、予はそれを覚書きの中に挿入することを考慮するであろうと語つたのである。その時は我等の話題はパラマウント・インテレスツに及び石井氏はモン

ロー主義を引照して、東洋にモンロー主義の必要があるを述べたのである。

予は氏に語るに、『モンロー主義の底に横たわる主義に関して、誤解があるようである』とて、モンロー主義とは合衆国が他のアメリカ共和国に関して優越権或は最高の利益を断言するものに非ず、その目的は外国が、この半球における個々の国に干渉を防ぐにあり、而してその全目的は各共和国の自発的発展の権利を保持するにあると注意したのである。

と述べている。

ランシング氏の当時の解釈はどうでもあつても、この両国の間に、取り代わされたる覚書の中には、*Special interests* に関する字義上の規定なく、従つてこの点は日本が適当に解釈して差支えなかつた筈であつて、仮りにこれをランシング氏の解釈通りに解釈するとしても、日本は満蒙に関する限り、日本自身及び他列強のために、その宗主権と領土的独立について、他国の干渉を却ける義務があることになるのである。但しこの協約は、その後米国内において反対甚しく、折しもワシントン会議の副産物として九ヶ国条約が出来たので、これをして肩代わりせしめ、一九二三年四月十四日を以て、國務長官ヒューズ氏と埴原大使との間に廃棄せられたのである。

三、四国借款国と日本の主張　日本の主張及びその変遷を最も明らかに現したのは四国借款国

成立当時の交渉である。これより先き米国が、ウィルソン内閣時代に、対支六国借款団から脱退したが、その後一九一八年に、再び対支国際借款団を組織すべく、日英仏の三ヶ国に提案した。そしてこの四ヶ国の銀行家は折しも開かれていたパリ講和会議において契約の大綱を決議したが、その重なる要項は、

支那における企業（鉄道を含む）にして、既に具体的に進捗している以外のものは、借款団の共同事業とする事

というにあつた。然るに日本は此決議をなした後で所謂滿蒙除外の提議なるものを提出した、それは

日本は滿蒙に特殊な利益を有するのであるから、この地方における日本の権利及び利益は借款団の共同事業より除外されねばならない（長くなるのと、今一つに判りよくするため意味だけ書く、以下同じ）。というにあつた。問題がこう政治問題、外交問題になると、金融業者の手では間にあわない。そこで交渉は日本政府対英、米、仏三国政府との間で行われることになった。英国政府が、その時、日本の立場に反対した論拠に曰く、

今回の借款団の目的は、特殊利権範囲内における特殊要求を排拒して、支那全体を完全に開放するにある。この目的は各当事者がその勢力範囲内における如何なる經濟上の優先権をも犠牲に供するので

なければ、之を達成することは出来ない。滿蒙は支那における重要な地域であるから、之を除外する如きは、借款団そのものを否定するに等しい。

というのである。

これに対して日本は、その主張を和げて、再び

日本政府はパリ―決議を確認する。但し右決議の確認は、南滿州及び東部内蒙古における日本の特殊權利及び利益に何等不利なる影響を及ぼすことなしと解釈す。

との意味の覚書きを交附したのである。

併し乍ら英国政府はこれをも承認しなかった。当時戦争直後で日英同盟が最も威力を示し、兩國の關係は最も親善な際であつたから、米國は自分では成るべく手控えて、日本に対する交渉は重に【主に】英國を矢表に立てていた、この英國は再び日本の立場を反駁し問題は益々もつれて、中々解決しない。借款団の主張者であるモルガン商会のラモント氏は、ために自から來朝して、種々日本側と協議した。そこで日本側は三度對案を出して、

南滿州及び東部内蒙古に関する借款で、帝國の國防、並びに國民の經濟的安全を確保する上において、重大なる障害を來たすと認めらるるのについては、帝國政府において、その安全を保障するに必要な措置をとるの自由を留保する。

との覚書を提議したが、これすらも英、米、兩國の賛同するところならず、日本は大勢自己に非なりとみて、結局一九二〇年五月十日、何等の留保を附せずして新借款団に加入することとなつたのである。かくして日本が滿蒙において有する利権として、列國に認められたるものは、

一、南滿州鐵道及び現在の支線並に附帶事業の鉅山

二、吉林會寧、鄭家屯洮南、長春洮南、開原海龍吉林、吉林長春、新民屯奉天及び四平街鄭家屯、以上の諸鐵道

に限局されたのである。かの洮南熱河鐵道、及び同鐵道の一地点より海港に至る鐵道の如きは、日本が最後まで除外を主張したけれども、ついに成功することが出来なかつたのである。

四、九ヶ国條約に現れたる日本の態度 一九二二年のワシントン會議は、其召集の目的が、支那問題を解決するためにあつたので、最近における對支關係の總勘定といつてもいい。同會議に於いて、九ヶ国條約は成立した。九ヶ国條約とは何ぞやといえば、要するに『支那の獨立保全を保障し、商業の機會均等主義を確立』したものであつて、その二条には

第二条 締約國は前項に宣明せられたる原則に違反し、もしくは之を害すべき如何なる條約、協定、取極或は了解を、相互間に又は各別若しくは協同に、他の一國若しくは數國と締結せざるべきことを約定す。

と申し合せ、更に一国の所謂勢力範圍を排しては

第四 締約国は各自国民相互間の約定にして、支那領土の一定の地方において、勢力範圍を創定し、若くは實際上排他的機会の享有を規定せんとするものを支持せざることを約定すと規定している。

こう門戸開放主義を明らかにし、勢力範圍を排しているに加えて、前の外相である幣原喜重郎氏は一九二三年二月四日ワシントン會議第六回總會において、(一) 南滿州及び東部内蒙古における鐵道敷設のための借款、(二) 右地域における課税を担保とする借款に関し特に日本資本家のみに与えられたる優先權を放棄し、(前記四国借款團に規定せられたるものは除く)、かつ、南滿州における政治、財政、軍事若くは警察につき、日本人顧問若くは警官傭聘をなさしむべき日本の優先權をも放棄することを声明したのである。

これについて思出すのは、当時滿州出兵論が盛んであつた時に、幣原前外相は政友本党の代表者の訪問を受け、その質問に対して『日本の滿州における特殊地位を、もつと広汎なる意味に解する』と述べたことである。日本の外相として、……ワシントン會議において以上の声明をなした全權として、日本の『特殊地位』を如何なる程度までに広汎に解するのであるか、またこれを何の程度まで國際的に——国内政治のためでなく——声明し得るかは、当時私の興味を以て聞か

んとしたところであつた。

何れにしても日本の満蒙における『特殊地位』は、条約的、外交的ではなくて、それは寧ろ政治的であり、経済的であり、歴史的であることが、以上の短かい記述によつて明らかになつたと思う。政友会及び軍人の一部等が『特殊地位』について、余りに、大声叱呼するに對しては、あり触れた事実ではあるけれども、一応これを明らかにして置く必要を感じるのである。

三 振わざる日本の経済的勢力

他国から得る一国の利益は、如何なる場合にも経済的以外ではあり得ない。日本の満州における特殊地位が、どう広汎に解されたところで、それは『国防』という如き不時の場合の用意を除けば、殆んど全部経済問題に帰するのである。即ち満蒙における特殊地位が、日本に齎らす経済的利益如何。これが満蒙を計る最大なる尺度でなければならぬ。

私は二三年前、続けて満州方面を旅行した。そして内地においては事情に通ぜざる者は、日本領土の延長ぐらゐに思つて居る満州における日本人の経済的勢力が、満鉄を外にしては、甚だ薄弱であることに喫驚した次第であつた。即ち満州における日本の勢力は、ただ一個の満鉄によつて支持されて居る有様であつて、他は殆んど悉くこれに附随する消費機関に過ぎず、何等見る

に足るものがないのに失望したのであった。顧みれば南滿鐵道はロシアから繼承されて以来、もう約二十年になる。この間に会社の投資額は約一億円から、五億五千万円、即ち五倍半に増している。これ等は会社の事業をつき交ぜたものであるが、これを単に鐵道事業だけから見ると、始めの約二千五百万円から目下の約二億円、即ち八倍以上の發展を上げているのである。また之を港灣（重に大連港）に見ても、その設備は始めの六百万円から、今や四千万円に達し、七倍の増加である。關東庁の歲計は明治四十年度の約五千万円から、今や二億円となり、四倍に増した訳である。

かくの如く滿鉄を中心にする事業が非常なる膨張をなしているに拘わらず、これが運用をなすべき日本人人口の増加は甚だ思わしくない。即ち南滿州全体として

大正八年 十四万人（約） 大正十二年 十四万五千人（約）

という数字を示し、大正十、十一年頃増加した人口は再び減少しつつあるのである。（大正十四年版滿蒙年鑑による）。之等の事實は、一方事業の投資、会社の資本家が急激なる膨脹發展をなしつつある時に、日本人には依然旧態を守つて、反撥力を示さず、これによつて利するものは支那人に外ならぬことを如実に示しているのである。

しかも滿州において日本の絶対なる經濟的勢力を一身に負う滿鉄は、果して万代不易の地歩を

占めて居るであらうか。目前の問題としては、一国の勢力なり発展なりは一日にして壞れるものではない。従つてわれ等が、ここに満鉄の将来を論ずるのは、明年や明後年の問題としてでなくて、将来を引つくるため重大なる国策としてであるのは無論である。

満鉄の前途をのぞんで私は二つの暗影を認める。一つは内よりのもので、他は外よりのものである。内よりという意味は満鉄自体が凋落する機会がないかどうかの問題である。もし單なる經濟問題よりいへば、満鉄は相当鞏固なる地歩を占めてゐる。即ち明治四十一年以来、収入一〇〇比率に對し、支出は八〇乃至八五位いのところを上下し、その株主に對する配当も、大体一割程度を持續し、今後培養線が出来るに従つて収入は多くなるであらう。併し乍らこれを更に内容に亘つて調査してみると、營業として立ち行くものは鐵道と鋳業（撫順炭坑）のみであつて、他の事業は満鉄が従來種々の後援をなすに拘わらず、殆んど、すべてが収支つぐなわなない状態である。それ計りではない。日本の朝野は、滿蒙問題に對しては、抽象的且つ政治的の意味で力瘤は入れるけれども、真正に滿州——南滿鐵道の主要性を認めて居らぬようである。内地の政変は眞先に之に影響して、明治四十年より二十年を経ざるに社長に代えること正に十回、いずれの政変も、日本の發展のために考慮するよりは、先ず如何にして軍資金を得んかに苦心してゐる状態であつて、この前の社長時代に、機密費から支出した五十万円の金が行衛不明になつたのは、まだ

耳新らしい事実である。一個の商機関——満蒙における日本の運命を背負っている謂わば大黒柱を、政争と、野心家の政策に使用し、しかも一面前記の如く幹部の動搖更迭が頻々たるにおいて、将来堅実なる發展を期待し得るであろうか。これ私が『内部からの危惧』と称する所以である。

第二の『外部からの危惧』というのは、支那の日本に対する態度である。私がかつて、天津で前大總統黎元洪氏を訪問した時に、同氏は、『日支親善の第一の前提は日本が旅大を返還することだ』とて、『日本では子供を教育するのに、旅大を日本の国と同じ色の地図にして教えている。支那では又支那で、旅順大連は立派に支那のものだが、日本から無理非道にとられたものだ」と子供に教えて、子供はそう信じている、これでは永遠に日支の親善は無理だろうではないか』と語っていた。これ等の言葉は多少割引して聞く必要のあるのは勿論であるが、併し明白なる一事は、支那は機会ある毎に、満鉄旅大の回収を主張してやまないであろうことこれである。日本がこれに對し、容易に譲つて、満蒙の既得権を放棄すべしとは考え得ないが、併し、かつては日本の意思如何に拘らず、時代の力が青島還附をさせた事実もある。われ等は如何なる場合に処しても、あわてることのない準備を必要とする。

問題はそれ計りではない。元來北部の支那人は、南部のそれよりも鈍重である。これを世紀的覺醒の意味からいえば、北支那の国民は、南支那の国民より遙かに遅れているといつていい。従

つて労働争議の如きも、南支那に普通見るところのものが、北支那には余り見ない状態である。併し乍らわれ等は永遠にかくあるべしとは期待出来ない。動くには遅い支那ではあるけれども、労働争議の如きは案外に激しい伝染的性質を有するのは、われ等の経験するところである。もし南部の争議が北部に移動し来たる如きことあらば、これがため蒙る日本の影響は甚大なることを覚悟せねばならぬ。殊に支那においては労働争議に人種的——正確に言えば国民的感情が交るを常とする。この場合において最も打撃を蒙るものは、人間動力を支那人に仰いでいる日本人の事業でなければならない。将来を考えるものは、この点も今から考慮の外に置く事はできないのである。

四 労働口シア再び擡頭す

私は前項に満州における日本人の経済力が決して樂觀に値せずとて、南満鉄道のことを引照した。満鉄を唯一無二の勢力とする満州において、一度この機関にして躓かんか、日本の勢力は根こそぎに仆るべきを警告せんがためである。これに若し朝鮮銀行東洋拓殖会社等の不良貸付、困難なる跡始末等を附記すれば、私の議論は、やや詳細に満州における日本人経済の不振を写すことが出来るであろうけれども、私のこの文の目的は、満蒙を大観せんとするにあつて、一つの問

題について詳しく論ずるためでない。私は更に同地方における諸列強の利害関係について一瞥を与えなければならぬ。

私はこれを書くに当って、バートランド・ラッセル氏の“The Prospects of Industrial Civilization”中の一節を想起する。同氏は曰く、

弱く力無き支那は、世界政治の中心である。目下の競争は米国と日本であつて、ワシントン會議までは英国は不承々に日本側であつた。しかしロシアと支那自身はこの競争に数えられて居らない。けれども結局においてこの争闘の形は變つて来るであらう

ラッセル氏はこう書いて『近い将来に支那をエキスパロイト【exploit】すべき三国間の協約が出来てあらうが、併し結局日本と米国との間に戦争があり得る。そして従来日本が支那に持つて居つたものを米国に与えてしまふだらう』と云い、繰り返し『三国の帝国主義は遅かれ早かれ戦争を惹起せずには置かぬ、そして結局米国一人の勝ちに歸してしまふことは確實である』と書いて居る。（同書九十六頁）

米国が滿州に現れたことは既に以前からである。門戸開放主義聲明に始めて、錦愛鐵道問題、東支鐵道共同管理時代にスチーブンス氏の活動等はそれである。その貿易から見ても、大正二年には第四位で二百六十万海關両しかなかったのに、大正六、七、八年には第二位になり、大正十一

年には第三位で貿易額二千万海關兩以上に達したのである。試みにこれを日、米、英三国の対滿貿易につき大正二年から大正十一年の増加割合を見れば、

日本　約二・〇三倍　米國　約七・七〇倍　英國　約三・二五倍

になつて居り、その額においては未だ到底日本には及ばないけれども、将来の競争對手として確かに苦手であるのは事實である。

併し乍ら、ラッセル氏が、その本を書いた当時、（一九二三年）には、同氏の論じた如く全く顔を出して居らなかつたロシアが、其後急に擡頭したのは、ラッセル氏自身も恐らくは意外とするところであらう。一時、国内の事情の故に手が出なかつた勞農ロシアは、今や全力をあげて、その東方政策を行わんとしつつあるように見える。ロシアの東方政策は、何百年の久しき歴史を有するものである。この長い歴史に培われた国民が、たとえ其政体が変更したからとて、長年のアンビション [ambition] を放棄するとは信じ得ない。果然、国内が一応治まると、その手は自然に支那に伸びて来た。

その伸ばした手が真先きに打突かつたのは、滿州においては日本であつた。ロシアの利益を代表する東支鐵道と、日本を代表する南滿鐵道とは、經濟上自然競争の立場に立つた。最近に滿州の特産物たるソーヤ・ビーンズの荷物の取り合いなどにも、両者の真劍味が現れていた。ロシア

としてはハルビンから、ウスリー鉄道を通つてウラジオに積み出すことが有利であるに対して、日本側としては長春から大連に送ることに努力するのは当然であつた。暫らくは火の出るような運賃その他の競争が続いて、ハルビンにおいて三社の代表が集まつて協議したけれども、纏まらなかつたのであつた。

この競争最中に、更に労農ロシアを刺戟したのは満鉄が洮南府から齊々哈爾チハルへ通ずる支那鉄道の建設を東三省政府から引き受けたことである。この洮齊鉄道は、齊々哈爾から洮南を経て、満鉄本線に接し得るものであつて、その附近の最も豊かなる農産物は、かくして東支鉄道に行かずして、満鉄に来ることになるのである。驚いたのはロシアである。特にその線はロシアが、戦前は敷設権利を得て居つたものであるから、口惜しさ尤ともである。それも労農ロシアが、もし四国借款団の一員でもあれば、文句のつけようもあろうが、この辺に關係がないのでどうする訳にも行かない。何回か支那政府に抗議を提出したけれども流石にこれ計りはどうにもならない次第である。

こうして労農ロシアは、此問題では少しくひけを取つたけれども、気長く執拗にやるのがロシア人の特長である。殊に今のところ欧州方面は手の下しようがない。英国との關係は労働党内閣が没落し以来、仲違いの状態であり、ドイツはロシアの希望を裏切つて、國際聯盟に入ることに

なつてしまつた。最近トルコ同盟が出来たが、併しこれは寧ろ英国その他に對する面當てのためであつて、自由に策を弄し得る余地は少ない。残るのは東洋のみである。況んや前に書いた通りロシア人、そのものが伝統的に東洋發展については、押さえへからざる野心を持つて居る上に支那は麻の如く乱れて居る。こうした機會を利用するのは彼等が最も得意とする壇上ではないか。彼等が東洋に力を入れる理由は容易に想像し得るのである。

ロシアの活躍について從來最も苦い經驗を有するのは英国である。近東アジア及び印度方面においてボルシェヴィキ宣伝に悩まされたのは、ロシア鼯鼠の前首相マクドナルド氏すらも言明して、その不法を鳴らした程で、今回の支那における彼等の活動に神經を尖らしているのは無理のない次第である。この辺の事情を呑み込むと、日本の満州出兵に對して、かつて類例のない程の同情を示したのも合点が行く筈である。

われ等は支那において英国を敵とする必要がないと同様に、ロシアに對しても、少しも敵意を挿む必要はないと思う。両国の接するところ利益の衝突は当然起り得る。けれどもこの衝突は經濟的方法により解決し得るのである。殊にロシアには資本もなければ兵力もない。有するのはボルシェヴィズム宣伝の武器のみである。日本がボルシェヴィズムの宣伝を防ぐために増兵乃至は武力的對抗手段を講ずる如きことあらば、愚これより甚だしきはないと思う。

五 満蒙調査委員会の提唱

私は最後に満蒙に対する専門調査委員会の設立を日本政府に提議する。この事については、私は何回も発表したことがあるが、この文を結ぶに当って、これを繰り返すの徒爾ならざるを感じる。

これを主張する第一の理由は、此際日本が根本的の対満蒙政策を樹立するの要あることを思うからである。始めに書いたように、日本人は満蒙を日本の存在と結びつけて考える程重大視しているようではあるが、實際的には何等一貫した建設的な政策がないといえる。無論そこには概念的な政策はあるが、これ等は日露戦後軍閥が、その世間見ずの頭から作つたものであつて、平時の際には通用せぬものである。われ等の欲するのは平和時における発展策であつて、軍人がある職掌柄自然に考えるであらうところの非常時における対応策ではない。否、われ等から見れば、従来の対満蒙策が非常時の際の対応策にのみ目標して居つたが故に、今の如き行き詰りを来したものであつて、われ等はこの点を根本的に変改の必要があると思う。即ち経済的發展を主張とする新政策の樹立である。満州にはこの点が著るしく欠けていて、現に金融的系統の問題、兌換券の問題等も、なお宙ぶらリンの有様なのである。

第二の理由は、前述の如くに日露戦争後根本的な研究をなさず、一時的の弥縫手段^{びほう}を講じて来た結果は、満州においては全く統一を欠いている。関東庁と総領事館と、満鉄と、これに加えて陸軍とが、各自に自己の権限の中に立てこもつて、異なつた見解と命令の下に動いている。これ等を如何にするかが研究調査の題目である。

第三には、日本人が同地方に経済的發展をするためには如何にするかの問題である。最近の米国の新聞クリスチャン・サイエンス・モニターには同紙の記者の満州觀を載しているが、其一節に、『満州において支那人が一千一百万人居住するに對し、ロシア人が二十万人、日本人が十七万五千人ある。ロシアなり日本なりは、絶えず増加しているこの支那人の人口を追いやる事が出来るか。追いやることが出来るとして、さてこの二国の何れかが満州を平和に治めることが出来るか』と自から問い、自から答えて曰く『支那人は結局勝つと思う、その驚くべき沢山の人間を以て、無抵抗主義をとつて居ることによつて結局勝利を得ると思う』といつてゐる。勝敗は此場合問題ではない。日本は自身が存在するために、如何に満蒙を利用すべきか。内地の者が投資乃至は移住する方法ありや、是等が研究すべき問題である。

第四は新しき國際關係に處する道如何である。前に引照した記者は別の章において『日本とロシアとは決して融和せぬであらう、何故ならば彼等の利益は對立的であり、又世襲的に敵である

關係あり、對手を信用する感情に欠けている』と述べている。日本はロシアとは果して手を握るを得ざるや否や。ロシアの擡頭に対して、米國、英國に対しては如何にすべきか。是等も当然調査を要する案件であつて、今にして改め大策を決定せずんば、日本は國運の前途に重要な支障を來すと思う。

然らば問題は、その専門委員會の組織の問題である。英國、米國及び仏、独等においてこそ、諸種の委員會の価値は常に認められ、その効績【功績】も大であるけれども、日本においては嘗て委員會が成功【成功】したことがないのである。もしこの委員會も所謂名士を並べた名譽職の集りにして単に従來の委員會の如きものであれば、それは有害無益なるものだと思う。私の主張する委員會は、經濟眼を有して、國際主義的、自由主義的なる立場にある人を中心とし、これに二三人の高級補助者を附する事、かのドーズ委員會の如くすべしと思う。

不幸にして、もし是等の委員會が調査の結果何等の結果を得ることがないにしても、國論を、今の空虚なる對滿州輿論より、建設的にして健全なる方面に向けしむるに効果があると思うのである。

第八編 日本に行くべき道

日本はどこに行く。

日本は今のところ友人がない。かつては米国が親友であつたことがあつた。かつては又英国が盟友であつたこともあつた。これ等は、もう過去の夢である。

現在、日本の最も近い友人はロシアである。世界に疎まれ、もしくは恐れられたこの二国は何時の間にか、手を握ろうする仲にまでなつてゐる。そこにはまだ打ち解けない不安が双方の胸の中に残つてゐるけれども、併し独りぼっちの境遇は、漸次に一方の他方に対する同情を起させてゐる。やもめと後家の同情同慰が、この両国の関係だといつていいと思う。

× ×

ロシアが世界に何で疎んぜられているかはここで説くまでもない。日本は何故世界は恐れられているか。この原因を単は日本が強くなつたことだけに帰するのは、自己催眠であり、自己満足である。日本の持つてゐる刺が世界の日本に対する懸念だ。刺とは何か。具体的には軍備であり、精神的には自己の意志を以て、他を征服し、他を統括しようとする武人的傾向である。

× ×

極端なる悲觀論者に私は同じない。日本の国土が存する以上、日本は決して亡びる恐れはない。将来日本に内在的理由によらずして一寸の地と雖も失う恐れはない。何かというと『亡国』だ、『国危うし』という人々の言に、私は些少の同情もない。

x x

が、併し日本が何処に行くかによつて、この国民の幸福と不幸は分れるのである。日本の行くべき道は、ただ二つある。(一)は国民個人々々の幸福を目標として進むか。(二)は国家を唯一の目標として、個人の幸福などは第二義的なものにするかだ。協調か、単独か、平和か戦争か、個人か国家か。……日本はどこに行くであろうか。

一 軍備撤廃の期到る

一 軍備に満足の境地なし

『軍備というものは、自国が持てば正當に自身を保護するに過ぎないものであるが、他国が持てば、悉く自国を脅威するものである』とエドワード・グレーが云った。長年英国の外交を双肩に負つて、人以上に駆引も、策略も用いた實際政治家であるかれの眼にすらも、各国人が自国の事は棚にあげて、他国の軍備だけに眼をとがらす心理状態が、こゝう皮肉に映つたものなのである。

一国の軍備というものは、どの点まで防禦的で、どの点まで攻勢的であるか。また『軍備』そのものの限界は果して何処にあるのか。ジュネーヴにおいてフランスの代表ボンクールが主張したように、軍備というものは結局戦時における最終的戦闘能力を意味するものであるか、それとも同じ頃、英国の代表セシルが述べたように、『軍備』の意味は、平時における兵力に制限されるべきものであるか。こうした議論を闘わせれば、その国と、その人の立場によつて、到底帰一するところがないであらう。

併しながら、これ等の議論は何れにもあれ、ただ一つ明白なる事實は、軍備は対手国——想定敵国なくしては、存在の理由なきものである一事である。もし一国にして絶対に襲撃される恐れ

のない位置にあるか、乃至は襲撃して来る国がないというような場合には、軍備の必要は全くないといえる。これに反して、一国が目を八方に配つて、何れの国に対しても恐怖を感じるような場合においては、その国の国防は幾らあつても、これで満足という限界はないわけである。

この事は仮りに日本の例をとつてみれば、もつと明らかになる。たとえば日本の海軍が米国のそれを対手にして軍備を張つて居るとする。そうした場合には米国の五に対し、日本が三の比率で、とに角最低限度の防備を保持し得る。ところがここに、もし英国が現れて、シンガポールの進出及びアングロサクソンの提携その他の関係から、日本はこれに対しても備えなければならぬといふならば、日本の海軍はこの二国を対手にするだけの勢力を必要とするのである。これに加えて更にもし勞農ロシアをも考慮に入れ、或は又擡頭した支那の軍隊にも備えねばならぬとするならば、その必要軍備の範圍は、止まるところなく広がらねばならぬ筈である。

こうして一国には国防に関する限り満足というものがない。自国が仮りに十の勢力を有して居る場合、突然對手が二十の勢力を持つにおいては、その十の勢力は殆んど無力同様になつてしまふのである。日本の議會などでは、よく『国防の方針を確定せよ』などというけれども、元來が對手次第のものであつて、對手によつて当方の方針が異ならざるを得ざる以上、千古不變の国防方針などというものが有り得る筈がない。

然らばその国防方針というものは如何にして決定するかというと、それは他国に対するその国民の心の持ち方によつて決定するといつてもいいのである。大国と大国とが国境を接して居つても、それは必らずしも軍備の競争を惹き起さないことは、米國とカナダの国境には百数十年以來、全く軍備がなく、三千マイル以上の国境を無防備に露出しておいて、かつて兩國共不安を感じたことがないのにも明らかなである。近來米國は軍国的國家の色彩が漸く明らかになつて來たけれども、カナダ國民自身はこれに對し何等の脅威を感じて居らない。これはカナダは隣國の米國が、同國を侵略することのないことを確信しているからである。しかもこの隣國に不安を感じない兩國は、却つて四千マイルを隔てた日本に對しては、いづれも疑心暗鬼の念にかられて、絶えずその國防の足らざらんことを懼れているのは何故であるか。それは國防というものが地理的關係で生れるものであるよりは、その國民が他國民に對する信不信の心的境地から生れる警戒の念に發するが故でなければならぬ。

こうして國防が全く相對的なものである事、そしてこの國防方針は、その時の國際的事情及び對手國に對する觀察の如何によつて異なつて來るものであるとすれば、この國防方針の樹立は、軍人という衝突した場合における軍事的技術家——そして多くの場合それだけしか分らない人々に委すべきものでなくて、絶えず國際狀態と外國の事情を研究している國際問題研究家の領分で

あることを知ることが出来る筈である。

わたしは日本の不幸、そして各国の不幸は、国防の事を、余りに軍事的技術家に任せすぎたことにあると思う。今こそかれ等の手から経済的に、産業的に最も重要であるこれ等の問題を取りあげて、改めて限られたる技術的方面のみを彼等に托すべきである。

これだけを前提として本論に入る。

二 日本を奪う国があるか

私は軍備撤廃の期が到つた理由として、大まかに二つをあげる。

第一は最近の国際的輿論の変化は、大袈裟な軍事的行動を許さない。かりに軍事的行動を起すとしても、それが国家に齎らす結果は、頗ぶる有害にして、却つて国家の発展を妨げるものである。第二に、もし世界が既に大袈裟な軍事的行動を許さず、これを行使する機会が少ないとすれば、日本の如き自然の富源のない国においては、産業立国の趣意からいつても、徹底的に軍備を縮少することを以て、国家の大を来たす所以である。これが私の主張する二つの理由である。こう二つの理由を並べると、私は猛烈なる抗議が、第一の理由に集まるのを直感する。世界の軍備が大戦後、殆んど縮少されずに持続されて居るのは、何人にも明白なる事実であるに拘わらず、何を

以て『軍事的行動が許されない』というかと。私はこの種の論者に対して、改めて国際政治の動きを直視すべきことを希望せざるを得ない。

この事を述べる前に、私は軍備拡張論者も、軍備が領土を拡大する道具としては、すでに時代に適せざるものであることだけは同意される思う。日本の一部の論者は近代においても、そうしたことを夢想しているものがないではなかった。サイベリヤ【シベリア】に対して各国との諒解以上の兵力を送ったのも、こうした思想を懐いている者の考えが、含まれて居らないとは断言し得ない。また青島に軍備行政を敷いた当時は、それが結局日本の領土となるであろうことを信じた者は少なくなかった筈である。然るにこれ等の計画乃至は夢想は、時の流れのために無惨にも破られた。青島が日本の手から挽ぎ取られて行つたのは無論として、二港事件の保証として、最後まで握っていた北樺太までが、いつの間にか前の所有者であるロシヤの手に帰ってしまったではないか。

成程北樺太には、その代りに少しの利権は残った。併しこれはいうに足りない額であつて、當時の臨時軍事費の支出九億余万円に比すれば十分の一にも足らないものである。即ち始めから出兵せずしてこれを平和的な交渉を以てコンセッション【concession】を得たとすれば、現に有する利権の数倍のものを手に入れることが出来たに相違なく、軍隊を以て領土或は特権を得ることは、

どの道算盤珠にはのらないものである。

もし軍隊が侵略的な目的のためでないとするならば——ワシントン會議に英國の五に対し日本が三で満足したことが、既に日本が防禦的軍備を是認した証拠である——残る問題は、日本は軍備を撤廃すれば、何処からか侵略される恐れがあるか否かの点に帰着する。そして私の議論がもし侵略されないという結論を生ずれば、軍備撤廃の原則だけは確立して、残るは如何にして、何時、そして何の程度に撤廃するかという方法論のみが残る訳である。そこで私は、も一度議論の始めに帰って、一つの疑問を提出する。『もし日本が全く軍備を撤廃すれば、何処かの国が日本をとつてしまうのか』と。

こうした疑問が、今から三十年以前、否十五年以前に発せられたとするならば、それは殆んど問題にもならないほどな愚問である。日本の本土は幸いにして完全であるにしても、その周囲は列強の帝國主義的野心のために挽ぎとられて、日本は浮ぶ瀬のない悲惨な状態に沈淪していたであらう。故に日本が過去において、帝國主義的侵略を排するために、断然武装して立つたということは、極めて正当なことであった。この点についてバートランド・ラッセルは、さすがによく見ている。氏はその新著『教育について』(On Education, by Bertrand Russell)において述べていう——

近代の日本は、すべての強国に顯著なる傾向、即ち国家を強大にすることを、最高の目的とする傾

向を、最も明らかに示している。日本の教育の目的は、その感情を訓練することによつて、国家に献身し、またかくして得たる智識を以て、国家に有用であり得る国民を製出せんとするにある。予はこの二つの目的を、極めて巧妙に実行し來つた手腕を賞讃せざるを得ない。ペリー提督の米國艦隊が、日本の門を叩いてから以來、日本は自己保存が、甚だ困難である位置におかれた。彼等が成功したことは、かれ等の方法が、よかつたということを証拠だてるものである、もし自己保存そのものが否認すべきものだといふ議論でないならば

このラッセルの議論は、われ等の賛同を措まないところであつて、われ等は明治初代以來の教育なり國防方針なりが、世界の傾向に應ずるために樹立せられたことに對して、その卓見に服するものである。

併しながら人類共通の欠点は、一度樹立したる方針は、時勢の変更と共に変改し能わざることである。特にその始めの方針が國家強大の原因をなし、或は國民理想の中に溶け込んだような場合は、それに対する執着は益々大となるを常とする。米國民が國祖ワシントン及び憲法に對し、或は勞農ロシアのレニンに對する法外なる尊敬執着の如きは、その例であつて、これがため当然なざるべき進歩改正も阻まれる場合が少なくない。日本の明治当初に對する執着も、いささかこれに似たるものがあると思う。併し時代は常に進歩する。世界に大をなし得る者は、時代を直視

して、これと共に移り得る国民に外ならない。

三 無産国支那の自己主張

最近の国際政局を観察するものにして、見落し難い顕著なる現象は、国際的に最も強い立場を有する国は、無防備国であるという一事である。元来、その国の外交の強弱は、その背後に有する武力によつて決したのは長い間の通り相場であつた。ドイツが強かつたのも、英国が強かつたのも、偏えにこれがためであつて、偏務的な無理な交渉も、腰間の剣をガチャつかせることにより、大概は成効したものである。

然るにこの傾向は近来急転回を見るようになって来た。たとえば欧州においてドイツの立場を見ても、ドイツはベルサイユ条約の結果、国内において十万以上の兵力を有するを得ず、それも義勇兵制度によらねばならず、その上に各国の軍事委員が、ベルリンに駐在してこれを管理していた（この委員は一月末限り撤回されて、国際聯盟がこれに代つたが）。即ちこれを対外的に見れば、ドイツは全く無能力者といつてもいいほどの無防備国である。しかもこのドイツは、この一二年間は国際的に最も強い発言権を持つ国になつていた。国際聯盟は同国が理事国たることを拒絶し得ず、ブラヂル、スペイン等の脱退の値いを支払つても、これが加入を承認せざるを得な

かつたのである。フランス外相ブリアンとドイツ外相ストレゼマンの会見においても、何人もフランスという強国と、ドイツという弱国が不平等的な交渉を行つたと見るものなく、寧ろ積極的な動きはドイツ側にありと見るのが、一般識者の意見である。

この弱国擡頭の事實は英国と支那との現下の交渉を見るに及んで、もつと明瞭になる。広東政府は所謂被圧迫国の国民として、英国に働きかけた。香港に対し汕頭に対し、ボーイコット【ボイコット】その他の方法により、積極的に逆襲したのは支那側である。この英国に対する敵対行動は、日を経るに従つて益々猛烈になり、万県において英国軍艦を猛射して、十数名の死傷者を出だしたのを始めとして、一月四日に至つては漢口の英租界に乱入して、暴力を以てこれを占領したのである。

この引き続き支那側の乱暴なる行動に対して、英国が備えんとしたのは当然である。殊に英国は東洋においては印度その他において甚大なる利益を有し、この乱暴黙認の影響が大なるのみならず、国民政府の排英行動が、上海に及ぶ如きことある場合には、数十年来礎きあげたる合理的なる経済的基礎は一朝にして崩壊するのやむを得ざるに至るは明らかである。英国は一方、北京より大使館参事官オマレーを派して、国民政府と交渉を開始せしめると同時に、英本国より約一万二千（二万ともいう）の軍隊を送つたのである。

然るにここに不思議な事は、從來支那における英国の苦境に同情したものの、その少数の軍隊を送るを見るや、俄然として英国に対し非難の声をあげ始めたのである。国民政府はこの軍隊の前に、屏息^{へいそく}すると思いきや、却つて一月末に漢口事件の跡始末に関する交渉の調印を拒絶し、支那は断じて威脅に屈せざる意を声明した。この声明に対して英国は、更に譲歩して直ちに派兵を中止する旨を明らかにしたのである。われ等から見れば、条約違反の当事者、即ち外交上の責任は、撒頭徹尾支那側にある。それが例え所謂不平等条約であつても、国際法上条約の神聖に毫も相違なき事、ベルサイユ条約が戦敗国ドイツに課したものなるに拘わらず、その価値が疑われな
いと同じである。然るにこの条約を破つた支那に対し、英国は譲歩又譲歩、偏えにその意を迎うるに汲々たる有様であつて、海關上の特権も、租界も、布教上の権利も、裁判権も、未だ公式に要求せられざるに、あげてこれを返還するの態度に出て居る。

これは何を語るか。今や兵力が外交上の問題を解決するのに、何等の助力にもならざることを語るものでなければならぬ。昔ならば、その一つを行つても、支那分割という形勢を馴致した事件が、今はこれに対して正当なる保護すらも遠慮せねばならぬ時代に到達したのである。この理由は種々あるであらう、国内における非戦主義を支持する労働党、自由党の主張、国際間における協調主義の發達、武力行使に対する反感等はいずれもこれが原因として拳げることが出来るで

あろうが、併しそれ等を検討するのはこの文の目的でない。われ等はただ此事実を事実として承認すれば、この議論の関するかぎり充分である。

四 米国とメキシコの確執

国際問題を解決するに、軍事行使が許されなくなったことを示すために、ドイツや支那の例証だけでは足りないというならば、も少しい確な例として、私は米国とメキシコの対抗事件を引照することが出来る。(この事はこの春の他の場処で詳説した)

世界をわが世とぞ思うほどに強大な米国と、その隣りに在つて半開国の状態を脱しないメキシコとは、今、外交上互角に引組んで、軍配団扇を何れにもあげられないほどな大角力をとつてゐる。話は一九一七年にさかのぼる。米国の後援によつて大統領の職についたカラランザは、同年メキシコの憲法を制定した。その中には外人の土地所有を制限し、また場合によつては、外人の既得権をも剥奪する条項を有して居る。

『メキシコは富んで居るが、メキシコ人は貧しい』という言葉があるが、メキシコは殆んど世界無比の油田を有して居るにかかわらず、この採掘権は大多数は外国人、殊に米国人の手に歸している。同憲法の目指すところは、この特権を外国人の手からメキシコ人自身の手に取り戻すこ

とにある。この憲法の制定に対し、米国政府はこれ既得の權利を侵害するものなりとて抗議し、爾來何回となく外交文書の往復をなしたものである。この憲法は從來実施されて居らなかつたが、現に大統領カイエスが就任するに及んで、これが実施を声明し、かつ新たな法律を加えて、断然たる態度に出づる旨を發表した。

この態度が米国を怒らしたのは無論であるが、この外に米国を怒らした事件が二つある。第一はカトリック教徒の圧迫迫害である。メキシコにおいては、他のラテン国において然るように、カトリック教の勢力が絶大であつて、弊害も甚だ多い。カイエス大統領はこれを矯正する意味から、まず大英断を以て教会を閉鎖し、その財産を没収し、教会経営の學校を禁止し、外人宣教師を追放する等、頗ぶる過激なる手段をとり、これがために軍隊と信徒との衝突が、各處に起り流血の慘事が隨處に現出したのである。この状態を見て、真赤になつて憤慨したのは隣國たる米國の一千萬人に余る同教徒であつたことは申すまでもない。盛んに大統領及び國務長官に電報を送つて、これが干渉を行うべきことを要請したのである。

こうした事件があるところに持つて来て、今一つの事件が重なつた。それはニカラガにおけるメキシコと米國の衝突である。即ち米國は同國のデアズ政府を承認して居るのに対し、メキシコは革命政府であるサカサ政府を承認した。同國は公然の秘密として、その承認した政府を後援し

て居るのである。多くの消息通は、この両国の確執を以て、中米における二国の覇権を争うものだとなして重要視しているほどである。

この重ね々々の事件に、米国が烈火の如く怒ったことは容易に想像し得る。ケロッグ國務長官は昨年暮に、最後通牒に等しき外交文書を発した。上院の外交委員長ボラーの如きは、これを以て最後通牒なりと見なし、政府の武断政策を極力攻撃したものである。今までメキシコの態度を非難していた国論は、ケロッグ國務長官の強硬政策を見るや、突如その方向を一転して國務長官に攻撃の矢が集中されることになった。各紙は一斉にこれを攻撃し、上院にはロビンソン議員が、國務長官弾劾の決議案を提出したのであった。この輿論の転回は、丁度前述した英国の対支派兵と符節を合する如きものがあつたのは、極めて注目すべき事実である。

元来米国はメキシコに何回も干渉した。大統領ウィルソンの如きは、執拗に大統領ウェルタを排斥して内政干渉を行い、タンピコを占領し、陸戦隊をあげて、結局ウェルタをして辞せざるを得ざらしめたのである。当時、米国においてはこの強硬政策に対して、殆んど何等の反対を見なかつた。然るにその後十五年を経る今は、当時の干渉理由よりも、余程大なる事件に対し、単に強硬なる通牒を發したるだけで、右の如き轟々たる輿論起り、政府は振りあげたる拳の持つて行きどころなく、結局仲裁に附するの外なき状況に至つたのである。

われ等はこの時勢の変遷に対し、心を静かにして觀察する必要があると思う。

五 軍備撤廃の諸理由

支那もメキシコも対外的に殆んど無能力国家であることは同じである。しかもこの両国共、世界稀に見る富源国であつて、各国共これに対し垂涎^{すいぜん}おかざるもののある一事も異なるところがない。殊にメキシコに対しては米国内においても、今尚合併論者すらも少なくない状態である。しかもこれ等の国に対して、甚大なる利害を有する英米二ヶ国という強大なる国家が、危態に瀕する自国民を、軍隊を送つて保護をなすことすらも出来ない事實は果して何を語るものであろうか。

第一には無論世界における国際協調心と武力排斥の思潮が勃興して、これが現れたものであることは前述の通りである。併しながらこれよりもつと重大なる第二の理由は、国民的に自覚せる国家の前に、他国の管理乃至領土占領の如きが、到底可能なるものに非ざるが故である。たとえばこれを支那に引例しても、支那の北方の如く未だ国民思想の発達せざる専制治下に在つてはその国民を押さえることは、結局その統治者を押さえることによつて解決するけれども、南方支那の如く一般国民の覚醒せるところにありては、一個の統治者に対する圧迫或は排除は、何等の効を奏するものではない。寧ろ一の圧迫は、十の反撥を惹起し、収拾するに由なきに至るのである。

かくして対外的に全く防備なき支那、メキシコの如きは、その後寸土の土地を失わざりしのみならず、また失うの危険なきのみならず、却つてその失いしところを、易々として取り返して居る現状である。この傾向は単にこれ等の小国に限られるものにあらず、かの英大帝国の如き、從來本国と自治国とは形式的になお従属的關係を持続して來たのであるが、昨秋の英帝国会議においては、全く自治国は独立して、絶對自立の關係に立ち、ただ同じ皇帝を頂く点においてのみ英聯邦を形造るに至つたのである。自由主義的な世界の傾向を見るべきではないか。

ここまで書いて来て、私は改めて始めに提出しておいた『日本が軍備を撤廃すれば、何処の国が日本を來て取ろうというのか』という疑問を繰返したいと思う。この狭少な、この富源の少ない、そしてその土地の上には国民的自負心において、世界無比に強烈なる国民六千万人を満載する日本の国土を、何者の物好きぞ、これを取ろうとするのか！。ヒリッピンの独立も、もう時機の問題である。印度が英國を離れ去るのも、決してそう遠い將來のことではあるまい。その時に日本の国土を狙う国が、地球上、何処かの隅に存在するのであるか。私はそれを知りたいと思う。

軍隊を撤廃しても、日本は寸尺の土地をも失うことがないであろうとして、併し乍ら若し巨大なる軍隊を有することが、何等か国家に有益なる貢獻ありとすれば、われ等はこれが現状維持乃至は拡張に毫末も異論を有するものではない。ただ私の考えるところによれば、巨大なる軍隊の

存置は、国運の発展に大害がある。この点については、与えられたスペースでは到底詳述の余地はないから、単に項目だけを並べておきたいと思う。

第一に軍隊を擁することに、今のところ外交上の強みにならないことは前に述べた。二十一ヶ師団を有しても、米国の排日移民法は出来あがつた。世界第三位の海軍は、日支条改約訂に何等の援助を与えるものではない。そればかりではない、日本が法外に巨大な軍隊を有すること、即ち日本に軍国的傾向ありということが、どれだけ日本の平和的發展を妨げているかは、国際關係を虚心坦懐に見る人の承認せざるを得ざるところである。各地に起こる排日感情は、その一つの原因が人種的理由から発しつつあるは否定出来ないが、他の原因は日本の軍備を怒れる対手国の感情であることは明らかな事実である。この場合軍備は日本人の平和的發展を妨げている。

第二に軍隊が背後になくて却て始めて民族的の大發展が出来る。初代米国が十三州より忽ちあの大国となったのは、あの場合少しも兵力を背後に有さず、自由平等なる待遇を各州に与え得たからである。然るに同じ米国は兵力を持ち始めてから、却って小国の反抗を招いて、その政策が行い難くなった。由来国民は、如何に未開の人々と雖も、征服的統御に甘んずることを好まないところの本能がある。これはチベットが英国を放れて混乱の支那に走らんとし、ロシアの帝政時代に、この統治下にあるを嫌った小国が、今は却って進んでソビエツト聯邦に入りつつある事実

でも説明出来る。又今や中米の小国は米国に走らずして、メキシコに傾いている。日本が武力を背後にして居る間は、朝鮮、台湾の如きが心竊かに支那に心を寄せる如きことはないであろうか——少なくとも日本と支那の帰属に関し、一般投票を求めたら、彼等の最大多数は『日本』というだろうか。われ等の恐れるのはこの点である。

第三には日本が軍備を撤去することにより、列強をして具体的に、心理的にデイスアーム【disarm】せしむることである。各国が日本を恐れて居ることは予想以上である。日本の侵略を恐れて米国では閣議で、その準備を闘わしたことがすらあることが明らかになっている。先頃の石油疑獄事件の証言にみても、米国海軍省の恐怖が分る。この太平洋諸国の共通する恐怖は、何時の間にか米国とカナダ、オーストラリア及び、ニュージーランド等を、一つのブロックとして日本に当るような、自然の状勢を招致している。シンガポール港も英米提携の現れの一つである。日本の軍備論者の如く自国のことは全く言及せずして、對手のみ責むるの愚を捨て、まず自身軍備撤廃の意志を示して、彼等をして同行動に出でしむべきである。

第四は軍備を撤去することは、国内に於ける頑冥なる最右翼思想を除去するに最も有力なる道である。各国の現状を見ても極端なる右翼思想は、常に軍隊及びそれを中心にする団体の中から出ている。ドイツはその軍国主義の故に国家を躓かせたのみならず、その軍隊の中にはなおこの

思想が残存して、絶えず国家的政策を内部から破壊せんとしている。先頃マルクス内閣が総辭職したのもこれがためである。この人々の特長は、国内にあつては極端なる国粹主義、国外にあつては国際状態の実状を正視せずして問題を武力を以て解決せんとする点にある。日本においても同じ悩みがある。

第五は産業日本建設のためである。日本が殆んど世界一の軍費支出国（国富の比例から云つて）であることは茲に改めて説かない。日本の教育も産業も、悉くが一旦緩急「緩急」であろう」を目標にしている關係から、産業立国という如きは全く名ばかりである。青年教育というも、国家総動員というも、その又の名は軍事的準備に過ぎない。われ等はこの努力が結局将来の日本を禍いすると思う。寧ろこの努力と経費はあげて、国内産業の改善及び満州、朝鮮、シベリア等の産業的開發のために使用すべきものだと思う。そして日本が未来永遠に生き得る道はこれである。

以上駆け足のように、簡単に理由だけをあげて来た。もしこうして軍備撤廃の原則だけ認められれば残るはただ方法論のみである。外国との平和条約の締結、軍備縮少會議の提唱、内乱（朝鮮内地は無論として、満州その他に於ける經濟的利益の冒されたる如き場合も含む）に備えるための最少限度の兵力の存置等はこれの中にある。但しそれ等はこの文の範圍ではない。（昭和二年春）

二 田中外交の文明史的批判

一 同じ国から三つの抗議

田中内閣が青島に出兵すると、日本は同時に三つの政府から抗議を貰った。第一は北京政府であり、第二は南京政府であり、第三は漢口政府である。

これ等の政府からの抗議は、いずれも日本の出兵が支那の主権を侵し、国際法に反するものであることを極説している。われ等は当時、同じ事件に対し、同じ国から一緒に、三つの抗議を發し得る国に、侵し得べき主権が何処にあるかを思うて、自から迷わざるを得なかった。また彼等は盛んに国際法をいうけれども、彼等自身は外国租界の占領といい、外国領事館の掠奪といい、関税の増徴といい、果して国際法に準拠した行動をして居るか。かりに準拠して居るとしても国際法というものは、一国に三つの正当政府を主張する機関のある国を前提として、出来あがつて居るものであるか。外交的論争に馴れないわれ等の頭は、完全に迷宮に入るのを如何ともするを得なかった。

この迷いはわれ等ばかりではなかったようである。今まで幣原外交を謳歌していた日本の朝野の意見も、これと反対な方向を辿るように見える出兵に対しては、ただそれが在留民保護以外に

出でることのないように希望するに止まって、出兵そのものを否定する議論は殆んどなかったようである。尤もその後、これに反対する議論も出たが、それは北方軍が戦略的に後退して、南北両軍が持久戦に入り、済南その他の在留邦人が、急に危険のないことを知ってからのことである。

支那は謎の国だというけれども、この謎の国に対するわが国の輿論も確かに謎である。支那における日本人の利益と生命が、内乱のために四六時中、犠牲にされても可なりとの議論は、余程の寛量なる思想の持主でも出来ないものであり、さらばとてその利益と財産を保護するために、現存する価値の数倍の費用を擲^{なげ}つて（この費用の中には排日による失費をもふくむ）出兵することの賢愚についても、必らず疑いがあるに違いない。こうした見地から見れば、日本の対支政策に関する輿論は完全に立往生をしたものといつていい。

併しながらこの輿論の立往生から観取し得る一事は、支那の出兵は理論的には、それが在留民保護である以上、決して批難すべきものではなく、ただ問題になるのは、これが結局日本に幸いするかどうかという将来に関する政策についてだということである。

二 政争の犠牲になつた外交

議論を進める前に、少し横道に外れるけれども、日本の外交が無用に、政争の犠牲になつたこ

とを述べておきたい。

幣原外交については、われ等は根本的に一つの疑問を有するが、それは別な機会に譲るとして、この幣原外交は大体に、わが国朝野の支持を受けていた。新聞雑誌は無論として政界においても、大なる反対の声を聞かずにすぎた。然るにこの外交は、支那問題が益々混雑して、最もデリケートなる時に突然打ち切られて、他の異なる政策が、そこに現れたのである。

この事は議会政治において、一見不思議でないように、しかも實際は極めて不思議な現象である。若槻内閣が乗りあげた暗礁は、外交問題でなくて、経済問題である。即ち問題の焦点として内閣が瓦解したのは、経済問題なのである。故に新しい内閣において、その財政問題について、政策を一変するは当然のことであるが、しかも実際問題としては最も変化を見たもの、乃至は見るべきものは外交問題に外ならないのである。

前内閣において比較的無疵であつた部門が……私がその政策に賛成しているという意味ではない……一番急変するということは、何としても不合理である。これは二大政党対立の議会政治に付き纏う弊害であつて、小党分立の国においては却つてこの弊害は少ない。その国においては多くの場合、内閣が改造さるるのは信任を失つた当事者だけであつて、他はそのまま居居るのを常とする。たとえばフランスのブリアンが、万年外相の觴があり、その意見が極端に異なるポア

ンカレー内閣の下にあつても現に外相であり、またドイツのストレゼマンが同じく国際関係のデリケートなるに願ひて、何代かの首相に歴任して居る如きがそれである。外務省のモノポリーは元より排斥すべきであるけれども、併し外交の連続性から考えて、この事が、政党政治の運用に一抹の疑雲を投げかくるものであることは疑えない。

議會政治における外相更迭の理非は何れにしても實際問題として幣原外相は政変の結果退き、田中首相は外相の椅子を提げて現出した。そして新外相は暫らくの後、山東省の邦人を保護する意味から出兵した。問題はここから始まる。

三 強硬輿論の没落

前述した通り日本の出兵は理において、少しも批難さるるところはない。国際条約により他国民が、他国に居住する権利があり、しかもその居住する国の主権が、その国内に住する外国人の生命財産を保護することが出来なければ、当該国が進出してこれを保護するは当然である。

しかもこの当然な行為に対して日本国民の多くは必らずしも賛成しなかつたばかりでなく、従来は対外硬の本案のように見られた貴族院すらも、自重を唱えてやまず、また一時批評を控えた新聞の論調も、戦況やや小康を見るや、直ちに撤兵の出来るだけ速やかなるべきを論じ始めたの

である。これを過去の時代において、他国の領土に出兵するとさえいえば、国民の輿論が奮激したのに対比すれば隔世の感あるを禁じ得ない。

これ等の傾向は、もう少し長い間の輿論を観察して来れば、もつと明瞭になる。幣原外交といえ、その別名は譲歩外交といつてもいいほどのものである。いかなる会議においても、支那に真先きに譲つたのは日本である。そしてこの結末が、ついに南京事件や、漢口事件に終つたのである。この間支那人が日本に加えた侮辱は、今までの日支交友の間にかつてないほど極端のものであつた。

従来日本の伝統的精神からいえば、この場合世界で最も憤怒するのは、昂憤性を多分に持つ日本国民でなければならない筈であつた。しかも實際は、日本国民はこれを怒らなかつたばかりでなく、幣原外交のウォッチフル・ウェーチング【watchful waiting】主義に大体の賛助を惜まなかつたのである。これは抑々何を語るものであらうか。

同じ事が外の事実についてもいえる。米国は日本にとって快い国ではない。米国の排日に憤慨して腹を真一文字にかき切つた無名志士の追慕会は、今なお行われている筈である。しかるにこの国に対する敵意は漸次消滅しつつあるかに見える。たとえば最近米国が青い眼の人形が来た。もしこれを理屈からいうならば、日本人の移民を拒絶しておいて、その国から旅券を持つて多数

の人間——実は人形が来る如きは、日本に対する一種の侮辱だともいえる。事実私は、始めこうした反動論が起るべきを憂慮したのであった。然るに實際は、この米国からの使節は、日本朝野の心からの歓迎を受けて、これが答礼をすら企てられている。米国に対するビッタネス【biterness】が、少なくとも日本人の心の表面から消えつつあることを証拠だてるものではないか。

また一九二一年度に、ワシントン会議が開かるるや、日本の朝野は非常なショックを受けて、中には堂々と『国難来る』と呼号したものがあつた。然るに今回第二回の軍縮会議を提唱し来るや、日本の朝野は即座に主義として之を受入れた。

これ等の輿論の変化は、そもそも何を語るものであろうか。また何に原因するものであろうか。日本人は健忘性なりといつてしまふには事実が余りに大きすぎる。

四 外交を動かす経済的要求

一国の輿論の変化という如き広大なる問題を論ずるに当つて、これを一つや二つの原因に帰することは、極めて危険なることである。併しながらこの変化の最も重大なる理由をあげようというならば、私は日本の生存の必要から出て居ると断言するに憚らない。

数字を挙ぐるまでもなく日本は工業原料において食糧において、自から立つ能わざる国である。

日本が生存するためには、好むと好まざるとに拘わらず、日本の生産物を輸出して原料を買入るの外はない。そしてこれ等のものを輸出するにも、輸入するにも最上の顧客は支那と米国とである。

紙数に制限があるから、統計は一切抜くが、試みに米国が生糸を買わず、支那が綿布を買わないとせよ、或は又米国が鉄や綿を売らず、支那が豆粕や穀類を売らないとせよ、日本の産業は溜まりもなく崩れ落つるのは極めて明らかな事実である。米国の排日法制定の時、日本では対米ボーイcottを計画したが、先方で真剣に応戦しなかつたからよかつたものの、もし米国がこれに対抗したら、米国の損失は活動フィルムその他で極めて第二義的のものに止まるに對し、日本にとっては国家經濟にひびのいるほどのものばかりであつたのである。

人間は生存問題については、極めて神經過敏である。これ等の事実を統計的に知らないものも、その影響なり結果なりは直ちに體驗し得るように出来あがつている。そして元來が鋭敏である日本人が、これを感じしないわけはないのである。

この事を頭に入れば、日本外交が、悪くいえば外国に對して不必要なるほどの氣兼ねをし、よくいえば常に自由主義的である理由がよく分ると思う。殊に日本が産業を以て立国の基礎とせざるべからざる国情と傾向にあるにおいて、この事はやむを得ない道なのである。

過去の歴史を顧みて、この原則以外に出で得る国はない。即ち自国に充分の原料と食糧を有して、これ等を他国から仰ぐ必要のない国は、外交的に常に強く——時には我侪勝手であり、これに反してこれ等のものを外国に依頼する国は常に妥協的、自由主義的である。例えば英国は十九世紀においては、海上権を掌握し、加えるに世界の市場を壟断ろうだんして居ったので、自己の主張を、他国と妥協することなしに、勝手に強要し得た。自己に都合のいい主義は、辞書をくると幾らでも製造することが出来た。然るにこの英国も時勢の変遷と共に、海上権を他に分与し、しかも内に顧みて、その食糧の三分の二を輸入せざるを得ざるに至つて、頓とんに妥協的にならざるを得なくなった。日本においては尚英国を誤解して居る者が、非常に多いようだが、われ等の知る範囲では、今のところ英国ほど自由主義的な外交に終始している国はないと思う。

米国が亦そうである。米国はその国が肥えていて、産業があつて、全く自立自足の国である。彼等はその生活のために、毫末も他国と妥協する必要がなかった。彼等は外国と交渉するに當つて、一つの問題について長く主張さえしていれば、自分の方からは何等譲歩することなしに、自己の主張が貫徹することを習慣づけられて来た。ジャクソン大統領時代にフランスとそうであつた。アラバマ事件では英国が兎をぬいだ。日本との交渉も明らかにそうである。始めは学童の隔離問題にすら、ルーズベルト大統領は『決して日本人を欧州人と區別待遇をせず』と日本政府に

一札を入れたのが、二十年後の今日では日本人を頭から侮辱し、排斥して、なお満足しないで居る状態なのである。

われ等はこれらが善いとか悪いとかという議論をして居るのではない。事実を事実として記述しているまでである。そしてその米国すらも、近時他国との経済的接触が頻繁になると同時に、妥協的になるの已むを得ざる状態にあるに顧みて、経済的需要がこの国の外交の根本方針を定むる大動力であることを知るべきである。

繰り返していうが、日本の外交はその経済的需要、生存の必要から、自由主義的、妥協的にならざるを得ない。そしてこの事が戦後、経済的難境が目立って来た時に外相になつた幣原氏によつて実行されたことは注目すべきであると思う。幣原外交は、われ等から見れば、全くの無策外交であつた。しかもこの無策外交は、日本の事情から生れ、かれは単にその事情の指示した通りに動いたに過ぎなかつた。この無策外交が国民の支持を受けたところに重大な意味がある。

五 必要が自由主義の道を辿る

こうした外交が、必要から生れたるものであるにしたところが、これに対して非常な不満を有するものが出現することも、また容易に想像し得るところである。

それは『経済』に対する『政治』の反抗である。『實際的利益』に対する『国威』の抗議である。更に大衆を唯一の對手にする政策に対し、地図の色に執着を有するものの不満である。そしてこの種の人々の代表として、軍人としてこうした思想に養われて来た田中外相が出で、しかしてこれを後援する者が、軍人及びそのサークルの人であるのは不思議ではないのである。

この人々の第一の特長は如何なる場合にも、国旗が頭を離れない点にある。国旗のあるところのみが、国威の伸張するところであつて、これを条件としてのみ経済があり、国民の存在がある。一度びこの国威にして汚されんか、何物を犠牲にしても突進せずんばやまないのである。この事は田中外相が出兵するに當つて、新聞記者に対し排日の如きは少しも意に介せない旨を語つた一事でも知ることが出来る。

この人々の第二の特長は、その口で広言するところとその腹で考えることとは、極めてデリケートな相違があることである。即ち彼等は所謂腹芸なるものに重きをおくのである。そしてこの呼吸は同じ畑で育つて、同じ思想に養われたものでなければ、よく諒解することが出来ないのである。故に寺内首相は、適法な日本の代表者を通して対支外交をなすことを避けて西原氏を使い、また田中首相は山梨大将にある種の使命を授けて、支那に送るのである。

いずれにしても田中外交は、今回は全く何等遮ぎられることなく自由に、その平生の抱負を實

行し得ることは明らかである。それはかれ自身首相であり、また外相であり、軍部に対して睨みがきき、その上政友会には外交上において、かれを制肘し、批評するような有力な外交交通が居らないことでも、容易に想像し得る。

かくして彼等のいづく外交政策なるものが、現代において適當なるものであるかどうか、最もよく試みられるわけである。そしてこの結果、われ等は二つの場合を想像し得る。第一の場合、かれが敢然として、その政策を実行することである。かくすれば当然支那の内政にも干渉すべく、その結果排日は再発するであろう。そしてその積極政策によつて得るところと、排日によつて失うところとを総決算する時が来らねばならぬ。第二の場合は、かれが四囲の事情と、經濟の要求に強いられて、自からをそれ等と妥協の外なきに至るであろうことである。而していずれの場合においても、われ等の観るところに誤りがなければ、軍人流の外交が破綻して、自由主義外交が強く根を生えると思う。軍人外交は寺内外交によつて第一に躓き、サイベリア【シベリア】の出兵によつて深い手疵を負い、その勢力は最後の一撃を待つて、外交舞台より消え去るべき運命にある。それは彼等の政策が試みられる毎に、却つて春雨の彼の青草のように自由主義的外交が擡頭した事実によつてこれをよく証明して居る。

われ等は必らずしも幣原外交の謳歌者ではない。否、われ等はこれに不満がある。その欠点と

して余りに所謂自主独立の名に囚えられ、かつその根本的思想が、他国を置去りにしても、自己だけが人気と利益とに居らんとする道徳的不純さをあげ得る。これ等についてはここに詳説の暇はないが、こうした欠点があるにかかわらず、その大体の方針が示す自由主義的傾向は、将来の日本の外交が向う唯一つの道であらねばならぬと信ずる。

日本はその生存の必要から、自由主義の道を辿る。これが説いて詳かなるを得ざるこの小論に附し得べき結論である。(一九二七・六・五)【『中央公論』】

四 愛国主義否定に結論す

一 国家主義と愛国主義

自由貿易主義の勃興、国際協調主義の擡頭、関税障壁の撤廃——戦後、極端に国家主義に走つた世界の各国に、新しくこうした運動が起りつつあることは、注目すべき現象である。世界の思潮を研究しつゝある人々が、最近殊にこの傾向を重視して批評の筆をこれに向けつつあることは、固より当然のことといわねばならぬ。併しながら私は、これ等の批評を通読して、一つの重大なる目こぼしのあることを感じないわけにはゆかない。それはこの思潮、運動の究極するところ、愛国心の否定にまで遡のぼらねば徹底しないことこれである。国家主義の中心はなんといつても愛国心である。自国第一主義 *My country, right or wrong* の思想が結局国家主義の基礎をなして、居ることは今更説明するまでもない。しかももし新しい思想が、国家主義を否定して、国際主義を主張するというならば、それは結局愛国心そのものをも否定することではないか。

議論を進める前に、一応断つておきたいのは、ここで愛国心の否定というのは、古い意味の愛国心の否定である。狭義の意味の自国第一主義の否定である。従来愛国心の欠点は、自国偏愛に墮して正理とフェア・プレーを解し得なかつた点にあつた。こうした弊害は洋の東西を問わ

ない。米国において戦後生れ出たハンドレッド・パセント・アメリカニズムは、外国人と黒人とは他教徒を排斥して、ただ偏に米国と米国人の利益のために計つたものであつた。同じく英国の愛国党は“*They're only foreign devils, you know. They can't be trusted a yard*”という言葉が示すように、外国人という、ただ排斥すべきもの信頼すべからざるものと断定してしまつていた。愛国主義の権化であるイタリーのファシスト党が、いかに他国と他国人の感情と立場を尊重し得ないかはここで説くまでもない。いずれにしても愛国者と名のつくものが、理論の如何にかかわらず、自国以外のものを一律に排斥し去る点は世界いずれの国のものも、符節を合するが如く同じである。

否定すべき愛国心とは、以上の種類の愛国心である。そしてこの種類の愛国心を否定するといふことは、結局日本の古い教育が教える愛国観念を否定することである。日本の軍人が世界に誇つてゐるその愛国心も、其の偏古な部分を否定することを結論する。この思潮の前に、日本は如何に処すべきであらうか。

二 日本の国家主義の由来

日本に、もし国家約思想、思想的中心というものがあれば、それは疑いもなく国家主義である。

日本の政治家と教育家は、嘗てこの思想に対して毫末も疑を挟さんだことなく、しかして今もお然りである。彼等は、この思想の上にこそ、日本の国運がかかつて居ると信じているほど、これに重要性をおいている。

そのかくの如き傾向になったことについては、固より充分な理由がある。日本は海を以て囲まれる島国である上に、徳川三百年の鎖国主義は、日本国民を完全に他国から隔離した。元來動物には、集團の生活を営む場合において、自己の属する集團以外の生物を排斥する本能を有する。蟻の如き、蜜蜂の如き悉く然りである。人間も人智が開けざる以前、あるいは他民族との交渉を有さざる以前は何れも極端なる愛国主義（愛団主義）であつて、他種族と見ると眼をむき出すのは、台湾の生蛮人に見るも明らかである。

この排他主義は、日本の如き狭い土地と、肥沃ならざる土地に育つ人種の間、特に強烈になる傾向がある。同じ排他主義でも、支那のそれは、広大なる土地で、集團的本能を刺激することが少ないから、そこには軍国主義的傾向が少ないけれども、日本の如く火山系の烈しい山と河とにきたえられた精神は、自然險しい傾向を帯びざるを得ない。日本の国民精神を礎きあげるに力あつた『武士道』は日本の長い間の孤立と自然とが生んだ当然の産物だったといえる。こうした国民性が出来て居つたところへ持つて来て、日本の開国の事情が、この国民性をインテンシファ

イ【intensity】するに恰好なものであった。日本が長い間の眠りから醒めて、窓をあけると陽はすでに三竿【さんかん】高く上がっているとの意。周囲は帝国主義の炎で真赤になっていた。支那はもう大きな胴体を屠られて、瀕死の体軀を水平線上に顕わにしていた。日本自身も樺太問題で、北海問題で、ロシアに睨われ、親切気に通商貿易を迫ったアメリカさえも、心の底からその純粹無垢を誇り得ないほどの野心を抱いていた。

日本はこの状態に処して、自から武装せざるを得なかったのは当然であった。日本国民は、かうした場合において常に鋭敏であった。彼等は自己が武装しなければ、他国の帝国主義の爪牙にかかるのを知っていた。明治五六年頃、征韓論が朝野の論議を独占していた頃から、この国家主義に積極、消極の区別はあったけれども、武を以て国を建つる方針に至つては、遮ぎられることなしに発達して来た。

この偏武主義は、一時、伊藤博文その他の文治派が天下をとつた時に少しく紆余曲折はあった。西郷が野に隠れたのは、外に伸ぶる前に、まず内を整えるべしとの議論が勝つたからであった。併しこの傾向も長くは続かなかつた。日清戦争と日露戦争を経て国家主義の大本は日本に確立したのである。

どこの国でも、戦後における軍人の勢力は驚くべきものである。外敵から救つてくれた恩人が

軍人であるという考えは、国民をして挙げて軍人崇拜の感情に浸らしめるのを常とする。合衆国のような建国の精神を平和におく国においてすら、ワシントン、グラント等を始めとして、將軍の大統領が非常に多いという事実が這般しゃはんの真相を明日に語つていよう。大戦後、フランスにおけるフォッシュ將軍の一言が如何に、その国策を左右したか。また一個のヒンデンブルグ將軍【ドイツ・ワイマール共和制期の大統領】が、大統領候補して立つて、如何に大多数を以て選ばれたか、戦争で自国を救つてくれたという感謝觀念と、軍人に頼る精神が、どれだけ強く戦後国民に働いているかはこれ等の事実によつて明瞭である。

日清、日露という大戦——全く国運を賭したる二大戦争の後において、日本国民が法外に軍人を重んじ、尊んだかは想像するまでもない。『帝国軍人だぞ!』という、それが日本国民以外の何人かによつて形成されて居るかのうちに、国民には偉大に、勇敢に響いたものである。それほど日本国民には軍人というものが偉かった。戦後における国家の新政策樹立に際して、最も重要なヴォイスを持ったのが、この軍人であつたことは当然である。彼等は自から、特殊な位置を開拓すると同時に、この位置から手を伸べて政治と教育と外交とに悉く口を出した。そしてここに軍人が提唱し、官僚が和するところの国策と、思想は出来あがつた。

三 日本の自給的保護政策

軍人の思想は、その職業が然るやうに、仮想敵国なくしては存在の価値のないものである。彼等は第一に敵国の存在を假定する。そしてこれを基礎にして、国防と対抗とを計画するのである。

この仮想は、あらゆる方面に徹底することを必要とする。第一にこの思想を多分に入れたのが教育である。日本の教育には公民教育は殆んどない。国民としての義務、責任及び憲法政治の運用の問題の如きは、教育が寧ろ触るるを欲しないところのものである。その教育の目ざすところは偏にに国家中心主義であり、一旦緩急を目がけての訓練である。日本はその義務教育において世界に誇るべき完備せる制度を有し、無教育者の少なき事、日本の如きは先進国と雖も余りなきほどなるにかかわらず、国民の政治思想と、憲法政治の運用において、却つて如何なる国よりも劣つて居るのは、その教育が一旦緩急を目掛けて、他を顧みざるがために外ならない。この教育の結果が、日本に如何に影響したかは、明治以来の歴史的経過を顧みるものの直ちに発見し得るところである。始めにおいては、寛大であつた歴史に対する論議の如きが、日清日露を経て極めて窮屈になり、今や日本歴史の自由討究をすら許されざる如きに至つたのは、明治初年からの国家主義教育が今に到つて実を結んだものといわねばならぬ。

ことにこの教育の影響は産業方面に見ることが出来る。近頃日本において産業立国という文字

が流行する。新しく始めた運動だと見ればそれまでであるが、併し日本は国策として嘗て産業立国の方策を有したことがあつたろうか。日本の予算を見ても、軍事費は甚だしきは半分、平均しても三分の一以上を維持して来ている。もし産業立国が、国家の根本政策であるならば、この大部分は産業費に繰り入るべくして、不生産的な軍事費にかかる巨額な費用を差し向くべきではない筈である。即ち日本の産業も、結局一朝有事の際に利用すべきものであるというのが一般の考え方なのである。

そればかりではない。前述の通り国家主義の本質は仮想敵国を設定して、たえずこれに對して備える点にある。国家主義そのものが必らずしも侵略的ではないにしても、自国を絶対な境地におく結果は、自己の安住を許さないのである。それは自己中心の富豪が、その住宅の周囲に高塀をし、その上に硝子をセメントづけにして、犬を飼つて、それでも安心出来ないと同じ心理状態である。そしてこの心理状態は、必然に一旦緩急の場合を予想する。故に日本の産業の根本方針は、算盤の合うと合わないにかかわらず、日本が他国と交戦する場合を目標として——少なくとも、無意識的にでも、さうした感情を背景にして礎きあげられている。主要産業の自給政策がこれである。

日本が鉄の産出において、決して他国と競争出来ないことは明らかであるにかかわらず如何に

経済的犠牲を払つて、その自給政策に苦心しつつあるかを見よ。鉄の高率関税の如き、また損失を覚悟しながら鞍山^{アシヤン}【中国遼寧省】その他の鉄鉱を継続しつつある如き、いずれもこの政策の現れである。また重油、ガソリンの如きも然りであつて海軍省が満鉄をして冒險的に撫順のオイル・シェールを重油化せしめつつある如き、更に北樺太の石抽坑に対して、日本政府が全く算盤を別にして、高い犠牲を払つてこれを獲得した如き、いずれもこの自給政策の現れでないものはない。

私は、ここにこうした事実を一々引用する暇はない。それは他でも論じてある。ただかくの如き経済上の原則に反した自給政策の結果が、自然に保護政策を誘致し、国内自然富源の状態からいつても、国の地理的關係からいつても、貿易の多少にのみ国運の進退がかかつているべき国柄において、今や全く保護政策の結果、物価高と輸出杜絶とに悩まされて居る一事を附記しておけば充分である。即ち日本の産業行き詰りは、極端なる国家主義の産物だと断言して差支えないと思う。

但しここで誤解のないために附記しておくが、産業保護の政策が、如何なる場合にも悪いという意味ではない。国家の産業が幼稚である間は、過渡期の政策としては、これもやむを得ない事であつて、現に日本の棉織【綿織物】工業の如きは、保護政策が成功した一つである。私のいうのは純粹なる国家主義的立場——重要産業の自給主義に発した保護産業は、いずれも惨めな失敗

を繰り返したという意味である。鉄工業、石炭工業の如きはそれである。

四 関税は平和の戦争武器

ここまで日本の状態を述べて来て、私は目を欧州に転ずる。日本における極端なる国家主義の弊害は、やがて又、そのままに欧州におけるそれと同じだからである。

従来、経済は常に政治の犠牲になって来た。政治問題が紛糾するところ、経済は例外なく極端な圧迫を受けて来たのである。世界大戦が、人類の憎悪と、惨忍性を露出した後、各国の間には、その隣人を疑う念が炎のように燃えた。『国家』というものに対して、生命と財産とを提供したのであるから、国民一般がこれに一種の神秘と憧憬を感じたのは無論当然である。この国家主義が栄ゆるところ、直ちに保護関税主義の対立になったのも怪しむに足らない。

彼等は日本の国家主義者が然るように、まず重要産業の自給を計った。それがためには関税の障壁を高くした。自国だけが高率関税を実施するならば、最も利するのは自国であるのであるが、隣国が関税壁を高くして居るのに、他の国が黙って居る訳はない。彼等は何れも劣らずに関税戦を行った。こうして関税は平和時代における戦争の武器となつてしまつたのである。一つの原料も、一つの生産品も、複雑にして無用なる手続を経るの でなければ、その目的地に達する訳には

ゆかなかつた。

もし戦後欧州において、この関税の障壁戦がなければ、欧州の経済状態は今のような行き詰りはない筈であつた。たとえばシレジアの石炭鉱がドイツの手を放れてポーランドに行つたところが、それが単に領土の変更であるだけならば、その経済的結果は決して大なるものではない。何故なら経済にはその産地に対する条件は不必要だからである。またたとえばアルサス、ローレンスの鉄が、戦争の結果としてドイツからフランスの手に移つたところが、もしそこに関税の障壁がないならば、産業の原料として何処の国でも自由にとり入れることが出来て、これも少しも経済上の障害になるものではない。然るに戦後における経済戦は、国家主義に根を發した他国排斥の思想が根本をなしていた。そしてこの結果、関税には複雑な手続きと、外国品排斥の精神が織り込まれていたのである。此関税戦が如何に激烈であつたかは、二百余年の間、自由貿易主義で一貫して來た英国すらが、バック・ドアから保護関税を採用した一事でも知ることが出来るであらう。

尤も関税の障壁を高くしたのは、全部が反動思想の反動でないのは勿論である。最も重大なる原因が第一は戦争の記憶、第二には国家主義の影響であるのは前述の如くであるけれども、第三の原因は輸入貿易を防止するための目的もあつた。たとえばイタリヤのリラ、ポーランドのズロ

チー、仏国及びベルヂウム【ベルギー】のフランの如き何れも底知らずに下落したので、これ等の通貨を維持するためには、関税政策によつて輸入を防止するの外はなかつた。各国は一方関税を高くしておいて、他方国産を奨励した。ムツソリニは小麦の輸入を減少せしめるためイタリー人の好物であるマカロニに代えるに馬鈴薯を食することを奨めた。ベルヂウムでは小麦にらい麦を混入した。フランスは亦行政命令を以て、ある品目の輸入を禁止した。かくの如くして予算関係のために、関税政策を利用した一事も、元より考慮に入るべきであるが、併し関税障壁の最も重大なる原因は、依然として国家主義から来ているといつていい。

五 欧州国家主義の弊害

この国家主義の弊害を、最も深く痛感したのは経済家、実業家である。彼等は自己が毎日関係する実験から、国家間の障壁が結局何人をも利益せしめずして、その損失はお互いが負担せねばならぬことを感じた。彼等は又過去の歴史を顧みた。アメリカ合衆国が、現今の如き繁栄を有するのは何故か。それはアメリカが各州を合せて聯邦組織を作り、欧州全体（ロシアを除き）より大きな面積の土地に全く関税の障害なきことを最も大なる理由にあげねばならぬ。

更に彼等に著しき事實は、一八三二——一八三五年の間に、ドイツの統一がなつて、従来存

在した各州間の関税を撤廃したことであった。この結果ドイツは急に大発展をして、一八七一年には、ついにドイツ大帝国の出現になったのである。これ等の事實は、理論的に殆んど反駁の余地なきものなるにかかわらず、しかも各国が、その関税撤廃をなし得なかつた所以は、国内の経済事情以外に、狭義なる国家主義の感情が、彼等の理性を覆うていた結果に外ならなかつたのである。

この辺の事情を最もよく説明したのは、ドイツ帝国銀行総裁シャヒット博士の論説である。同博士は、昨年の秋、ドイツ中央議会議長ロエベ博士の官邸に招かれて一場の演説をしたのであるが、同博士はパン・ヨーロッパの運動（欧州を打つて一団となす運動）を賛成し『私はこの運動の会員としてでなく単なる傍観者として、また冷やかなる数字的事実を扱うに馴れたる純粹なる経済学者としてお話しするまでである』と前提して曰く、

パン・ヨーロッパの思想【Pan-Europeanism】に、ただにそれが余りに誇張されたる国家主義に対し、対抗的運動として価値あるのみならず、それは経済的に健全なる思想である。無数の小さい、限られたる市場を合併することは繁栄の要訣である。これを實際経済の立場から観ると、欧州の市場を結び合ふことが、最も望ましいことである。今や各国は、旅券の面倒、間接の産業補助、外人に対する偏見等を国策として使用し、その弊に堪えざらんとしている。

博士はこう述べて来て、『将来の外交の標的は好戦的国家主義に対する戦争でなければならぬ』と断じ、更に曰く、

国家主義の本来の意義は、近代文明を拡大し、富ますことを義務とし、権利とせねばならない。もし今のような技工的な、小市場を分立せしめるかわりに、共通する大市場を設立することが出来れば、それは非常な利益といわねばならない。このパン・イユーロップ運動は、欧州以外の諸国に対して起されたものと見てはいけない。それは結局世界的になるための最初の運動にすぎないのである。

故にパン・イユーロップ運動は、経済的厚生によつて、人類の精神的進歩を促すための第一歩といつていい。

と論じている。

この思想から生れたパン・イユーロップ会議が大正十五年十月始めにウインナに開かれ、二十七ヶ国の代表者が、一堂に会して、この運動の主唱者たるカレルギ伯からこの会の目的として、第一強制的仲裁、第二関税及び関税障壁の撤廃、第三国家間の憎悪及び少数者圧迫の除去を説明され、異口同音にこれを賛し、殊にドイツの国会議長ロエベ博士の如きが『憎悪の時代は既に過ぎん』とし、パン・イユーロップの主張者はその大事業を進める時期に到達した。このことを反对者と雖も認めぬばならぬ時期が遠くないであろう』と述べたのは頗ぶる注目すべき現象である。

六 欧州に動く国際協調運動

大正十五年十一月九日に、ロンドンのギルド・ホールでロンドン市長主催の恒例の晩餐会があった。その席上でボルドウィン首相は、感慨深そうな面持で、

『諸君。三ヶ年以前、われ等がこの同じテーブルを囲んだ時に、欧州の国家にして、解決し難き問題に直面しない国は一つもなかった。フランスとベルギーの軍隊はルールを占領していた。ドイツは経済的破滅、政治的崩壊に瀕していた。不安な世相が東洋及び近東のそれであった。それは実に戦後の暗黒時代の底といつてよかつた。然るに諸君。三ヶ年後の今夜、予は諸君に対して、戦後において最も満足な状態をお話することが出来る。そこには各国が安定した状態に、断然足を踏み出した事実を見ることが出来る。諸君が知るように、フランスとイタリーとドイツとわが英国とは復興と融和のために協力している。フランスとドイツとは、賢明な方法と相互の妥協により、不和の原因を取り除こうとつとめている。そして諸君が見るように、欧州には今や協調と好意の奏楽によつて、平和の幕が開かれて来ているのである』

と演説した。

われ等は無論、重責を有する大国の首相の外交的辞令を、その俚無条件に受け入れるものでは

ない。また一つの離れた事件を過信して、パン・イユーロプ運動に対して、それほどな重要性を置くものでもない。併しこのボルドウィン首相の言は、国際問題に眼をそそぐものが、肯定せざるを得ざる事実である。即ち欧州における諸種の事相は、ロカルノ会議以来、引き続いて国際的に、極端なる国家主義排斥に傾いているのである。

この第一の条件は、ドイツ政府が自発的にベルサイユ講和条約で決定した西部国境を最終的に承認せんとする申し出であつた。これはドイツがアルサス、ローレンを永遠に放棄することを意味するもので、最も重要な歴史的事件である。この決心を見て、フランスも気が緩んで、ためにロカルノ会議も成功し、ついでドイツの国際聯盟に加入することを承認し、しかも理事国の一員とするの寛量に出でたのである。

それ計りではない。国際聯盟の総会に出かけたフランスの外相ブリアンと、ドイツ外相ストレゼマン氏は、その会合からこつそり抜け出て、トアリーという田舎町で会見し、両国の間に重要な政策上の打ち合せをなした。この内容についてはここでスペースを有しないが要するに、フランスの経済的難局を切り抜けるために、ライン撤兵問題で、譲るかわりに、ドーズ法その他でドイツの譲歩を求め、国境問題についても、併せて言質を取っておく趣意のものであつた。

こうして犬と猿とのような仲悪かつた独仏両国が、握手したところに持つて来て、欧州に鋼鉄

トラストが出来た。これは大正十五年十月一日から有効になったもので、その重要な目的はローレンの鉄とルールの石炭とを一緒にして、米国の鉄その他を向うに廻して一大発展をすると同時に、欧州の産業上の不便を取り除こうとするものである。これはドイツ、フランス及びベルギーその他の共同事業で、一トンについて国際保険のために一ドルづつ出し、それが一ケ年に六千万円近くになるという大仕掛なものである。

この経済的提携も、独仏両国の政治的諒解なくしては到底実現の可能性がないもので、この一事でも政治的には、余くまで国家主義的に動いて来たフランスが、国内の経済的危機に懲りて、ドイツに対して親善政策を取り始めたことを窺取し得るであろう。これは国際政治の上において注目すべき現象である。

こうして総ての風向きが、国際協調主義に向っている時に、十月の終りには各国の最も有力な銀行家が自由貿易、関税撤廃の共同宣言を発表したのである。従来、これほど有力な銀行家が、一緒に名を連ねたことも稀なのに、それが一斉に関税撤廃の勧告書を出したのだから、世間が一驚したのも無理はなかった。この中には保護関税の本来本元である米国のモルガン以下もあつた。以上、私の記述は単に傾向を知らんとするにあるのであるから、詳しい内容には一切触れない。ただこれ等の折重なる事実によって、欧州において国境打破、貿易自由の思潮が相当に有力にな

ったことが判明すれば充分である。

七 愛国主義否定と私の立場

北欧の思想家であつて、先頃死んだジョージ・ブランデスはこんな事を云つた――。

国家主義は現代の特質である。各国は、自国を自慢する愚かな習慣に墮している。何れの国家も自分の国こそ世界第一だと考えている。この習慣はヨーロッパから米国に渡つた。米国の移民拒絶の如きはこの政策の現れである。

国家主義の結果は、国民の神経を過敏ならしめ、正当な批評を嫌うに至る。米国でも英国でも外国人の彼等に対する批評は、彼等の耳に入らない。大陸諸国に至つては、この弊害は殊に甚しいのである。フランスやポーランドでは、彼等が要求するところの讚美をしない外国人は、敵人と見做すほどにすなつたのである。

こうした状態において、世界平和の見込が絶えたのは申すまでもない。十九世紀時代に生れた国民の自由という政治的觀念は、今や忘れられてしまつた。

二十世紀は錯覚の時代である。彼等は挙げて錯覚に陥つた。愛国心というもののほど危険なものはない。愛国心と世界平和とは合致しない。欧州が今のように危険な状態に陥つたのは、全く国家主義の結

果である。

思想家であるブランドス氏の言葉には無論夢想的分子も少なくないであろう。併しながら明らかな一事は国家主義に発する有力なる各国人は、國際的正義を認め得ず、また公正なる對手の立場を到底諒解し得ないことである。たとえば軍備充実の主張者の如きは、エドワード・グレーのいつた如く『軍備とは自身が持てば、自国の存在のためであるが、對手が持てば悉く侵略的に見ゆるものである』という矛盾した立場にあるのである。英国のシンガポールの防備に対して、猛烈に反対、抗議をなすものが、日本自身の二億六千万円の家軍費に対しては、唾の如くに黙するを見よ。これ等は、理由はどうにでもつこうが、結局国家主義者が陥り易い弊害に外ならないと私は思う。

ここまで述べて来て私は繰り返し二つの説明を附しておく必要を感じる。第一は愛国心の否定という意味は従来の偏狭なる愛国心を否定するというのであつて、實際の愛国心は国民の幸福と安寧を希願するに外ならないものであるから、結局平和主義、國際主義の上に立たねばならぬもの、そしてこれは従来の愛国心とは相容れぬものという意味に過ぎないことこれである。日本が早晚当面しなければならぬ朝鮮統治問題、満州問題乃至は移民問題、の如きは、日本人がその偏狭なる愛国心、国家主義を抛つて、ブロード・ビュー【broad view】を有する國際主義の上に立ち、

相手の立場をも諒解せねば到底解決せず、そして、此寛容さが結局日本の前途を洋々たらしめるものと信ずるのである。私は真とに日本を愛するが故に、扁狭なる愛国心——好戰的にして排他的、反省なき自国中心主義を排するのである。

第二に弁解しておきたいのは欧州に國際調主義が生れたといつても、それが直ちに成功を期待し得るかどうかは甚だ疑問だということである。國民の思想なり傾向なりは一日にして變るものではない。今回の續出【續出】した事件は、彼等が戦後の極端なる排外主義に懲りて、經濟協調主義に變つたというだけで、各國民が心からその所信を變えるのには、なお長日月の教育を必要とするのである。私がここで説いたのは、ただ風車がその將來の風の方向を示したという程度に過ぎないもので、現にイタリーのムッソリニの如きは、極端なる國家主義の化身であることは何人も知る通りである。私が盲目なる樂觀論者でないことを弁ずるために一応附記する次第である。

第三卷 自由日本を漁る

【『自由日本を漁る』博文堂出版部昭和四年（1929）刊、国会図書館デジタル化資料】

自序

軍国日本はある、官僚日本はある、産業日本も形だけはある、が、自由日本は何処にあるのだ。見ろ、余りに強大な国家権力と、余りに階級的な社会意識のために日本の民衆は碾臼ひきうすの下にでも落ち込んだように、ひき廻され、こずき廻されているではないか。

『個人の自由は憲法によつて明記されて居るではないか』など、見えすいた嘘はいわないでくれ。わたし達は自分の意見を自由に発表することができる。自分の想っていることをそのまま語ることが出来るか。私達の生活は泥靴でお勝手にあがるように、常に官憲のために荒されていることはないか。山本宣治君だけが、その主張のために兇手に仆れたと思つてはいけない。世界の右翼思想を一人で独占しているほどな井上哲次郎博士が、誰よりも筆禍、舌禍を受けているではないか。

考えてみると『板垣は死すとも自由は死せず』など一大見得を切った退助伯などが、自己陶醉にかかつていたものの筆頭であつた。誰が死んでも、それだけは死なないような『自由』が、日

本のどこにあったのだ。

私はいま四十の峠に足をかけている。

三十にして立ち、四十にして惑わずというが、三十にして立たなかつた私は、四十になつて迷い通しに迷っている。『迷いは四十前後ですよ』といった先輩の言が今更想い出されるのである。

この迷いの中に自分の前途に対する焦慮がないというならば、それは私自身を偽るものである。が併し重なる迷いはそうしたことではない。それは社会の事象に対する根本的な迷いである。また自分が今まで把握して来たイズム——原則論に頼りえなくなつた悩みでもある。たとえば私は議会主義を信ずるという、併し議会主義を信ずるが故に、私は民意の現れない議会、また現れても自から泥田に落ち込むような議会を支持することが出来るであらうか。私はまた官僚政治を排するという、併し如何なる無智なデモクラシーの弊害に会しても、私は官僚政治を排さねばならぬであらうか。

議会が醜化すれば直ちに解散を叫び、資本主義の弊害が見えれば直ちにこれを打壊することを主張するような気短かな新聞と雑誌の原則論に、私は近頃首を横に振り通している。かつて私は新自由主義者だと思つたこともある。私はまた社会主義者だと思つたこともある。併し今は私は

そのどちらとも云いたくない。私はイズムと公定式によつて生きうるものの氣樂さを羨んでいる。

この書の内容は重苦しい空氣の中にある自由人の悲鳴だといつてもよければ、また荒狂う海を箒で掃くような、自由日本を漁るための空しい努力だといつてもいい。いずれにして四十の坂を上らんとするに当つて、後に残す小さいモニュメントたるにおいて変りはない。

私はこの著を鑒田鋸次郎氏に献じたいと思う。この著の内容が如何に貧弱なものであらうとも、とに角こうしたものを私が東京の最中で出しようになつたのは中外商業新報社長たる同氏の好意ある誘導によつたものに外ならない。私の主義と主張が同社のそれと相当な隔りがあつたと思われた時ですら、同氏が私に与えられた寛量は、私の容易に忘れえざるところである。

終りに附託しておきたいことはこの著を出版するについては、必らずしも私が進んで纏めたものではないということである。この著の出版者野沢広君は、米国以来の友人であるが、その本業とする貿易以外に、将来出版界に雄飛せんとする希望を有している。その門出に白羽の矢を付けられたのが私であつた。これがこの著の粗漫なることの弁解にもなろうし、またそれにもかかわらず大いに売れることを希望する理由にもなるであらう。

清沢浏選集第三卷

自由日本を漁る

目次

第一篇 日本の姿を画く

1 柔道試合

2 政治と学問の衝突 【1938.7『文芸春秋』】

一 政治は本質的に旧思想だ

二 学問が政治と妥協し得る限界

三 学問徳川幕府を倒す

四 明治の教育の指導精神

五 幕府と輿論政治

六 中枢権力の消滅

七 官僚教育の収獲

八 学問圧迫の危険

3 東洋思想西洋思想

一 魚釣り

二 深い思想浅い思想

第三卷目次

三 仏教の宿命論

四 実利と哲学

4 二つの日本

一 国際会議に於ける日本

二 武士は喰わねど高楊子

5 日本とマルクス主義

一 日本に於けるマルクス主義の流行

二 マルクス主義の根本思想

三 マルクス時代と現今の世相

四 力を好む日本

五 警官の広告と新し好き

六 マルクスの学説と経済状態

七 国家権力絶対の国

八 注意すべき二ツの特質

第二篇 明日の婦人問題

1 百年後の結婚

一 親の承諾の必要なし

二 結婚は必要が生んだ因襲

- 三 世界共通の結婚様式
- 四 モダンガール出現の意義
- 五 男が飯を焚いて女が稼ぐ
- 六 離婚数案外少なし
- 2 九條武子夫人の結婚生活
- 一 讃られた一世の麗人
- 二 不幸なりし彼女の家庭生活
- 三 夫の責任か妻の責任か
- 四 夫婦相いれぬ性格の対立
- 五 白蓮女史と武子夫人の比較
- 六 離婚の問題に対する疑問
- 3 モダンガールの解剖
- 一 有名人は大概モダンガール
- 二 モガは不良少女の別名
- 三 振袖姿とモダンガール
- 四 男子道徳の進歩
- 五 男の自由に造られた女
- 六 女が不平を訴ふる姿

- 4 伴侶結婚の話
- 一 リンゼー判事の新提唱
- 二 内閣の産児制限論
- 三 伴侶結婚の意味と由来
- 四 伴侶結婚が現れた原因
- 五 新制度に対する学者の批判
- 六 激しい賛否の議論
- 七 結論ならざる結論
- 5 黒い爪の恋愛
- 一 女の恋と嘘
- 二 頭の毛と女の苦勞
- 三 恋から観た髪の変遷
- 四 ノラは古い女
- 五 恋と生活意識と
- 第三編 社会を覗る
- 1 夜の辻車
- 2 悪魔の洗礼
- 3 接吻の種々相

- 一 『嘗め合う事』が礼義
 - 二 キッスの起源の諸説
 - 三 接吻を知らない国
 - 四 嗅ぐキッス、日本の接吻
 - 五 安息日はキッス厳禁
 - 六 キッスのお祭と共進会
 - 七 クレオパトラの唇
 - 4 **警察と裁判所** 【1927.3『法律春秋』】
 - 一 左団次宅の泥棒
 - 二 警察改造の必要
 - 5 梅幸とお軽
 - 6 創造と模倣
 - 一 エヂソンの挿話
 - 二 遊戯と労働の境界
 - 三 模倣と真似事の日本
 - 四 世界第一位になるには
 - 7 我輩の日本主義
- 第四編 政治断層の日本
- 第三卷目次
- 1 第一回普選の解剖
 - 一 第一回普選の結果
 - 二 投票数と棄権率の問題
 - 三 『多数政治』の勝利
 - 四 米国に於ける運動
 - 五 『少数政治』の勝利
 - 六 日本選挙民の無智
 - 七 如何にして改善するか
 - 2 議會中心主義の論議
 - 一 鈴木内相の功名
 - 二 日本の憲法
 - 三 教育と議會主義
 - 四 極右と極左
 - 3 **嘘だらけの政治**
 - 一 政治と特殊国
 - 二 政府党万万歳
 - 三 精巧な機械と政治
 - 4 **軍人の道德観** 【1927.4.3】

- 一 大尉の『責任』と当時の事情
 - 二 海軍省の『責任』否認
 - 三 かれ自身の道徳観
 - 四 異なる善悪の標準
 - 五 提供されたる思想問題
 - 5 論策なき日本の新聞
 - 6 甘粕と大杉の対話 【1929.5.5】
- 第五篇 自由日本を漁る
- 一 華族と平民
 - 二 風呂場の『敬神』
 - 三 立小便と国粹 【1924.10.2】
 - 四 有嶋武郎の墓
 - 五 思想を市場に出せ
 - 六 婦人の権利と男
 - 七 女給取締りとチップ
 - 八 早仕舞の角力店
 - 九 政治家の知識
 - 一〇 飯野吉三郎と『神様』
-
- 十一 慈善国日本
 - 十二 国家総動員
 - 十三 日本が軍備を撤廃したら
 - 十四 奢侈税か金儲か
 - 十五 政友会の安芝居
 - 十六 高橋是清君に呈す
 - 十七 頭巾姿の高橋老
 - 十八 現役だから
 - 十九 田中総裁に呈す
 - 二〇 結束と内輪揉め
 - 廿一 岡田文相と宗教法
 - 廿二 床次竹二郎君の頭
 - 廿三 愚にして直なる者
 - 廿四 若槻首相
 - 廿五 犬養の政友会入り
 - 廿六 犬養を葬るの辞
 - 廿七 分らぬ犬養の引退
 - 廿八 普選、加藤、タイム

廿九	極右の集団監視庁	四七	肥えた人と瘦せた人
三〇	『一旦緩急』の教育	四八	警察の『高等』と『下等』
三一	軍事教育	四九	軍縮会議を開け
三二	対路同志会	五〇	大臣の支那旅行を勧む
三三	惨めな勤儉週間	五一	貴族院の腐敗の原因
三四	手紙と金貨と	五二	官製国の日本
三五	広東政府と夢想家	五三	迷信公行の社界
三六	張作霖の神頼み	五四	新聞と公人の名前
三七	金と馮玉祥	五五	旧日本の再現と暴行
三八	支那の騒動と車夫の話	五六	右翼団体と暴力行爲
三九	双方を笑殺しろ	五七	自殺に対する疑問
四〇	嘲笑病患者	五八	華族制度を如何にする
四一	流行の人口問題	五九	旧日本過讃の危険
四二	十万円の方方	六〇	共産党事件と為政者
四三	田中男の借金事件	六一	魔除け祭事の弊害
四四	二人一体の後藤伯	六二	芸者亡国論
四五	陸軍の活動	六三	頻発する学校騒動
四六	宋の農夫の話	六四	未青年の飲酒喫煙

第三卷目次

- 六五 芥川氏の自殺
 - 六六 円タクと人力車
 - 六七 疑獄事件と政治家
 - 六八 東京の自動車不安
 - 六九 蔣介石君に答える 【1927.10】
- 第六篇 世界は動く

1 満蒙と日米の立場 【1928.6.1】

- 一 モンロー主義と日本
 - 二 各政党の満蒙観
 - 三 日本の主張の根拠
 - 四 日米両国の相違
 - 五 米国の対満蒙観
 - 六 不用意なる真意
 - 七 米国の対満蒙失策
 - 八 日本は被告の立場
- ## 2 不戦条約調印の日 【1928.10.20】
- 一 六十年目の独逸使節のパリー入り
 - 二 由緒多き『時計の間』で正式署名の会合

- 三 主人役の仏国外相の司会振り
 - 四 各国の使節順次に署名
 - 五 不戦条約の効果とその特長
- ## 3 ムツソリニを排す
- 一 ムツソリニに対する観点
 - 二 かれの議会政治軽視
 - 三 フッスシズムは必要の産物
 - 四 ムツソリニとレニン
 - 五 結局同じ右翼と左翼
- ## 4 選挙から見た米国
- 一 スミス敗北の意味
 - 二 米国選挙制度の不合理
 - 三 軍資において両党伯仲
 - 四 『繁栄』を重点の政争
 - 五 自由主義の無力
 - 六 二大政党の分解作用
 - 七 新内閣の政策如何
- ## 5 東京と大阪の相違

6 張作霖の最後 【1928.9.6】

- 一 事実の真相日を経て益々不明
- 二 張作霖の都落ち
- 三 爆発当時の現状
- 四 犯人を想像して
- 五 問題の三条項
- 六 日本を誣いるものの論拠
- 七 所謂支那浪人の活動
- 八 根本的調査を要す

【以下、青字で示した論文を収録】

2 政治と学問の衝突 【第一編 「日本の姿を画く」から】

一 政治は本質的に旧思想だ

共産党事件、学園の自由擁護運動、そうした近來の事件を見て、私は現代の日本に二つの大きな潮流があるのを感じる、一つは政治の流れであり他は教育の流れである。

日本の政治は、どこの国のそれとも然るようにその基礎をわが国の伝統と歴史において居る。よく政治家の頭は古いというけれども、そしてそれは確かに事実であるけれども、併し古いのは政治家の頭だけでなく、實際政治の標的そのものが古いのである。政治家が二口目にはいうところの醇風美俗とは何であるか。それは日本の伝統を尊重するということ以外の何物でもない。そしてその伝統とは何かといえ、鎖国による封建政治の間に生れた道徳のことなのである。

政友会政府当時の内相鈴木喜三郎氏が、如何にして所謂危険思想を防止し得るかという質問に對して『近頃の国民は大和魂がなくなっている。これは大和魂を古にもださねばならぬ、これをなすためには忠君愛国敬神崇組の精神を涵養する考えである』と述べたのは、決して単なる反動政治家の言説のみと解してはいけない。こういうことを公然云い得るものが沢山あるかどうかは別としてそれは政治家の間に通在する標準的な思想である。浪花節の奨励、大日觀世音の建立、

神社仏閣の設立、こうした趣旨について政治家が力を入れるのは、なにも政友会だけに限つてはいない筈だ。

即ち日本の政治の基礎は、わが国の伝統と旧習の上に立てられているといつていい。これは政治の本質からいつてある程度までやむを得ないことであつて、政治というものはその国の国民性と離れて存在しうるものではない。国民全体を横に貫ぬく政治が、数千年以来の国民性、旧習、伝統、傾向と結びつきたがることは当然であつて、ただ分れるところは政治家がこれを如何に導くべきかの点である。

二、学問が政治と妥協しうる限界

この古い伝統を基礎とする政治を一潮流として、他にも一つの潮流がある。それは学問である。学問の基礎は純理にある。純理に合わないものはそれが如何なる貴重なる伝統と雖も、これを否定しざるところがその特長である。政治は前に述べたように、言論の基礎を伝統におくに對し学問は真理に到達せんがためには、一個の仮説を設けてまでも伝統に煩わさることを避けるのである。

その社会の実権を握るものが常に政治であるに顧みて、純理に棹さず学問、教育と雖も出来る

だけ政治に背かざらんことを心がけるのは勿論である。併しながら教育が忍び得る限界は自ずから存する。コペルニカスは永遠にその説を秘して、政治の因襲に媚びているわけにはゆかなかつた。またダーウィンが聖書の創生記にある人間創造記に共鳴し得るには、自ずから限界があつた。二つの異なつた基礎の上に立つ思潮は、永遠に妥協乃至は主従の關係に立つわけにはいかぬのである。一つはいずれか他を圧して、その独立を主張する機会が来ねばならぬ。

學問と政治の衝突は何処でも見られる。二三年前に米國で問題になつたデイトン市の進化論裁判の如きはこの一つの例である。正統派のキリスト信徒が多いテネッシー州では、『民意を尊重』して一つの法律ができた。それは官立学校で進化論を教えてはならぬということである。誰も知るように旧約聖書によると、人間は神の形に型どられて造られたもので、頗^{すこ}ぶる神聖なものであるのに進化論によると猿から進化したというのである。かくの如きは『神の子』に対する侮辱だといふので、法律を以てこれが教授を禁止したのであつた。デイトン事件といふのは、この法律を破つて中学校生徒にこれを教えたスコップ教師に対する裁判で、その結果は妥協的ではあつたが、結局その教師の敗訴に歸してしまつたのである。

かかる法律は米國において、なお十数州の有するところなのである。米國が新興の國として、その急進的なる事、他國に比すれば少しく突飛の嫌いさえあるのに、その國の政治はなおこの状

態を出でないのだ。政治家としては悉くが進化論抑圧の如き法律の可なることを信じているのではないが彼等の目がけるのは大衆であり、大衆は旧習と伝統に執着するものなるが故に――換言すれば政治の本質がいわゆる醇風美俗を目標とし、その国民の伝統と結びついているが故に、少数の政治家の力を以て如何ともすることができないのである。

この政治が、法律という強制力を以て、あらゆる新しい現象に対して押えつけようとするのである。そしてそれは確かにある程度まで可能である。政治が軍隊、法律、警察というような制裁機関をその背後に有する間、このいわゆる醇風美俗は、相当な期間はその旧態のまま維持しうる。併しわれ等が忘れてならないことはこの間にあつて他の一つの勢力――教育と、学問が反対に働きかけておることである。問題は教育が政治と妥協しうる限界また一つの勢力が他の勢力を圧迫し得る限度如何である。

三、学問徳川幕府を倒す

私はこの事を説明する最もいい例が徳川幕府の崩壊の事実だと思う。

福地源一郎氏はその昔幕府衰亡論（明治二十五年、民友社発行）において、幕府を亡ぼしたのは学問だといっている。同氏の説を引用してみる。

『その一大原因とは何ぞや、曰く徳川氏が当初より養成したる漢学徒なり、抑も徳川家康公撥乱反正の偉業を樹てたる第一着に眼を注がれたるは文学の奨励に在りき、蓋し鎌倉足利氏の世には左しも王朝の頃盛なりし学問も戦乱の為に衰微を極め、偶々読書せる者は僅に僧侶の間に残り、文物は挙て暗黒に陥りしを家康公は此に慨せる所ありて藤惺窩に謀り、林道春を聘して儒員となし庠序学校を天下に起さしめ以て今日あるを致さしめたる其功業は千載不滅の功業なり』

かくして福地氏は徳川家康の文学（学問）奨励の功はこれを認めるけれども、併し図らざりき、この学問が却つて徳川幕府を倒した原因を作つたのである。これが理由を説明してかれはいう――

『家康公の政略は名を捨て実を取るの政略なり、正統の政府は是を虚器たらしめ、實力の政府を以て全国を統治するの政略なるに其奨励したる文学は漢学にして、殊に惺窩・道春が帰依したる程、朱の学派は名を以て宗とし、理を以て本とし實力を排斥して正統を尊敬するの学派なれば、家康公が奨励せる文学は即ち家康公の政略に反対せる学派なりき。家康公の如き大元帥としても、大政治家としても不世出の人にて在ながら、学問なき悲しさには、其学問は即ち其政略主義に全く正反対たるを識別すること能わずして是を奨励し以て伝家の遺訓とせられたるぞ是非なかりき』

i 藤原惺窩（せこか）1561-1619、播磨出身の儒学者、朱子学に傾倒、「藤惺窩」は中国式の名乗り。

福地氏の説くところによれば、徳川幕府の政略は『幕府は日本の主権にして、朝廷は空位に備わる隠居なり、諸侯は幕府の命令を遵守すべき幕府の臣下なりと制定したるに、其学校に於て教育する所は徳川氏は覇者なり、朝廷は天子なり。覇者は諸侯を率いて以て天子に帰すべき者なりと、薰陶したり……是故に勤王精神を日本全国の人民に抱懷せしめたるは即ち学問なりと、云わば其学問は即ち徳川氏が奨励したる所のものに非ずや』というのである。

この学問が少数専制を排して、万機を公論に決するに至らしめたのである。それも始めの間は学者で政治に参加したのは新井白石、物徂徠の二人ぐらいしかなかったのだが幕末に当つて外国との難問題続出するに際しいわゆる及第出身を抜擢し、この人々が『其平素読書上より感得したる知識才略』によつて、諸侯の意見を広く聞くことになつたのである。

幕府の政治の特長は専制独裁にあつた。然るに幕末に当つて、この幕府の伝統を破つて広く諸侯の意見を聞くことになつた。これが收拾するに由ない紛争を招いて結局幕府を倒壊した重大なる原因であつて、そして事をここに至らしめたのは学問の力である。故に曰く学問徳川幕府を倒すと。

四、明治の教育の指導精神

徳川幕府という政治の中心は、学問に対して一時の妥協はなしえた。新井白石、物徂徠の如き儒者を召しかねることにより、ある程度までその学説をすら買い得た。併しこの妥協圧迫には自ら限界がある。そして絶えず働いているところの学問の力に抗し得ずして、自から倒れ去つたのだ。

同じことが現代——昭和四年において見る事が出来ぬであろうか。普通選挙は日本にしかれた、それは決して治者階級が喜んで国民に与えたものではない。元来、日本においては国民一般がかつて政治に参与したことはない。如何なる重大事件も極めて僅かな人々がこれを処断し、決定してかつて疑問を持たれたことがないのである。然るにその国民に対し参政権を与えなければならなくなつたのは何故であるか。私はこれを学問の力とみる。徳川家康の学問奨励が幕末においてその結果をみたように明治維新に決定した教育普及の方針が今に至つて芽を出し始めたのだと私は考える。

徳川幕府の教育の方針はこれを支那に得た。故にそれは王道を主張し正道を尊崇する学問であつた。明治維新の改革はその根本思想において、一歩もこの学理から出て居らない。それは極めて忠実にその思想を具体化したものであつた。これに対して明治の教育の指導精神はこれを西洋に得た。その思想の根本はデモクラシーであり、キリスト教の唯神論に反抗して起つた唯

物論であり、偶像破壊の運動でもある。

無論、この西洋思想に対しては、日本の政治は出来るだけ干渉した。いわゆる『長を採り短を補う』というような標語の下に、日本の伝統に合しないものはつとめて避けた。併しこの努力は果してどれだけ成功し得たろうか。根幹をそのままにしておきながら、枝葉だけをつみとつて、それがどれだけ同じ葉の出でこないことのために役立つだらうか。

長い目から見てこの『政治』の努力は、大して役立つて居らないと思う。教育と学問は『政治』の干渉の間を縫うて行くべき道を行つて居る。デモクツラシーの思想が、かつて学校で教えられたことがないに拘わらず、いつの間にか日本人の信条になつて、それが普通選挙にまで進んだのは、その有力な証拠である。議會中心主義を否定して居る日本の憲法の文字は、一字も変更されて居らないに拘わらず、その解釈について国民は鈴木前内相の議會中心主義否認の声明を嘲うまになつて居り、また特権階級の打破という如きは日本の政治が謹んで触るるを欲しないものであるに拘わらず、国民は原則としてこれに疑いを持つものではなくなつてしまつてゐる。

徳川幕府の場合においては、その学問が果実を持つまでに二百五十年を要した。明治政府の場合において、その採り入れた学問が結局形となつて現れるのは何年を要することであらうか、この激しい干渉の中をくぐりぬけて。

五、幕府と輿論政治

西洋の学問の著しい特長は、その根柢に人類平等の觀念があることである。これはその学問の種類を問わない、議會主義でも、社会主義でも、共產主義でも、その異なる主張の底を掘れば例外なく人類平等の思想に出発していることがわかる。

この人類平等の觀念に出発したデモクラシーの思想は必然的に自己解放の運動である。彼等は今まで、かつて疑ったことのない権力者の権力と社会の契約を疑うに至った。彼等は彼等の前に君臨する特権階級に対し、そして権限の根柢について疑問を持ち始めた。彼等は自己を従来の束縛から解放するためには、既存の権力に対しては部分的に或は全部的に否定しだした。そこに社会の新しい芽生えがあつたけれども、併しそこにまた混乱もあつた。

この一つの例として私は再び幕府を引用する。徳川幕府は外国に開港をせまられて狼狽し、一方朝廷へ事の次第を奏問すると同時に、地方在府の諸大名を城中に呼寄せ、『銘々存寄の品も有之候はば仮令忌憚に拘り候共不苦候間聊心底不相殘可被申聞候』と示達した。この示達は徳川幕府が天下の大小名をして口を政治上に開かした最初のものであつた。即ちその専裁政体は會議政体に代つて來た。幕府内部の関する限り、それは普通選挙の施行といつてもよかつた。故に福

地源一郎氏はこれを左のように論じている。

『世人往々幕府を評して保守の為に倒れたるものと論断すれども、余は之に反し幕府は進取の為に亡びたるものと明言せし事ありき、其故如何となれば嘉永六年の米使渡来に際して幕府もし是を朝廷に奏せず、諸侯に問わず、水戸殿にも相談せず、全く御老中御用部屋（幕閣）の評議を以て処方を定め、断然通信商を許可すべしと約して、開港条約までも取極たらんには、朝廷と雖も、諸大名と雖も、是即ち幕府大権内の事と思惟して毫も之に向つて異議を鳴らざざりしならん。然るを事此に出でずして幕府が、家康公が制定し置かれたる將軍専裁の政体を固守せずして、是を朝廷に奏し是を諸侯に謀ると云える新政体に変更したるが幕府衰亡の一大原因なれば、即ち進取の為に亡びたるものに非ずや。』

徳川幕府が輿論に聞くという形式をとつたことが、幕府衰亡の一原因であつた。従来隠れて居つた幾つもの異論が、この形式により突然表面に現れ、幕府はこれを統一するに由なくついに倒れ去つたのである。

三千年以来、かつて自己を主張したことのない無産階級が、普通選挙の始めに當つて、即ち自己を主張し得る第一回の機会において、多分に破壊と自棄と短見に満ちてはいるが、その押えられた自己を主張することが、無理といわれようか。幕府は自から開いた会議政体に自己を殺した。

既成政党と既成階級は自から与えた普選において、無産階級の声に抗し得るであろうか。

無産階級の声とは学問が与えた声であることは前に述べた。政治と教育の衝突もここに至つて真剣だといわねばならぬ。

六、中枢権力の消滅

ただここに注意しなければならぬことは、自己の解放必ずしも自己建設だということができない一事である。

これを立証するには余りに多くの例があるが、私はここでは朝鮮の事実を語ろう。朝鮮におけるわが国の当局者は明らかに重大なズレンマに陥っている。それは教育の普及ということは、文明政治の当然の施設として何人からも疑われない。従つて朝鮮に対する第一の方針としては、この教育普及にあるのであるが、併し問題なのは、朝鮮人に教育を授ければ授けるほど、猛烈な排日党となることである。日本は異常な努力をして教育の施設を完備して、しかもその報酬としては日本に対する反抗人の養成のみという結果になるのである。

朝鮮人の自己主張は、善かれ悪かれ、醒めたることの表象である。それは自己解放の熱心なる運動だというに何人も不服はない。併しこれを以て朝鮮人が自から治むるまで進んでいるか、ま

た彼等は實際的に自己を建設するまでになつてゐるかという實際問題になると異論が多いと思う。即ち自己解放と自己建設とは異なつた二つの問題として観ねばならぬのである。

この事は他の問題についても見る。日本の無産階級は普通選挙権を要望した。それは自己解放のために彼等の真摯なる要求であつた。そして彼等は当然の権利として、これを得た。この点に関する限り、彼等の自己解放は完成したといえる（それがどれだけ無産階級のためヴァイタルなものであるか否かは別問題として）。併しながらかく自己の解放を真摯に要求した彼等は、同じような真摯さで、その建設方面に努力したか。この場合建設の第一歩は投票権の有用なる行使に始まらねばならぬ。そしてこの点においてデイスイリュージョン【disillusion】を感じたのは、われ等のみではない筈であらう。

こうした問題について比較的によくみているのはH・G・ウェルス君である。同君はその近業“Democracy under Revision”において——

『われ等の近代の民主的政府の明らかに示すことは近代のデモクラシーの目がけたところは、権力が少数から多数に移つたことでなくて、権力が世界から消失したことである。投票は防衛の器具であつて、建設的な器具ではない。益々要求する建設的必要に對しては、政治的デモクラシーは失敗した。』（同書三六頁）

それは唯に政治の問題だけではない、文学においても近代の特長は、過去の道德と習慣を否定するところにあつた。プロレタリア文学は無論として、如何なる近代の文学も既成觀念に対する反逆なくして大なる存在を社会に印したものはない。

こうして自己解放の足並は決して遅いということとはできない。彼等は既成の權力を否定し、既成の道德を否認し、今は既成の階級を否認せんとしている。そしてその足は文芸に始まり、政治を経て、今や經濟に打ち当たっている。その自己解放に内在する危険は、ウェルス君も指摘した通り古い權力を否定して、新しい權力を樹立し得ず——即ち社会の中樞權力を有さざるに至つたことであるが、そしてそれが謂うところの近代思想の動搖の重大原因だと思われるが、併しよかれ悪かれその進行曲は停頓するものではない。それは過去の『政治』が総ゆる努力を払つてこれを防止しようとしたに拘わらず、成功しなかつた歴史の事実によつても明らかである。

七、官僚教育の収獲

『大学の二つや三つは潰してしまふ決心がなくては駄目だ。』普選第一次の内務大臣鈴木喜三郎君は共産党事件に際して、そう放言した。そして政友会内閣は大体この態度を裏書きした。この放言こそ政治が学問に対する挑戦でなくて何であらう。

しかもこの悲劇は『政治』が自から干渉し、自から造つたところの大学を非難し攻撃するところにある。試みにみよ、日本の大学——殊に官立大学は政府が自己の意志通りに作つたものではないか。それは重に官吏と官僚を養成したところであつて、厳格なる監督の下に、『国家有用』の人物を製造すべき機関である。その機関が他のいずれの学校よりも、まず赤化し、政府当事者をして、これを潰すも可なりといわしむるに至つては、歴史の皮肉もまた極まりである。

この皮肉は、政府の監督が嚴重であればあるほど、その結果は政府の目ざすところと反対であるという事実によつて倍加する。政府が学問の一部門に対して自由討議を禁じ、学問を一定の型に入れ、既成觀念としてこれを注入する結果は、学問を一種の *Dictum*【金言・断言】として受け入れ、信仰するに至るのである。現在の学生の多くの心理状態がそれであつて、それは政府の蒔いた種子に対する当然の收穫である。詰込み主義の教育を受けた軍人などに迷信教の信者が多いのは、他の顯著なる例である。

すでに政治と教育の対立において、政治はついに教育を圧迫し尽すことが出来ないという事実が明らかになれば、政治は従来とつて来た方法を変更せねばならぬ筈である。それは自から生きる所以であり、また自からが代表する階級が生きる所以でもある。福沢諭吉氏は明治初年において、かれが危険思想、過激思想として非常なる迫害を蒙つた際、こういったという——

『日本人にして将来、思想的に悪化して我国体を害せんとする如き人物が出づるとすれば、必ずや官立学校において養生されたる人々の中より出づるであらう。なぜならばわが慶応義塾のようなりべラル、平等的な、階級的思想のない所では過激なる思想は起り得ない。官立学校の如く一定の箱の中に入れて教育する如きは、大なる教育方針の誤りであつて、かかる不自由なる教育方針の下に勉強を続けるものは、一步誤れば過激な思想をいだくに至るものである。』（時事新報昭和三年四月十八日号所載）

過激、非過激という如きは、相対的な、極めて茫漠たる内容を有する文字である。われ等は元よりかかる抽象語に囚われてはならぬ。われ等がここに福沢氏の言をひいたのは、かれが五十年も以前に、すでにこの官僚教育の落つく先を予見した点にある。

八、学問圧迫の危険

バートランド・ラッセルは日本の教育についてこう書いている。

『近代日本は総べての大国において顕著であるところの傾向を最も明らかに示している。その傾向とは教育の最高の目的を、強大なる国家を作る点におくことである。日本の教育の目的は彼等の情熱を訓練して国家のために捧げ、またその得たる知識を国家のために有用ならしめるようにする点に

ある。私はこの二つの目的をよく完成し得たその巧妙さに対して、これを賞讃する言葉のたらないのを感じるのである。日本はペルリ提督の艦隊が、その門戸を叩いた頃から、自己保存が極めて困難なる位置におかれた。彼等がこれに成功したことは彼等の方法の正しかったことを示すものである。（自己保存そのものが害悪だというのではない以上）。

併しながら彼等の教育の方針は、ただ危険なる状態におかれたる場合においてのみ是認されるべきもので、目前の危険に瀕しないところの、如何なる国家にとつても害がある。神道宗教は旧約聖書の創世紀よりも曖昧なる歴史を含んでいるが、それは大学の教授すらも問題にしてはならぬものである。デイトン裁判（米国の進化論裁判）の如きも日本における神学的暴虐に比すれば全く物の数ではないのである。国家主義、忠孝道德、Mikado-worship 等の如きは論議の問題となしえないものであつて、従つて諸種の進歩は殆んど不可能である。

この種の鑄込み主義組織（Cast-iron system）の危険は、進歩の総べての方法として革命を刺戟することである。この危険は真実である（それは恐らく直ちにではないけれど）、そしてその危険は多くは教育の組織から来るものである。かくの如くしてわれ等は近代日本の欠点を古代支那のそれと反対な側に発見する。支那のそれが余りに怪疑的で、怠惰であるに対し、日本の産物は余りに独断的であり、余りに精力的（energetic）になる点にあるであらう。』

以上はラッセルが日本の教育に対する観察である。(Bertrand Russell: On Education, pp, 41) とう述べて来て結論は自然に生れる。第一の場合において、政治が学問を圧迫すること余りに甚だしければ、教育と学問は自己の進路を革命の手段によつて切り開くの外はないという事である。第二の場合において、政治が教育、学問を待つに寛大であり、妥協的であれば、学問は政治と相携えて、或はこれを率いて平和にその行くべき道を行くということである。そしてこの何れの場合においても、最後の勝利をうるのは学問であつて政治ではない。政治は一時学問を圧迫する如くみえても、長い間には学問が示す道に従うの外はないのである。

日本は何処に行くであろうか。これを予測するには、日本の学問が如何なるものであるかを検討するを必要とする。そして日本の学問が大体において人類平等、階級否定、唯物史観というような流れの上に立つとすれば、日本の行く先きを観測することは、単なる好奇心だけといえようか。ここに唯一つの問題は政治家がこの inevitable を前にして如何に処して行くべきかである。

5 日本とマルクス主義 【第一編 「日本の姿を画く」から】

一、日本におけるマルクスの流行

日本において何故、今の如くマルクシズムが流行するか。

マルクシズムに悩まされるのは元より日本のみではない。『世界に一個の怪物横行す。その名をマルクス主義という』とでもいわなければならぬほど、現に世界はこれに悩まされている。そしてこの中には多分に幻影もある。支那の何処かに暴動が起る。それが直ちにマルクス主義の所為なりとする。メキシコの百姓が少しく系統的に泥棒をしたとする。それは直ちに共產主義に結びつけられる。誰かが何かについて少し景気のいいビラを撒いたとする。すると直ぐにソヴェート政府が糸を引いているのではないかと疑う。昔は不思議な事は何でも神様の仕事にしてしまつたように現在新奇な社会的現象でマルクシズムに結びつけられないものは何にもないといつていい状態である。

マルクシズムは世界において、それほど不思議な怪力を有しているが併し日本におけるマルクシズムの流行は、それとは又別個な意味を有しているようである。誰でも気がつくであろうように日本ほどマルクス、エンゲルス乃至はレニンに関する著作が売れるところはない。マルクス主

義の本場の労農ロシアは別として、他の各国においてはこの種の書物は極めて限られたる書店が、限られたる読者に対して発行するを常としている。然るに日本においては、円本と称する大量生産によりマルクス資本論という晦渋なる書籍の翻訳が十何万部を売りたりと称せられる以外に、マルクスとさえいえば、その解説でも、手紙でも、その経済学説でも、止るところなきほどの需要が、これを待つてゐる有様である。

昨年、ベルリンにおいて十一名の中産階級及び労働代表者に対してメンタル・テストを行ったことがある。その結果が、ニューヨークタイムスに報ぜられているが、この人々はトマス・エヂソン及びヘンリー・フォードの名は全部知っていたが、カール・マルクスの名に至つては知つてゐるものもあり、知らないものもあつた。即ち新聞によると『カール・マルクスの名は大多数の参加者を悩ましたものであつた。十一名の内三名は全く知らなかつた。ある地主は現存の共産主義運動の首領だといひ、また倉庫の監督はドイツの首相ウイルヘルム・マルクスと間違えた』と報じてゐる。

これは一個の小さい例であるが、自国人の中より出だした偉大なる思想的産物に対し、ドイツ人の知るところ斯くの如くである。日本において中学生、大学生は無論として、総ゆる階級を通じてこの名に親しまざるものなき状態に比すれば、その差は自ずから明らかである。

このマルクスが日本に流行する理由は何処にあるであろうか、元来一つの思想的流行は、それが流行するに相応わしい理由があつてのことである。地味が適せなければ、種子が育たないように、それだけの適応性がなければ、新思想は栄ゆるものではない。私はただ項目だけを左に並べてみたいと思う。

二、マルクス主義の根本思想

本論に入る前に一応注意したいことは、『マルクス主義』といつても、マルクスの学説の是非ではないことである。マルクスの説く経済学が正しいか、正しくないかは、一個学界の問題であつてそれはアダムスの経済学や、マルサスの人口論が、正しいか、否かというと同じところの一般にとつては興味の薄い問題である。これ等は少数の学者の論議に委して差支えない。日本国民は、その一般教育が進んだといつても、このアカデミックな経済論争に今の如く懸命になると信ずるのは困難である。

然らばマルクス主義の何が一般民衆の心をとらえるかといへば、それはプロレタリアが権力をとる方法である。即ちマルクスによれば現在の資本主義は必然に資本家とプロレタリアを対立闘争せしめるが、併し結局は労働者は資本家を仆して、自から権力に座するに至るというのである。

そして、この権力を奪う方法として、マルクスは革命を是認している。一個の真面目な学者としてマルクスは自から革命を煽動し或は唱導しているのではない。かれは資本主義の組織と勢いは、必然に革命の道を辿ると信じたとみるべきである。

マルクスは共產主義が正しいとしても其故を以て、国民の諒解と同意を得て、これを實行せんとするが如きは、事実を無視するものであるとした。大衆はその解決が如何なるものであるかについては無関心であり、強きに屈するものである。共產主義者は周囲を顧みず、その意志を他人の上に行う決意を以て進むべきであるとした。

以上が極めて、大雑把にいうマルクス主義の思想的基礎觀念である。即ちマルクスが世界の問題になつてゐるのは、その純粹な經濟學說であるよりも、寧ろ少数階級意識を有するプロレタリアの革命遂行を是認する思想であると思う。この思想が何故、日本においてそれ程流行するか――少なくとも、それ程評判になるか、これがわれ等の関心事なのである。

三、マルクス時代と現今の世相

第一にマルクシズムが流行し得るのは、時代の状態が、この説を受け入るに適當だという点に重きをおかねばならぬ。この事はマルクス自身の説が如何なる時に發表され、羽なきに天下に飛

んだかという事実を併せ考えれば明瞭になろう。

マルクスは一八一八年五月にトレヴェエスに生れた。あのフランス大革命はそれから二十年も以前のことであつたけれども、それに端を発した欧州の社会層は混沌として治まるところを知らず、一八三〇年——かれが十二歳の時には例の七月革命があり、越えて二月革命によつて皇位を廃して共和制度を宣したのはかれが三十歳の時であつた。

こうした政治上不安の時代にあつた上に、産業的には機械の発明による産業革命があつて、貧富の懸隔が益々烈しくなつて来た。国民はあげて一種の不満と反抗の氣分に満ちていた。今まで自から顧みるところなく、盲従して来た民衆は、権力者に対してその権力の根底を疑い質さねば止まぬ氣持があつた。マルクスが有名なコンミュニスト・マニフェストを公けにしたのは、こうした一八四七年の事である。そしてそのドイツ文のものが現れたのは、パリ革命の二三日以前の事だつたのである。

この時代を以て直ちに現在の状態に比するのには、或は不穩当であるかも知れない。併しながら世界大戦という大試練を経て——即ち火のようになつて敵と闘つて見て、さてその結果は何を目的としたかが分らないような大戦後の不安相は、決してその当時と大して変化があるものではない。ロシア、ドイツに始めて共和国は沢山出た。一面戦争のために生命を捨てたものがあり、其

遺族が生活に苦しんで居る状態にあるのに、他面成金が輩出して我僥勝手の振舞をする、社会的不平不満は漸次^{びまん}瀰漫して行く。青年には今までの道徳が役に立たなくなつた。権勢、位置に対する疑惑が出る——凡^{およ}そこうした精神的及び社会的状態が、本質的にマルクス当時のそれと、異なるだろうか。

マルクス及びマルクス主義が、時代を造ると思うものは間違つてゐる。時代と環境が、マルクス主義を造るのである。同じマルクスの資本論でも、(同書の一巻は一八六七年に発行された)ロシア訳は、他の如何なる国語のものよりも、ロシア国民の間に、その頃直ちに広くかつ深い勢力を植えたものである。この事はロシアの社会状態が、マルクス主義を受け入れるに最も適当して居つたのだと、解釈することが正当である。これに反して資本論はロンドンで書かれ、またマルクス自身がドイツ人であるに拘わらず、英、独、両国にそれが染み込んだのは、余程後の事で、現在なお学問としての研究は別として、そのインフルエンス【Influence】は案外に微弱である。日本を包む世界の状勢は、大戦後、マルクス主義を流行せしむるに適当な地盤を準備している。時代の不安と趨勢、そして国民の不満、それを第一のマルクス流行の理由に数えていいと思う。

四、力を好む日本

第二に日本にマルクス主義が流行するのは、日本の昔からの道德が、直接行動を是認して居り、それがこの点において一味のマルクシズムと共通のところがあるからだと思う。

日本の歴史を顧みれば、その中心を一貫するものは暴力主義である。武士道に美点のあるのは否定出来ないが、併しその道德の中心は何といつても暴力主義である。二人の間に面目に関する事件がある。すると彼等は第三者の公平な意見乃至は輿論に訴えることをせずして、『いざ尋常に勝負しろ』と直ちに武力を以て解決するのである。旧日本が尊敬した侠客なるものを見よ。それは完全な暴力主義者ではないか、また現に大衆の人氣を買っている剣撃映画を見よ、その間から輿論政治を見出すのは極めて困難である。

日本に議會政治が敷かれて四十年になる。この長い間、議會政治は實質的に少しも改善されないで、また改善せんとする努力より、これを蔑視する声の力が却つて盛んである。それは丁度、マルクス主義がデモクラツシーを侮辱して、少数者の直接行動を是認する点と、何分の根本的に共通するところがないといえない。

そればかりではない。日本は従来階級制度が劃然と分れて来て、それがため仏教的なあきらめ主義は生れたけれども、その半面、階級に対する激しい反感も生じて来ている。現に水平社運動は将来の日本の癌を形成せんとしているのである。

こうした基礎——藩は藩と争い、一部落は他部落と闘い、そして輿論政治のない国において、直接行動主義のマルキシズムが、一部の同感を得るのは無理だといえようか。現在の世界は今までのところ唯二つの政治手段しかない。一つはデモクラッシーによる漸進主義か、然らずんば直接行動主義による少数者の専制主義これである。そしてその専制主義には左右両翼の相違はあるけれども暴力を以て他を押えるのは、即ち一つである。例えばロシアの圧迫的な帝政時代の後にはボルシェビキあり、イタリーの赤色混乱の後にはファッシストある如きがそれである。われ等は日本の政情が、イタリーに遠くして英国に近いと断言することを困難だと思う。

五、警官の広告と新し好き

第三に日本にマルキシズムが流行するに至ったのは、警官の宣伝によるところが極めて多いと思う。これは一見不思議なことだが、事實は即ち蔽うべからずである。

マルキシズムに対して世界が神経を尖らしていることは何処も同じだが、併し日本ほど極端な国も少ないと思う。日本における所謂重大事件なるものは、その半ばはこの思想問題に関するものである。演説をする、それが少しマルキシズムに触れると直ちに中止される。ニキビの出ている青年達が何処かで集まる、それが『共産党事件』になる。この主義を食い嚼つたものは要視察

として尾行を附する。そしてこれ等が常に新聞によつて馬の杳大の活字を以て報導されるのである。

こう誇大に広告される以上、それが青年や一部の者の好奇心をとらえないわけではない。ある者は進んで研究してみる気にもなるだろうし、またある者は極端な官憲の圧迫に対して反抗的気分にもなるであろう。春秋の筆法を以ていえば、日本にマルキシズムを流行せしめるものは、警察官なりといつても過言ではない。それほど警察官の活動と、それを報ずる新聞は、マルキシズム宣伝の任務を尽している。

第四にマルキシズムが日本に流行するに至つたのは、日本人が兎角新しい事を歓迎する国民だからである。キリスト教が始めて日本に輸入されて来た時は、同じく今のような流行を見たものであつた。当時の秀才はあげて、この方面に走つた観があつた。有力な新聞と雑誌は喜んでこの人々に紙面を提供した。現在のマルクス主義の流行は、ややその當時に似ている。

新しい事を好きな国民性は啻にキリスト教に關することばかりではない。ベルグソン、タゴールその他苟も世界の問題になつてゐるものは、一応は日本を騒がせないことはない。あの学理が難解で、世界の内にそれを解するものが指を屈するぐらいしかないといわれるアインスタインが日本に來た時はどうだ、何処にいつても聴衆は這入り切れないほどあつた。彼等は何を聞かん

としたか、それは彼等が学問に忠実であるということよりも、寧ろ新しい事に対する執着であり、好奇からであつたではないか。

われ等は無論マルクス主義を単なる流行として軽視するものではない。それは社会組織の根幹から出発しているものだけに、将来これが影響は案外大きいと思う、併しマルクシズムが今の如き流行を見て居るのは、何といつてもわが国民のこの『新』を好む心理状態が手伝つてゐることは、否定出来ないと思うのである。

六、マルクスの学説と経済状態

第五にマルクスに傾倒するものの多いのは無論その学説によつてである。

マルクスの学説を吟味研究することは、本文の目的ではない。唯併しマルクスの学説に反対する学者と雖も、その有力な一部が特殊の時代において正確である点はこれを認めている。私はその一例として余剰価値【surplus-value】の問題をあげる。元来かれは世界を大体二つの階級に分けてゐる。一つの階級は俸給によつて生活するもので、他の階級は然らざる人々である。そして俸給生活者は貧しく、然らざる者は富んでゐると説く。

世の中が不景氣になつて、物品の需要が減退した時、或は不景氣の結果労働者の団結力が稀薄

になって、乱れ足で就職に努力する時、資本家は多くの場合に、労働者の俸給を引き下げることによつて価格の切下げを行い、消費者の購買心を煽るのである。最近米国における所謂新資本主義というものは、これとはやや行き方を異にしているが、普通の資本家が先ず目をつけるものは労働者の淘汰と賃銀引下げにあることは、われ等の経験するところである。

この場合、労働者がマルクスの学理が正しいかに感ずるのは自然である。そして従来の歴史の明らかにせられたるところによれば、マルクスの教育は不景気の場合において、常に多数の信徒を得て居る。

顧みて現在日本の場合には如何であろうか。世界大戦において夢のような金が這入つて、何人も好景気を満喫した後、世は一転して不景気に陥つた。果斷力と科学的研究と指導者のない日本は、今や不景気が常時の姿となつてしまつた。この時に當つて、自分達が生活苦にあへぐは、資本主義制度の結果であると云う宣伝が、共鳴を得るのは無理であらうか。現時の經濟狀態こそ、マルクス主義が盛えるには最も好適な時期であると私は信ずるのである。

七、国家権力の絶大な国

第六の理由は、第二にあげた理由と、やや同じであるが、日本人が国家権力を極度に尊重し少

数統治に対して、昔からこれを正当視して来たによるものである、自治思想乃至は個人主義の発達した国においては、国民自身の承諾なくして何人も彼等自身の上にたつて統治するを許さない。従つて少数専制の制度は、一般的思想としても存在し得ないものである。英国に一人の有名なるマルキシスト心酔学者もなき如きが、この例である。

然るに日本はこれと異なっている。わが国は上層からの力がわれ等を治めていると信じている。婦人の流行品に対しても国家権力を背景にする警察官の手が動くのである。ラヂオが国家経営の一部となつて監督さるるは勿論として、雑誌も、活動写真も、極めて手輕に、また大した抗議を受けずに、抹殺、禁止されて居るのである。これは国民が如何に国家権力に対し盲従的信仰を有するかを示すものである。

支配階級になれば、自己の意志を民衆の上に加え、これを圧迫し去つても可なりという思想は、即ちマルクス主義の思想である。無論マルクスはプロレタリアの革命を目標とし、他は現状維持を目標として居るのであつて、一見その相違は天地ほど違つて居るけれども、併しそれは目的の相違であつて、その根本の心的状態（フレーム・オヴ・マインド）に至つては、即ち一なりといつてもいいのである。

日本においても猛烈なる社会主義者の学者や思想家が極端なる国家主義者となつた例は決して

少くない。またムツソリニとレニン（現在はスターリン）がその主義が正反対に異なつて居つて、仇敵視して居りながら、その現れたる結果は、殆んど同じだという事実などは、今更ここに繰り返すのには余りに平凡なる問題である。

こうした国民性の間に、同じく専制独裁を教えるマルキシズムが流入し易きは容易に想像し得るところである。日本のようにムツソリニ伝十数万部を売り尽す国が、またマルクス的大量生産が行わるる国なのである。

八、注意すべき二つの特質

第七は日本の教育の方針によつて然るのである。これについては前項『政治と学問』の項において相当詳しく論じたからここでは、繰り返さないが、要するに自由討議によらずして、詰め込み主義に、また個人の権利を極端に圧迫して、国家権力を無制限に圧迫する教育から、一転してマルクス主義が生れ易いのは極めて自然である。日本の官僚教育が教える『国家』と『組織』は一個の迷信である場合が多い。この迷信は何かの機会から簡単に他の迷信に転じ得るのである。前述の通り国家至上主義の教育を受けた軍人に、大本教、天理教その他の迷信邪道に陥っているものが多いのは、この場合例は少し穏当でないが、そうした教育が如何なるものであるかを示す

に足ると思う。

以上、説いて詳かでない嫌いはあるが、大体何故にマルキシズムが、日本に流行するかの理由を説き得たと信ずる。併しただわれ等はこれについて大体二つの注意すべき事項があると思う。

第一にマルクス主義は元来純經濟問題に発した説である。そこから発して闘争説ともなり、プロレタリア独裁説ともなったと見るのが正当である。然るに日本人は元来政治的國民であつて、經濟的國民ではない。即ち日本人の考え方は問題を常に政治的に考へて、經濟的に考へないという特質がある。故にマルクスの説を取入れる場合にもそれに包まれる、經濟的要素を忘れて、政治的争闘だけが強くその頭を刺戟するということになるのである。マルクス主義の影響を注意するものは、将来この点を心におかねばならぬ。

第二にはマルクス主義を純經濟的に解釈せず、その結論たる階級闘争のみを受け入る結果、その革命目標は單に經濟的原因のみでなくなるのである。マルクスはその革命が資本主義發達の末期において起るべきことを予言している。即ち資本は益々堆積し労働者は益々貧しく、かくて相對立する場合にプロレタリア革命の勝利が予想されるのである。然るに實際問題として革命が成就したのは資本主義の熟した英、米、独、仏等でなくて、ロシアであつた。資本主義國としては世界の末席にすら据りかねる日本は、經濟的にはマルクスの予言を尙適中するに遠い状態にあ

るが、それが政治的になるに及んで危険があるのである。

x x

然らば日本におけるマルキシズムの流行に対して如何するか、それは別な論文を必要とする。ただそのレメディー【remedy】は以上あげた理由に対する対照療法として、適当なる改善をなすことによつてのみ与えられる事だけは断言し得る。極端なる国家権力偏重主義の代りに自由主義を、直接行動主義の代りに議会主義を、余りに政治的なる代りに経済的に、資本の乱舞を押さえる法律と制裁、無産大家の権利確保——これ等は恐らくマルキストから見ればブルジョア・デモクラットの詐瞞と一笑するものであり、また右翼の人々から見れば、生温き自由主義者の寝言といふべきものであらうが、併しもしこの外に国家社会のために健全なる行く道あれば、われ等は謹んで教を受けんとするものである。

(附記) この論文の内、マルクス主義を比較的詳細に説いた個處は、宣伝に墮する懼れがあるといふので某官憲の注意により削除した。説いて詳らかならざる所以はそういう事情もあるから附記しておく。

4 警察と裁判所 【第三編 「社会を見る」 から】

一、左団次宅の泥棒

いつか市川左団次の宅に泥棒が這入ったことがある。当節は泥棒でも目が高い。目の高い証拠には、応接間か、なにかの抽出しを二つ三つ開けてみると、五六百円がものは、直く手に入った。その中には金時計などもあった。

併しこの泥棒の目が高かったのは、単に高価のものが最少の努力で手に入ったことだけではなかった。かれが左団次ともあろうものは、五百円や六百円の事で警察へ届け出ないことを予見したことである。泥棒をしても、警察が知らなければ、これほど安心なことはない。泥棒は不安の伴わない悪事なして、気楽な歳を迎えた。

市川左団次の財産から五六百円だけ、不法な方法でマイナスになったのを警察が知ったのは、それから余程後のことであつた。元来は泥棒を叱る役目の警官は、この場合は左団次を叱つた。……誰かを叱つていなければならない階級ではある！。……『何故届けないのだ』と油を取られて、舞台の上では、大根役者を人參か牛蒡の切れ端しのように追い廻すかれも、スツカリ悄しよげた。私は左団次が、泥棒に物を盗まれて、それを警察に届けなかったという事実を、新聞で読んだ

時に、私の頭には一つの疑問が浮んだ。私が左団次だけ金があつて、五百円や六百円のものは、盗まれても大して苦にならない身分であつたら、私は果してこの場合盗難届けを出したろうかと。白状すると、私はまだ泥棒に逢つたことはない。もつと正確にいうと泥棒に逢うような物持になつたことはないといった方がいいかも知れない。いずれにしてもこれを実際の経験から語る事は出来ないが、従来警官と接した感じからいうと、自分が何か盗まれて届けに行つても必らず私自身が泥棒でもあるかのように、突つけんどんに叱られたり、訊問されるであろうことは確実だ。

私は道を歩く時には、持つて居る者を失くすまいとする努力と、落ちているものを拾うまいとする努力とが同じ程度に働いている。失くすまいとする努力については大概誰にも想像がつこうが、拾うまいとする努力というのは、誤つて拾つたが最後、この処置が大問題だからである。その俣猫婆をきめこむのには生れが正直過ぎ、さらばとて通り過ぎてしまふのには気が弱過ぎる。そこで結局警察へ届け出ることになるだろうが、こうなると大変だ。ポケットから何かの帳面を出して、――々訊問され住所姓名だとひねくり廻されると、大概なら金を出しても逃げたくなる。第一には屁ようなことで、時間をつぶされ、第二には何か自分が悪いことでもしたように横柄に威張り廻されて、不快な思いをするのだから、私は高利貸と警察だけには、成るべく用のない

ようにと平生念がけている。

私は当時、左団次が泥棒の侵入を届出でなかったことについて、実は大して無理だと思わなかった。

二、警察改造の必要

日本の警官は、何故ああ威張るのだろうか。何故ああ不親切なのだろう……これが原因を解剖して来ると長くなるからやめるが、いずれにしても、警官が威張る事、日本の如きは世界いずれの国に行ってもないことだけは、私の小さい経験でも断言する。

この威張ることは、単に対人関係だけではない。彼等の権力は商業と農業と総ゆる方面に及んでいる。彼等の『許可』と『願出済み』がなければ、店一つ行商一つすることが出来ないのである。こんな話がある。私の知った人で、其の海水浴場を目的にて家を立つた。五月頃完成して警察に届け出るとどこを直せという。そこを直して、六月頃届け出ると、今度は木が小さいという。何だかだといわれて、折角の家が其の間に合わず、その男は破産してしまったのである。

私自身が、先年の夏、ある博覧会に少しの関係を有したことがある。その事務員の仕事を見ると半分は警察関係である。柵を造る、警察の許可がいる。余興をやる警官の予めの許しがある。

小屋を建てる、警官の干渉がある……私は始めて『ああ警察国なるかな』と嘆じた次第であつた。一体資本主義の特長は自由競争にある。Laissez-faire【自由放任主義】の思想は、もう古いけれども併しなるべく他からの干渉を排して、商売をして自立せしむるところにのみ発展があることは、昔も今も変りはない。米国があれだけ発達したのも、結局この自由競争主義、無干渉主義の賜物だと云い得る。

然るに経済発展、産業立国を目標として進行のスタートを切つた日本は、今や警察と、その他の官憲の干渉に目も口も開かない状態だ。これを改善しなければ、日本の経済的進歩は、非常に妨げられることを覚悟せねばならぬ。私は近頃『警察亡国』ということまで考えて来た。

この警官の干渉は、思想的、社会的になると、もっと明らかになる。

私は先頃、高崎に講演に行つたことがある。私の目的は現代の左翼、右翼の下らない闘争的意識を排して、一致して新日本の建設に精進せんことを説くにあつた。私はその講演の中で、朴烈問題を引用して、こう云わうとした。――

『朴烈問題において、もし江木法相乃至は当局者が、大逆を援助しようとする如き意図があつたとすれば、それは絶対に許すべきことではないけれども、併しもしその事が一種の過失不注意に原因し

i 大逆罪容疑で逮捕され、治安警察法違反で起訴された朴烈に関するドタバタ。

たのだとすれば、われ等はこれを、もう少し寛大な心持ちで見てやって差支えないではないか。』

その時、私が『大逆を援助』と述べて来ると、臨席の警官が『弁士注意!』と来た。その声が、まるでヒステリー女が、搜した亭主の居どころを突きとめた時のような叫びであった。

私は、講演が終つてから考えた。この一個の地方の警官は、私の常識を排して、かれの有する常識を以て、私を縛そうとした。それは法律上、少しも差支えないことである、併し問題は、かれは私より以上に、かつて国家の将来と、国民の発展について、頭をつかったことがあるだろうか。また国内の秩序が紊れることを嫌つて、今からこれを避けるために、微力ではあるけれども、全力を傾注する事、私以上であろうか。もしそうであつたら、私はこの小さい事件について何にも云うところはない。併しもしそうでなかつたら、かれ——一個の下級官吏であるかれは、その有する国家権力を楯に無用な圧迫と、無用な取越し苦勞をしたことに結論するの外はないのである。

私は警官の諸君の間にも多くの友人がある。個人としては、勿体ないほどいい人々である。この人々がサーベルをさすと、干渉好きな警官の群の中に含まれるのだからこの警察問題、司法問題の欠点は、人になくて制度にあるは明らかである。そこで私は、この警察権を、原則として地方自治体に附属せしめて、地方自治と密接な關係にあらしめると同時に、警官の教育を一変せし

めることを主張する。この警官教育の改善とは、社会の秩序も、教育も、思想も、民衆指導の責任もすべて警官の肩上にありと信じているところの甚だ潜越なる感情の一変を意味する。

警察と裁判所は、何といつても、社会に起つた問題の黒白を判断する唯一の場所である。もしこの二つが国民の近づき難い場所になつてしまつたとすれば、彼等はその相互間の問題を解決するのに、暴力と直接行動を取る以外に道がなくなるのである。そして私は近時の暴力主義横行の責任の少なからざる部分が、国民をして自由に気軽に近づき得しめない警察と裁判所にあるを疑うことができない。警察制度と司法制度の改善は、昭和の始めにおける最も緊要にして重大なる問題である。

3 嘘だらけの政治 【第四編 「政治断層の日本」から】

一、政治と特殊国

そもその間違ひは、日本に憲法政治を布いたことではなかつたらうか。外国の土地に育つた樹を、日本という未だ土台の出来ていない土地に持つて来たことが、間違ひの原因ではなかつたらうか。……私は近頃、時々こんな事を考える。

見給え。日本の政治は、頭から尻まで嘘だらけである。たとえば『政府の信任を、国民に問うために議會を解散する』という。いかにも議會政治の本質からいえば、一つの大きな問題に打つかつて、国民の意志が判明しない場合に、議會を解散してその政策の可否を国民に問うことは、当然すぎるほど当然のことである。併しこの『当然』は政府が国民に対し問うべき政策を有する時に限るのである。また問われた国民が、政策の可否を明答し得る時に限るのである。解散となると、必らず政府党が勝ち、そのまた解散の理由が朴烈問題だ、松島事件だと、国民生活に毫末も関係のないものなるに於いては、これを議會政治の運用とくつつけて問題にするだけが滑稽である。

だから政治家というものが、如何に国民を甘く見ているかを見るがいい。原敬は議會に多数党

を占めていながら、自分の手で選挙をやれば必ず絶対多数が得られると信じて解散を行った。議会で殆んど一名の黨員も有しない清浦首相は、同じく自己の手で選挙に臨むことにより、議会に多数を制し得ると信じた。こんな馬鹿氣た代議政体が、どこの世界に存在し得よう。西洋諸国では、敗け目は寧ろ政府側、与党側にある。英国の労働党が天下をとつていても選挙を行つては、惨めに反対党に敗けた。カナダの保守党内閣は、つい先頃、自分の事で解散を断行して、同じく自由党に敗れた。かねて唱えて来た政策の実行の責任に坐するだけ、選挙においては、政府側は何時でも受身たるを免がれないのである。かくの如く国民の監視があつて、政治家も政党も始めて、政策に対し忠実になり得るのである。

よく補欠選挙がある。勝つた方は決して、『わが党は国民の支持を得て居る』などという。理窟は正にその通りだ。西洋諸国において補欠選挙を法外に重視するのは、これによつて国民の内閣に対する信任を知り得るからである。併し西洋諸国に通ずるからといつてその原則を、そのまゝ日本に持つて来るのは、西洋のフオークを持つて来て、お茶漬飯をくうほどの間違ひである。日本の補欠選挙に、かつて政府の政策に対する批判なり、信任なりが現れたことがあるか。それは例外なく情実と、叩頭運動と、事大主義の成績に外ならない。

見来たれば、議会政治の原則と、日本におけるその實際の運用とが如何に天と地とほど離れて

居るかを知ることが出来よう。然るにかかわらず世の中の批評家や政治家が、『議會を解散して國民の意志を問う』だの『國民の信任』だのと、鸚鵡返しのようなことを云っているのは、彼等は政治原論で読んだ議會政治の原則と日本における實際の運用とを、ゴツチャにしているからである。日本は『特殊國』であつて、その特殊國が御自慢の種だとは御存じないか。

二、政府党万々歳

すでに選挙には例外なく政府党が、有利な立場に立つとすれば、政治家にとつて唯一の重大な問題は、どうにかして政府党になる事即ち政權に有りつくことなのである。

元來人間というものは、自己を保存するために行動するものである。聖人とか君子とかいったところが、持つて生れた生命が、一つしかない以上は、これを丁寧に、有利に保存しようとすることは無理のないことである。ところで日本では、政治家がその自己保存の秘訣は政權にありつくことだ。これにさえありつけば、事大主義の國民の前に、どんなにでも威張り得るのは無論として、議會の多数も自然に後からついて来るという不思議な國なのである。

そこで問題は、いかにして政權にありつけるかが、彼等にとつては最も重大な事件だ。この場合西洋なら政權にありつく方法は第一に政策を掲げることである。この政策に対し國民が共鳴す

れば彼等は政權の前に押し出される。そしてその約束した政策を実行する勇氣があれば、彼等は
その位置を長く、強く維持することが出来る。

併し日本ではそうではない。憲法しかれて四十年に近くして、まだ政策の故に内閣の進退が決
せられたことは殆んどないのである。二枚舌問題だの、党内の勢力争いだのでは、内閣は何回で
も変つたけれども、また議會外の勢力——軍閥や長閥の陰謀では何回も内閣は瓦解したけれども、
政策の故に議會で正面衝突をして、内閣を投げ出したことなどは、かつてあつたためしはない。
尤も政党の政策というものが、みんな揃いも揃つて『産業立国』とか『農村振興』とかと、小学
校の習字の手本から借りて来たような空虚な文字で、誰も反対しようのない事柄なのだから、こ
れが政變の中心になり得ないのは、当然だとも云い得る。

併し政策が政變が中心にならない最も重大な原因は、国民が政策などに対しては、全く無頓着
である点から起る問題である。国民一般が議員選挙に當つて、その投票の標準を政策本位におく
とすれば、政党も候補者も、投票者の意をむかえるために政策を編み出すの外はないのである。
従つて政策のないような人間は、政治社界から消えて失せる筈である。政治社界においても、需
要供給の原則は行われる。お客が『政策』を欲すれば、店の方でも是非共『政策』という商品を
備えておく必要がある。これに反してお客の方の力瘤を入れるものが、朴烈問題や、混合戦であ

れば、政治家としては、その方に向うのは寧ろ当然である。

政權は是非共欲しい。しかもこれを得る方法は政策ではないとすると、彼等は他の如何なる方法を以てしても、これを得ようとする。陰謀と、策略と、問題選ばすの悪罵とは自然に彼等の武器となるのである。

よく世間では首相が、研究会に御馳走政略や利權政略をするのが悪いという。いかにもこれは悪いと私も思う。併し首相が研究会を對手として正面衝突をする時に、国民はかれを助けるであらうか。即ち日本国民は、特權階級打破を標榜して敢然と立つ時に、挙つてこれを後援するほど覚醒しているであらうか。私は過去の歴史から見ても、然りと断言する勇氣はない。もし国民にして飽くまでこれを後援するとの見込みがたないとすれば、何者の愚者ぞ、そんなまじよくに【間尺に】合わない憎まれ役を演ずるものがあるか。

憲法政治の發達した国では、政權は政策に対する国民与論の同情によつて自然にその政党の頭に落ちて来る。發達しない国ではまず政權を掠奪して、輿論というような形式が後からついて来る。日本の政情を知るものにして、日本が前者だと断ずる勇者が、何処かにあるだらうか。

三、精巧な機械と政治

世界で発明された最も精巧な機械を、半開の野蛮人の間に、持つて来れば、それは必ず失敗する。なぜならば彼等にはそれを運転する基礎知識と、技術とがないからである。

代議政体は、世界の人類が生んだところの最高の政治組織である。それは何千年かの歴史と、血と涙との経験によつて編み出された政治上の最高機械である。これを何処に応用しても成功するであろうと考えたところに、われ等の祖先の甚だしい誤算があつた。

この事は支那の実状を見れば最も明白である。支那は共和政体を取り入れた。丘浅次郎博士の近著に『猿より共和国まで』、『[猿の群れから共和国まで](#)』国会図書館デジタル化資料』というのがある。学問的に見れば、共和国が今のところ最高の政治組織を取り入れて、果して国民は幸福であつたろうか。その政治組織の如きは、単に名のみにして、實際は名状すべからざる混乱を継続しているのがその現状である。渋柿の台に、甘露柿の枝をつぐのならば、つぎ木はつく。併し柳に月桂樹はつかない。況んや竹に木をつぐに至つては、始めから成功はしないにきまつている。

私は日本に代議政治を取り入れたのが、木に竹をついだものとはいわない。世界の進歩は例外を許さない以上、日本はあの場合代議政治を受け入れるの外のないことは明瞭であつた。併し己むを得なかつたにしても、他国民が二三百年の間の努力と経験で組立て発明したものを、そのまま移し植えるにしては、苗間の準備は決して充分だとはいえなかつた。

その上に悲しむべきことには、日本の教育は、この辺に力を入れるに充分でなかった。国家は右の手で国民に代議政体を与えながら、左の手でこれを教え導くの親切を欠いていた。長い間、封建政治に馴らされて、自己の權利を主張することを知らなかった国民が、急にこれを得て、却つて野心家のために利用される結果になったことは、また無理のないことでもある。

併しわれ等は永遠に同じところに止つてはならない筈である。また今更後に引きもどすことが出来ないのは明瞭である。われ等の任務は前進にある。政界の淨化にある。普通選挙によつて平等に選挙權を獲得したのは、徒らに無自覺な愚劣な投票を増そうとするためではない。前に述べたように、政治界の墮落は、決して政治家自身のみのものである。それは結局するところ国民の監視が足らないことが全部の責任である。代議政体とは、正直に国民を代表する政治である。国民の意志を如実に行政、立法、司法に現す政治である。国民という実体を、議會という鏡に現す政治である。即ち瓜の蔓には瓜をならせる政治である。政治を向上せしめるためには国民自身の向上の外に道はない。

噴水は水源より高く上らない。まず水源を高めよ。諸君の投票はその候補者が有する政策と、識見とを目がけよ。政治の革正は、かくの如くして容易に実現するであらう。

4 軍人の道德観【第四編「政治断層の日本」から】

一、大尉の『責任』と当時の事情

南京事件に責任を負うて荒木大尉は自殺を企てた。責任を感じて自殺せんとした事、それだけでもう批評を超越する尊いものがある。荒木大尉の責任感による自殺行為は、如何なる批評家も、まず一応筆をおいて、その誠実なる心持に、敬意を表さねばならない。

私のここに書くようにするのは、荒木大尉という個人の自殺行為についてではない。荒木大尉が、あの場合当然なすべき事——彼の属する海軍省、外務省及び一般関係者の、見て以て最も賢明な方法なりとするところをなしながら、しかも何故自殺を決心せねばならなかったか。かれの自殺行為は『責任感』からだという。しかもその責任は、かれの直接命を奉ずる上長が、その行動を是認している以上、これに対する責任はない筈である。それなのに、かれは何故『責任を感じて』自殺を決心するに至ったのであろうか。その思想的矛盾を検討しようというのが、この文の目的なのである。

議論を進める前に、まず概略ながら当時の事情を明らかにする必要がある。かれは南京の邦人保護のために、上官の命を受けて、同地に向った。但し同地の日本領事と居留民代表者は、日本

軍人が武装して堂々と繰り込むことは、却て支那人側の感情を刺戟するからというので、成るべく目立たない方法によつて、上陸し、かつ同じ方法で武器をも持ち込むことを希望したのである。そこでかれは四月二十三日、六名の部下と共に多少の武器弾薬を車に積んで、日本領事館に運ぼうとした。この途中当時まだ南京を占領していた山東軍は、これを発見して、差押え、如何に抗弁するも返還しなかつたものである。

これが交渉を継続している間に、時局は急転して、南軍は潮の如く南京に入り込んで来た。そして日本領事館にもなだれ込み、領事館に備え付けてあつた武器弾薬は勿論、彼れの武装をも解除して、一物も余さないまでに侵略【侵略】して行つた。在留民保護のために同地にあつた荒木大尉及びその部下は、その乱暴を目前に見ながらどうする事も出来なかつたのである。

前に武器を掠奪され、更にこの恥かしめも受けた荒木大尉が二重の重大なる責任を感じたのは勿論である。併しながら、これを大局から見れば、それが最も賢明なる方法であつた。若しかれが支那人の暴に對し暴を以て酬いんとする如きことあらば、同処にあつた百数十名の同胞は、尼港の大虐殺と同じ悲運に会して居つたであらうことは、同処に居つたものの異口同音に認めるところである。故に官憲も在留同胞も、始めから出来るだけの隱忍を懇願し、而して最後まで隱忍するや、『よく隱忍して下すつた』と感謝して居つたのである。

二、海軍省の『責任』否認

日本政府の対支政策は、幣原外相が何回も議會其他に於て声明したる如く、無干渉主義、觀望主義である。この事の可否は、國民の間には無論立派な問題になり得る。併しながら直接に政府の支配下にある役人と軍人には、それに対して批評の權能がなくして、服従の義務のみがある。

支那の現場にある日本の官憲の間には、この政府の方針が動脈に血が流れるように一貫して伝わつて居つた事はいふまでもない。如何なる侮辱にあつても、発砲するな、と云うような極端な訓令があつたとは、無論信ぜられないが、併し政府の方針が、すでに大体に於て無抵抗主義に終始するにありとすれば、彼等は自己の感情を殺してまでも、この政策を、忠実に実行しようと覺悟したであらうことは当然である。これは當時英米の軍艦は支那側の暴行に酬いるためにドシンドシ発砲したに拘わらず、日本軍艦だけは一発の弾丸も打たなかつた事實によつても明らかである。

荒木大尉は極端と思われるまでにこの政策の遂行者であつた。かれは自分の方から一発の大砲も小銃も打たなかつた。そして在留同胞は随分な侮辱も蒙つたけれども、幸いにして無益に生命の一つをも、異郷に捨てゐるの愚をしなかつた。この荒木大尉の自殺の報が新聞に伝えられると、海軍省は直ちに一つのステートメントを発表した。それは大尉の死が、武器掠奪事件と何等の関

係なしという点であつた。海軍省の意志は明白である。海軍々人は海軍省の最高の政策によつて終始すべきものではないか。その命令の発動するところ、生命を鴻毛こうもうの軽きに比して、猪突すべきは平生、朝な夕な教えて倦まなかつたところである。即ち軍人の行動は、常に高官の命令によつて動くべく、而して今回の荒木大尉の行動は、この命令の埒外に出でて居るものではない。

然るに何事ぞ、新聞電報は荒木大尉が、政府の命令を完全に遵守した理由を以て、自殺を企てたというのである。海軍省は、故に直ちにステートメントを発表して曰く『荒木大尉の自殺行為は武器掠奪問題と関係あるものにあらず』と。

三、かれ自身の道德観

政府の政策を遵守し、その保護すべき在留邦人の希望に應じて行動した荒木大尉は、何故自殺せんとしたか——少なくとも一身を捨て償わねばならぬような何の責任を、かれは感じたであらうか。

前に述べた事を、も一度繰り返すならば、かれはその場合に処して最も賢明なる行動に出た。即ちかれは軍人としても責任者としても、最も適当な善をしたのである。善い事をして自殺せねばならない理由が、何処の世界にあらう。ここにわれ等の見逃し得ない問題は生れて来るのであ

る。

かれが自殺を企てた理由が、その命を奉ずる国家機関の譴責を恐れたのではないことは明らかである。何となれば彼の処置に対しては、同じ場合に居った森岡領事も、また同じ軍籍にある上官も、極力これを弁護すべく、場合によればよく忍ぶべからざるを忍んだことに對し、表彰をすら奏請しないとは断言し得ないであらう。これ程彼等のその後の談話には、そうした同情と感謝の情が見えている。

政府が国策の遂行者に對して刑を課することはないのであらうというような、混み入った考察は、あの場合出来なかつたにしても、少なくとも生命と代え事をするような刑罰に処せられるとは、かれ自身も決して思わなかつたに違いない。従つて譴責^{こゝろ}恐さの自殺と見るのは、かれの心事を侮辱するものである。

かれの自殺を企てたのは、他になすべき事があつたのをなさなかつたというような自責の觀念からでもなかつたに違いない。南京の領事館及び城門は、海岸より余程遠く、十人や二十人の軍人では、日本軍人が如何に強くとも、衆寡敵し難いのは余りに明白な事実である。真先に無線電話も切り去られて、海上の日本軍艦とは通信し得ないことになつていた以上、彼等と戦いながら援兵の来るのを待つわけには、何としてもいかなき事情にあつた。

かれの自殺を企てた動機は、南軍の秩序を信じ過ぎた不明の責任でもなかったと思う。この不明の責任があるならば、それは僅か両手に余る軍隊しか派遣しなかった日本政府か、乃至は長く同地に居つて事情を知りながら、南軍に対して備えず、却て門を開いて歓迎すらもした領事の責任でなければならぬ。

然らばかれが自殺を企てた原因は、そもそも何処にあるのか。私の觀察にして誤りがなければ、かれの従來の教育と環境が、かれの行為に対し自責し、自恥し、面を向けて歩くに堪えざらしめたのである。それは対外的であるよりも、対内的であり、社会的であるよりも、對軍人的である。即ち春秋の筆法を以てすれば、かれを殺したのは、かれ自身の道德觀だといつてもいいと思う。

四、異なる善惡の標準

荒木大尉が属する社会の教育及び道德觀の著しい特長は、それが極めて劃一的なる事、断定的なる事にある。

彼れはその教育を受くるに當つて、自由討究の結果、これを受け入れたものではない。彼れの教えられた善なり、惡なりの思想は、既成觀念として注ぎ込まれたに過ぎないものである。その内容を批判することを得ずして、結果をそのまま信じねばならないが、彼等の教育である。

だから彼等の思想なり、行動なりの判断は極めて簡単な規範の下に生れる。『上長の命令は事の如何を問わずして従うべき事』がそれである。『日本は世界に冠絶している事』がそれである。そうしてこうした大原則から出発して、武器は軍人の靈魂であることが無条件に信ぜられ、また敵の前には絶対に後を見せずして前進する事が教えられる。これ等の思想が、正しいとか正しくないとかいうことをいわんとするのがこの文の目的ではない。この人々の教育道德が、一個の断定、デクタ【*dicta*】として彼等の頭に注ぎ込まれて居り、そしてそこには何等の批判のないという点、私の指摘せんとするところなのである。

彼等はこの教えられた思想を、唯一の判断の根拠としてその進退を決する。また實際、自由討議から出発しない彼等の教育は、これ以外混み入った考え方をするに便宜に出来て居らない。荒木大尉の場合に於ては、かれは支那人の感情を、刺戟しないようにという上長の命令、或は意志に従った。そしてそれは軍人として当然なすべき命令服従の行為であるに違ひなかった。

併しかれが上長の命に従ったのはいいけれども、四囲の事情は『上長の命に従うべし』と同じ時に教えられた、他の道德を脚下に踏みにじらねばならない自分を発見した。即ち武人の生命であり靈魂である、武器を奪われ、その軍人のプライドを極端に傷つけられたのである。昨日上長の意志を行って、軍人の務めを一つ果たしたかれは、その事が翌日、軍人の他の務めを破った事を

発見してかれは身をおくに処がないことを感じた。その結果かれはこの矛盾に耐えかねて、遂に自分の身を殺して、その立場を明らかにせんとしたのである。

こう解釈しないで、どうして百数十名の同胞の内、かれだけが自殺せねばならぬような、つぎつめた感情に立ち到った事を諒解し得よう。もし在留民保護の責任からいえば、領事、警察署長その他も同じだけの責任がある筈である。しかも普通の文官が、この場合、責任を明らかにするに、かかる手段に出でるであろうとは誰が予期しよう。この点からいえば、日本軍人の道德の觀念は、一般社会のそれと余程違つたもののあることを知るべきである。

この事は外の場合を引照すれば、もつと明らかになる。シベリア出兵の時に、原少佐は国家の政策に反して、武器を密送せんとして、国法に触れた。しかもかれが国法に触れながら如何に昂然として、それが志士の行為であるが如く振る舞つたか。また甘粕大尉は震災の当時、三名の生命を断つた。しかも彼自身も、かれの属する社会も、かれのこの国法に触れたる行為を、如何に一種の誇りと自信を以て眺めたか。これ等の事實は、軍人社会にあつては、国法すらが、その善悪を判断する規準になつて居らないことを物語るものでなければならぬ。

五、提供されたる思想問題

私はこの小論文の主題として、荒木大尉を引合に出したことを、極めて不本意に感ずる。荒木大尉はその責任を感じて死を以て、これを償わんとした人である。この責任が何であるかは前述の通り議論があるけれども、死の決心は冗談ではない。殊に妻子のあるかれが、こう思い立つた生一本な誠意に対しては、われ等は眼瞼の熱くなる感があるのを禁じ得ない者である。

私の問題とするのは、かれがその寄託を受けたる国家に対しては、何等生命を以て償わねばならぬ責任がないに拘わらず、敢て自殺を企てたその道徳観の矛盾である。かれ自身の道徳観というよりは、かれの属する社会の道徳観が、かれをして単に『国家の政策を遂行した』というだけの理由では、正面からかれの僚友に相対し得ぬような空気のあることである。

国際関係が複雑になって行く現時にあつては、国家の為に尽くす方法は単なる一筋道であつてはならない筈である。進むこともあろうし退くこともあろう。剣を捨てる事が、剣を把る事よりも有利なる場合は、速やかに剣を捨てるべきである。この融通性が荒木大尉の属する社会にあるだろうか。

同じ自己を殺す場合でも、猪突する時に於てのみ賞揚され、表彰され、これに反して隠忍して自己を殺す場合には、却て嗤笑しやうを受けるといふような社会が、もしありとすれば、それは日本の前途を幸福にするものと云い得ようか。

それよりも、もつと問題なのは、一般社会の思想と、かけ離れた思想の一团が、永遠に同じ国の中に存在して、手を取って進み行き得るであろうかということである。一つの階級が、他の階級により重き責任と義務を課する事は、武士階級が没落して、立憲政体が出来上つてから、もう失くなった筈ある。そして又同じ道德と同じ責務を背負うて、国民が一体に進むところにのみ、進歩もまた憲政政体の妙味もあろう。

荒木大尉の自殺が未遂に終つたことは何よりであつた。併しこれにより提供された問題は、それに拘わらず、日本の将来に残されて、賢明なる人々の解決に待つべきものである。

(一九二七・四・三)

[# 1927.5.9 読売新聞夕刊によると、「南京事件で問題の荒木大尉帰朝す患部も癒えて昨日長崎に」とある。傷も癒えたという本人談も載っている。]

6 甘粕と大杉の対話 【第四編 「政治断層の日本」から】

この一篇は、大震災直後、甘粕大尉の罪状が判明すると同時に書いたものであるが機を得ないで筐底きょうていに保存して居ったものである。私は一字を訂正することなくしてこれをここに問う。この中に書かれた思想は、今なお毫末も変更する必要があるからである。

——筆者——

小菅刑務所の一室。さつき看守が見廻りに来て、足跡荒く立去った後は、四辺は又森閑となつて、薄暗い電燈のみが沈んだ空氣に浮いて居る。甘粕正彦は両足を床に抛り出し身体を壁にもたせ乍ら、瞑想に耽つて居る。もう三日したら出獄すると云う日。

突然室の重い戸が開いて、目に異常に光りのある、髯を刈り込んだ洋服の男が彼の前に立つた。見るとあの事件以来、頭の底にこびりついていて、ともすれば記憶に甦つてならなかつた大杉栄である。甘粕はギョツとした面持で、鋭く大杉を見詰めた。

x

甘粕 貴様は大杉じゃないか。誰の許しを受けて此処に來た。俺は貴様に用はない。帰れ！

歸らなきや腕力に訴えても歸すぞ。

大杉 相変らず元気がいいな、そして相手との交渉の要諦を第一に威脅に置くところは、何年経つても矢張り君らしいな。併しおれに用が無いというのは確かね、長い間監獄にいて本を読んだり考えたりして、震災当時の君の行動、つまり俺や俺の妻子を殺したことが、いいような悪いような何だか判らなくなつて、一応俺と逢つて話しても見たい様な氣持になつたことはなかつたかね。殊にあの当時は、君を志士だの国士だのと騒ぎ廻つた連中も、いつの間にか君を忘れて、甘粕のあの字もいわず、君だけが暗い監獄に残されとなると、君に或種の幻滅の悲哀が湧いて、君の名譽心と、プライドが君を裏切ろうとはしないかね。……

甘粕 失敬なことを云うな、国家のために貴様を切つたので、自己の名譽心のためなどでは微塵もないのだぞ。現に其当時の判決文にも……

大杉 一寸待つてくれ。君は公判の際も、君の部下が君の申したてのために法廷に引張り出されたといつては、『甘粕の男が廃つた』などと頭の毛を掻きむしる計りに悶えたではないか、法廷で、『何か言う事はないか』と聞かれて、士官学校で教わつた国體観か何かをべらべら喋べつたり、第三者から見ると、齒の浮く様な様子で其部下をかばつて見たり、要するに君は総べてが大向うを相手の芝居だつたじゃないか。俺はあの頃の君を見て、国定忠次や清水次郎長の講談

を今様で読むような気がしてならなかったよ。もつとも君等の一派には、講談を日本のバイブルにしようという図抜けた頭の、帝大の先生なども居るから無理もないが？

甘粕 なに、俺が芝居をやる？貴様はどうだ。貴様の友達の久米正雄でさえ、友達甲斐に『一等』だけはお負けしたが、『大杉君の存在は、善悪とも、彼の一等俳優な所にある。一芝居打つところにある。大見得を切る事そこが悪いところでもあり、いい所でもあった』などといった。尾行をいぢめたり、演説会で突然顔敵いはね除けて弥次つて見たり、貴様こそ鼻持のならぬ芝居がかりと、売名で終始したではないか。

大杉 申し遅れた。實際君の言う通りなんだよ。仮想敵国で鍛えられた君等一流の論理は、俺が芝居がかりだったという事実を以て、君自身の芝居気を否定するのは錯誤を冒さしているが、まあそれはどうでもいい、俺は君が娑婆時代の大杉について、真直ぐに白状する機会を与えてくれたことを感謝するよ。俺は君に喉を締められて、あの井戸に投げ込まれた時から、真剣に俺というものを考えてみたネ。一生俺を動かしたものは果して世間でいうように俺の主義だったかと。俺は第一之に疑問を持ったんだ。幼年学校を飛び出したのが主義でも何でもないので誰も知って居る。仏蘭西でメイ・デーの日、演壇に飛び上つて演説をし送還されたり、神近〔市子、愛人に一人だった〕に刺されたりしたのも主義だとはいえぬ。俺は無産階級の自由を欲したけれども俺

は其の自由を欲する何倍以上に、ブルジョアと時の権力者に対する復讐を希願しなかつたか。俺は現代社会の根本的改造を祈つた、けれども此改造に到達するのに、血を見ない経路を通つて俺は満足したろうか。つまり俺を引き廻したものは主義であるよりも持つて生れたファイティン・グ・インスタンクト【instinct 本能】ではなかつたろうか。少なくとも俺の行動は、俺の争闘性と、君のいう芝居気の合体的産物で、主義というのは単に裸体の俺に塗つた絵具ではなかつたろうか……

甘粕 貴様はバートランド・ラッセルが何処かで書いたような事をいうんだな。

大杉 君はラッセルを読んだか、それなら話し易くていい。世の中には本能的に争闘を好むものが少なくない、ニロ王だとか、徳川から分れた何処かの殿様だとかが家来の血を見て喜んだというように、或種のバイオレンスを見なければ満足しないものがある。之等の者にとつては争闘なり混乱なりは其直接の目的で、これによつて生れる結果などは殆んど考える余地がない。たとえば、これを考えるにしたところが、本能に圧せられて其コンビクション【conviction】に熱が伴わない。この種の人は国家主義を信ずれば熱烈なる愛国者となる。そして、甘粕君、君と僕とは同じ幹になつた枝に過ぎないのだと僕は思うよ。

甘粕 貴様と僕と一步の相違だ？（身体をブルブルと振わして）馬鹿なことをいうな、憚か

りながら僕は日本の国体の擁護者を以て任じているのだ。貴様のような外国を鵜呑みにして国家を害そうとしていた奴とは違うぞ。

大杉 生きて居った時なら君と同列に置かれるのは、こちらから御免を蒙むつたんだ。けれども肉が土に帰して、俺の性格の半分を形造つていた反抗の分子が、竹の皮がむけるようにむけて仕舞うと、俺は如実に俺の姿が解つて来たよ。そして失礼乍ら君に比しては多少頭がいいだけに、君が長い間監獄で考えたことより少し徹底的になつたよ。英国のスノーデン君は俺の殺された当時の議会で労働党や社会主義を悪魔の化身ぐらいに恐がつている保守党員を尻目にかけて『ボルジェビズムは社会主義ではない。それは極端なる保守党主義だ』と喝破した事がある。極端な左翼と極端な右翼との相違は何処だ。君はレニン政府とムッソリニ政府の相違を思想的に区劃し得るか。

甘粕 極端な左翼といっても、貴様はボルシェビクの革命を、まだ足りなかつたと云つていたではないか。

大杉 揚足を取りつこなしだ。革命が不足だったというのは、騒動が不足だったという事なのだ。君等が何時でも戦争が不足だと主張するのと同じ理由なのサ。つまりベルグソンの哲学でも借りて理屈づけければ、インスチンクトをリーズンの上に置く結果さ。君等は此インスチンクト

を無視して外面の主義だけを恐がつたじゃないか。無政府主義が恐いといっても、ウィリアム・モリスあたりに云わして見る。それは立派な夢想郷で、暴力などは形もないから。けれども、問題はただそれだけではなかった。当時の政治が確かにこうした主張の一端をなして居ることは否めないネ。君は仏国にサンヂカリズムが生れた経緯を知っているかネ？ 名ばかりの政党政治が腐敗し切つて、特権階級が政治を私し、一般国民や労働階級の利益は毫末も彼等の念頭になかった。無産階級は彼等が頼むに足らざるを知るや、そして政治的に擡頭することの至難を覺るや、政治を全然否認してその有する武器——プロレタリアの直接行動で自己の世界を持ち來たそうとしたのだ。露国に生れた無政府主義も其出发点に於いてこれと大して變つたものでないのは君の知る通りだ。そこでだ、日本を顧みて其状態はこれと大した相違があつたかネ。政治は頼むに足りたかネ。俺が殺された時は山本内閣、其次ぎに出たものが清浦を看板に研究会内閣、それから妥協内閣の加藤の時代——大正十四年と徳川時代とタイムから云つて約三百年の隔りがあつても、政治の実質からいつて、当時の大名政治と何れ程の相違があつたかだ。国民は戦争において、租税において『国家』の名に対して出来るだけ与えた。而かも彼等は与えたものに対して何を与えられたか。そして此実状に面して政治的訓練のない国民が、政治以外のフィールドに於て自己の意見を行わんとすることが、非常に不思議な現象だと思ふのか。

甘粕 悪いのは政治であつて国体ではない。国体は金甌無欠だ。僕等も政党や議會などの腐敗については、常に憤慨して已まないものだが、此政治が悪いが故に貴様のように国体其ものを否定する間違つたものがあるので、国家に代つて制裁せねばならんのだ。

大杉 俺は君達の頭腦をコンパートメント【compartment】式頭腦とでも呼びたいと思つて居る。そんな名前があるかどうかは知らないが、君等の頭腦には戸か抽出しがついていて、これは国体、これは政治、これは科学、これは産業と智識の袋を別々に入れ、これを別々に使用する、そして嘗てそれを混ぎ交ぜて自分のものとすることを知らないのだ、一国の大臣になつて相当外交にも財政にも明るくならねばならぬ筈の君等の上官が、ただ国防だ、軍備拡張だといつて居るのは、此智識の小出しをする教育と習慣に包まれて来たからだ。確か君の上官だつた何とかいう大將は、君の事から依願免職になつて直きに台湾に行く時、『米国と戦争するなら此一二年の内だ』といった意味の放言をしたとか聞いた。震災直後、而かも東京の最中に居つたものが、こんな馬鹿氣た事をいえるのはコンパートメント式頭腦の結構な標本さ。

甘粕 黙つて聞いていると何処まで脱線するのだ。僕の頭腦が仮りにそれであるとしても、それが国体の尊貴と何の関係がある、況んや貴様自身の頭腦が翻訳的な、停まつて周囲を見ることを知らぬ猪突的な、方向は違うが矢張りコンパートメントではないか。

大杉 俺に対する攻撃なら、俺は躊躇なく降参するよ。俺は如何にも単なる political theorist だ。これに争闘性と反抗を加えたものが、生前の大杉全部さ。俺は破壊のラッパは吹いたが、建設に就いては少しも考えていなかったのは、俺の著書を見ても解る通りだ。殊に其の破壊とインダストリアリズムとの関係などはちつとも考えていなかった。俺は露国や支那のようなインダストリアリズムの無いところと、とにかく其形だけは備えて来た日本とを一律に見ようとした点に於て、矢張り俺の頭腦もコンパートメントたるには相違なかったかも知れない。今の俺は生前の大杉の非を何時でも是認するよ。けれどもそれはそれとして、君の先刻云った政治は政治、国体は国体という考え方は君等軍人一流の論法で、それだから政治を中から改良しないで外から乗取りたがるのだ。左翼の連中も同じだがね。我等らと云つても今の太杉から見ると政治を外にして国体が無処に存在し得るかといいたい。君の金甌無欠の国体とは、結局君が想像して見て最も君の思想なりに叶つた国体という意味で今の政治は其に添わないというのだろう。併し君は君の国体観が嘗て客観的に批判攻究した事のない空虚な迷信でないかに就て考えた事があるかネ。それは丁度俺が生前破壊さえすれば建設というものが其奥にチャンと立つて居ると考えて居つたと同じように。

甘粕 又しても俺を無政府主義者などと比較するのか。日本の国体は君臣父子の關係があり、

此尊貴なる国家を守るための愛国心は日本独特なものではないか。

大杉 死んだって俺に対する誤解は解けない。俺が無宗教家だったからとて、鉄舟寺の和尚は俺の骨の埋葬を拒絶したんだからネ。もつとも骨を拒絶されたのは俺ばかりじゃない。先のジョージメレデイスは生前、キリスト教の『神の合せたるもの人之をはなつべからず』という結婚観に反対し、或時離婚の可を唱えたものだ。ところが坊主がこれを覚えていて彼れが死んでから其骨をウエストミンスター・アベーに埋葬するを拒絶したというのだから、東西のヤソ教も仏教も坊主根生は同じものとして、俺は一向驚きもしなかった。併し此一事からでも骨になつても俺に対する世人の憎悪と誤解が、つき纏つて居るのは明らかだ。従つて俺は善悪其国体論に触れたくないが、其親類であり君等の守り本尊であるところの愛国心については一言いつてもいいと思う。君等は愛国心が日本人——詳しくいうと君等軍人の専売のように云うネ。専売なら日本人の専売でなくて、高等動物全部の専売さ。門の前に幡居【幡座】していて外から来た人間や犬に対しては、ガンガン吠えて、其家を守る犬は諸君軍人に比して『愛国心』に於いて劣るところがあるかネ？ 自分の群の女王を守つて、他の群に属するものは間違つて来ても噛み殺す蟻は、君等から見て『愛国心』に見えないかネ？ ラッセルなどは、『愛国心は人間の天性の不合理なる本能的基礎の一部であつて、かの敏感なる人々の行動を論理的に刺戟するところの合理的なる幸福を

要求する事の一部をなすものではない』と云つて居る。

甘粕 国家を形成する以上、外敵の侮りを禦ぐのは当然ではないか。われ等はユートピアに生きていない、若しわれ等が武装しなければ我等は併呑されるのみだ。そして国家を護るには愛国心が必要。動物がそうした本能を有するという事は、国家が之を要らないという事、又はこれが不合理なものだという事とは違う。寧ろ此本能を誘導して、国家を強大にし、国民を幸福にした方がいいではないか。

大杉 人類のために有用であると、有害であるのに拘わらず、愛国心が動物につき纏う本能である以上、決してそう易々と取り去られるものではない。愛国心の最も大なる教師は戦争だ。日本の日清、日露の大戦が無かつたら、今のような愛国心が日本人に生れたか。自分の藩主にだけしか恩義を尽すことを知らなかつた日本人が、今のように日本国家というものを対照とする熱烈な愛国心の所有者になつたことは、所謂外患に対して極力 *herd instinct* —— 集団本能を煽つた結果ではないか。若しそうだとすれば、此戦争の中心になつて而かも一般社会と隔離している軍人が、愛国心の濃い結果となることに不思議はなからう。

甘粕 愛国心の説明が、貴様のいうところに多少真理がありとしても、それが如何して悪いのか。

大杉 誤解しちゃいかん。君と今話しているのは無政府主義者の大杉ではない。否寧ろ、あるが俣の国家の存在を前提として語っているのだよ。僕は愛国心は動物誰もが持つて居る感情的本能で君等が威張る程特種なものでも何でも無いといったままで、俺の善悪をいつていはしないよ。だが併し『君等の愛国心』——反省と理論と科学のない愛国心が、世界人類のためは勿論、君の愛するという国家と、又君の血肉の上に何等の幸福を齎らさないことだけは云えると思うネ。今後日本の国家に、永遠に瘤の如くに煩いするのは君等の国民に強いんとする愛国心だと思ふ。甘粕 なに？聞捨てならぬことを云う。僕等の愛国心が国家を煩わす？だから貴様は国家を呪う虚無主義だ、貴様には国家が無ければ一番いいのだろう。

大杉 国家がなくていいのはお互様さ。君だつて日本国家が地球の上全部に延長されて『日本国』などという代りに、『地球国』にでもなり、君等がその手綱を取れば不満足はないだろう。まアそれはどうでもいい、第一君等の愛国心が今の俣で羽をのせば、地球の上から自由も人権も姿を消すネ。米国が自由の土地などといったのは、まだ十三州が旗あげして、英国に獅子のように楯ついてから暫らくの間だった。戦争が米国に結末の必要を教えて、一〇〇パーセント・アメリカニズムなどという君等から習った新忠君愛国心を唱え出す頃になると、此名によつて如何なる無理も、圧迫も通つて居るのだ。俺はまだ少しは残つて居る米国のトラジション【tradition】と、

同じ国の此新しい道徳的独裁者が、どう云う葛藤を惹起するかは、長い目で見ていたいと思う。

甘粕 自由の人権のといつても、国家があつての事じゃないか。米国人は今頃になつて始めて自覚したのだ。

大杉 監獄で長く考えても、矢張り其程度までしか解らないか。子供の時から詰め込んだ教育の恐ろしい根生えだナ。其根生えが困るというのだ。君は君の愛国心から——詳しくいえば君の愛国心が、単純な君の名誉心や義侠心を刺戟して俺を殺させた。君は俺を殺すことによつて危険思想を撲滅し得ないまでも、其幼芽を摘み得ると思つた。豈図らんや、虎の門外の出来事は、君が俺を殺して何ヶ月後だつたと思う？それから引続き不安の日本——暴力の日本を見よ。君は今に於いて君の行動をどう思う。

甘粕 (一寸狼狽の風を示して) それは其点で僕にも多少思い違いはあつた。けれども主義者連の蠢動しゅんどうはあつても、今のように当局がチャント押えつけて居られるのは、俺も一部の功績に座することは出来る。殊に思想界の險惡な際貴様のような奴がいたら、それこそ煽動して、どんな大事を惹起したかも知らなかつたのだ。貴様は殺されたのが口惜しさに今頃になつて、出て来て愚図々々云うのだらう。

大杉 後で説明する機会はあると思うが、俺は殺されたことに就いては、今は何とも思つて

居らないよ。当時誰かも云ったように暴力を是認した俺が、同じ主義の君に殺されたのだ。決闘をして後まで泣き事を云う男があるかね。俺は君と決闘をしたと心得て居る。そして君に同情する見物は君の後方からワァーツと歓声と同情の声をあげ、俺に同情した者は口惜しがって泣きつ面をしていたのだ。無論従来君等の流儀で教育された者が多いから君を喝采した者が最大多数であつたのは無理はないが、其見物の中に両方に対して顔を背けて、長大息した少数の者のあつたことを君は注意したかね。

甘粕 何だか貴様は謎のようなことを云うな。

大杉 君等の狭い流義の教育では、君に同情しないものは悉く君の敵ぐらいに考えて居るのだろう。いや他人事ではない。俺も正反対の立場からそうだった。併し大正十三年後の日本の状態を監獄から見て、思い思いに直接行動に出たがる左右両翼の争いを、日本の将来のために、君は感心するかネ？骨が土になって、燃えるような反抗の分子が無くなった俺は、少なくとも以前とは大分考えが變つて来た事を白状するよ。

甘粕 日本の将来のため？貴様にも国家というような考えがあるのか。

大杉 君は俺の『日本脱出記』を読んだかね、支那人と名乗っていて、日本人と分った時には、俺は『困った』と思った中にも嬉しかったよ。日本に居る時にこそ、圧迫や迫害から、いつでも

国家という奴を呪っていたが、偕て遠く妻子の国を離れて異郷に赴く場合、どこかに隠れていた『日本人』という感じがアツト頭を擡^{もた}げるのは外国にでも行つた人なら分る筈だ。前から幾度も云つた通り死んでは、俺の此『復讐心』が無くなつて、親から引きついだ『日本人』という意識だけが稍明らかに残つたのだ。だから君と出発点に於て似通つた立場から話しが出来るのだ。

甘粕　そうか、どうも生前の大杉とは調子が違ふと思つた。それならそれで何故もつと国家の事を思わないのだ。

大杉　だから思っているじゃないか、自分等の思う通りに思わなければ売国奴だと思ふようだから、君等の愛国心は迷信だというのだ。けれども、それは君等の罪ではない。苟も愛国心という奴は世界どこに行つても其内容に於いて少しも違わない。人間の最もプリミチヴな本能に訴える結果は、その本能其俚^おが現れて、総べての自由と進歩を排斥する。而かも又不思議に治者階級が之を取り入れて自己を守る道具にしているのだ。だから此勢力範圍に軍人、警官、裁判官、行政官などが重^{おも}なものだ。若し自己を守る道具にするというのが不穩なら人間の原始的な本能か、自然に一国の最も守旧的な階級と結びつくのだと解してもいい。此例は何処にでもあるが、最も顯著なのはドイツだ。ドイツでは政体が變つた一九一九年一月から、俺が君に殺される少し前、即ち大正十二年七、八月までに、政治的殺人で、其証拠が歴然たるものが、三百七十六件あつた。

（政治的暗殺だという証拠が明らかでないものを数えれば其二三倍にも上るが）。此内右翼の冒したものは三百五十四件で君等が危険がる左翼によつて為された犯罪は、僅かに二十二件なのだ。而かも公式に発表された統計から調査すると、左翼の暴行は其頃殆んど全く終熄したが、右翼の殺人は益々増加しつつある事だ。

甘粕 それはドイツが仏蘭西に圧迫され、而かも政府当局が無氣力だから、志士が座視するに忍びないからではないか。

大杉 然らば彼等を殺して、ドイツの政策はどれだけ其志士の希望に添うようになったかだが、まアそれは別として暫らく俺のいうことを聞いてくれ。不思議な事には此犯罪者の内、左翼に属する者は悉く重い処刑を受けたが、右翼に属する殺人者は殆んど処罰を受けない。数字をあげて云うと右翼の三百五十四名の加害者で終身懲役が一人と、刑期が総計九十年なのに対し、左翼は二十二名で、死刑が十名、終身懲役が三名、刑期総計が二百八十四年を数えて居る。此原因は謂わずと知れた警官や裁判官が右翼の思想——愛国主義や国粹主義に同情を有するからなのだ。どうだ日本では先進国ドイツと少しは違うかね？。

甘粕 俺が十年、三名の上等兵が無罪なのが軽いと云うのか。

大杉 同じ国を憂える動機で一人を殺した中岡良一【原敬首相を暗殺】の終身懲役は、三人を殺

しても十年で済む君と比較して、軍人でないだけに損をしたものさネ。ドイツではそれ計りではない。当時歴史家が此政治的暗殺を科学的に研究していたが、それによると此暗殺は其方法に於て断えず進化して居つてこれを三つに分つことが出来る。即ち第一は非組織的、第二は半組織的、第三は全組織的殺人として居るのだ。第一の階程は感情が最高調に達した時に、革命を阻止せんとして行われた殺人で、第二は革命的暴動は沈圧したが、此際軍閥の巧妙なる命令により案出された殺人、第三は殺人結社其他の秘密結社により予じめ注意深く計画されて実行されていた殺人だ。日本は此三つの内、何れの部に属するネ？

甘粕　日本は国体が違う、ドイツはドイツ、日本は日本だ。そんなものとは全然違うんだ。第一動機から雪泥の差がある。

大杉　自然の理法、科学の鉄則が日本だけには働かないように思う君等の頭脳と、それを鑄込む教育から変えねば日本は動きが取れまい。前に云つたドイツの第一殺人階程は一九一九年一月のベルリン騒動の時に起つた。革命派の連中七名はベルリンのフォルバルツ新聞社を占領したのを、軍隊が包囲した。彼等は銃器を捨てて外に出て、降意を示したが、軍隊は許さなかった。彼等を近くのバラックへ連れて行つて銃殺して仕舞つたのだ。右殺された一人は同社の記者で革命員でも何でもなかったが、同じ運命に際会した。其後調査の結果『上官は此私刑を止めるべく

努力したが不可能だった』という申し立ては事実でないことが証拠でたれたが、軍人も士官も何等の刑罰も受けなかった。それから二三日して例のリエブクネヒット【Karl Liebknecht, 1871-1919】とルクセンブルグ【Rosa Luxemburg, 1871-1919】が拘引中に暴徒のために殺された。官憲は願ったり叶ったりだと思った。裁判所も無論感を同じうして、賛成的態度をとった。

甘粕 軍隊が極端な革命を未然に防いだ好個の例証だ。確か陸軍が生んだ新人河野少将だったが当時此リエブクネヒットの事件を引用して、俺の行為の一部を是認したではないか。

大杉 然り、之等の事件は見る人によつて内乱が生んだ残虐なる行為として置いて差支えない。けれども越えて二月二十一日にババリア共和国首相アイスネルが学生アルコ・バレーに殺されるに至つて殺人は明白に政治的意味を帯びて来た。当時アイスネルはスイツランド【スイス】の社会主義大会に列席したが、其席上で種々の書類を並べ大戦に対するドイツの有罪を承認し、ドイツが其実力の許す限り賠償を支払う義務あるを述べ、更に自分の手により、もっと必要書類を世界に公開すべきを約束した。之に加えるに同人が猶太人^{ユダヤ}で、ボルシェビキの連中と靈犀相通ずるものがあるように見えたから堪らない。彼がムニツヒに帰るや、愛国学生は彼を道に擁して射殺して仕舞つたのだ。此学生は何人からも金銭的補助は受けて居らなかったが、彼の放つた此一発は此種の行動のシグナルの用を勤めて、同じような事件が珠子のように続いたのだ。――そし

て甘粕君、君が愛国的動機から俺を殺した其私刑が結局虎の門の不敬事件を生まなかつたと君は断言し得るか。即ち後世の歴史家をして、虎の門の悲しむべき大不敬事件を生んだのは、甘粕正彦其人だという春秋の筆法を振わさないことを、君は保証し得るか。

甘粕（真青になり、身を振わして）云う事に事を欠いて不埒な事を云うな。馬鹿！失敬な事をいうと其俣には置かぬぞ。

大杉 俺はドイツの歴史を説いているのだ。アイスネルが殺されて暫らくして、彼の政治的友人で肉屋を業とするリンドネルなる者が、彼の政治的反对者三名に発砲して、其二人を殺した。これからムニツヒは立つた。此極左的共和国を仆し、プルシャの軍隊が入って秩序は回復したのだ。秩序は回復したが、一度政治を其手に収めるや、軍人が自己の流義で国政を運用しようとするのは無理がない。ババリヤは忽ち国粋連の本場になって、殺人倶楽部も暴力団も、其名に『愛国』をさえ冠すれば、極めて安全に保護される場処となった。グンベル君の著書によると、こうした秘密結社の数が当時五十九個あつたそうだ。

話しは少し外れたが、アイスネルを殺したアルコ、バレーは、其当時負傷したというので、手厚い保護を受け法廷へ出されたのは約一年後だった。彼は始め死刑の宣告を受けたが、直ぐ終身

i 1923年、虎ノ門附近で皇太子（後の昭和天皇）が狙撃された。

懲役に変更された。彼が裁判所から引き出されるや喝采の声が川辺を圧し、帽子やハンカチーフが空中に舞ったものだ。そして今や要塞に於て刑務に服しているが、頗ぶる優待され、かつ彼にして希望し、軍閥に何分かの理由さえ発見出来れば何時でも逃げ出し得るとは、其辺の事情に通ずるものの伝えるところだ。俺を殺したというので一万円貰つたり、公判廷へ陸軍の自動車で通つたり、法廷で傍席が『国土！』などと熱狂するあたり、海は隔つていても、どこか君の場合と似てゐるではないか。

甘粕 徳は孤ならず必ず隣りありサ、自己の利益のために非ずして、国家の害になる者を除いた以上、同感者の同情を贏^かち得るのは当然ではないか、それを貴様が僕を攻撃する材料に使うなら、テンデ見当が違ふぞ。

大杉 似たところはまだある。講和直後にドイツにフリー・コンパニースというのがあつた。この団体の目的は第一には軍隊から除隊されて、手に特別の職業なき者に仕事を与える事、第二にはベルサイユ会議でドイツが兵力を制限されたので、一朝有事の際に在郷軍人の代りをさせるためであつた。此団体の活動については、くどくど述べまいが、要するに其後援をルーデンドルフ將軍辺から得て、左翼を圧迫する事を任務としたと諒解すればいい。ルールで労働者のストライキがあつた際などは、其頭領株をドシドシ殺した事は、当時の内務大臣シベリングも議会で承

認したところだ。そして之等の殺人は殆ど罪せられていない。此外種々の場合軍隊の手で殺された者も多かったが、加害者が軍法会議に廻されると、決って、『上官の命令を誤解した』とか、『上官の命なりと信じて、善意を以て行動した』とか云つて、直ちに放免されたのは、甘粕事件と軌を一にした。此頃の殺人は前に述べた歴史家の第二期、即ち半組織的の階程に属するもので、軍人や国粋連が『こんな奴は生かして置いては国家のためにならない』といった考えから、機に応じて殺したもののなんだ。第三期の全組織的殺人というのは、此フリー・コンパニースが聯合國の圧迫で解散され、新たにコンスル団、或は其頭文字を取つて、単にC団というもの（其他オバールランド・フリーコンパニーという大団体もある）を組織した頃から始まるのだ。此コンスル団の起源は、守衛隊の騎兵部隊内にあつた秘密結社に端を発して軍人が其中心になつて居るのは申すまでもない。彼等は予め軍人の主義や理想と合致せないと『国家を害する者』のブラック・リストを作つて、組織的に之等の人物を殺害除去せんとするのだ。かのエルツベルゲル【Mathias Erzberger, 1875-1921】やラテナウ【Walther Rathenau, 1867-1922】を暗殺したのは此団体の組織的行動で、殺害の方法も上手になり、中々尻尾をつかまれないまでになつた。……

甘粕　オイ貴様は僕の所にドイツの殺人団の講釈をしに来たのか。

大杉　ドイツの例が鼻につけば、スペインの例を取つてもいい。今のスペイン全国の警視総

監といった役目を帯びているのは、マーチネッツ・アイドと云う將軍だが、彼が一九二〇年頃バルセロナの知事に任命された頃は、其地方に盛んに共産党の活躍があつて、暗殺が続いた。彼は一つの方法を案出した。彼は其部下に殺人団を造つて、共産黨員が誰かを殺した場合には、共産党の頭株二人を殺させた。更に共産黨員が二名を殺害した場合には、彼の部下は其倍数たる四名の共産党の頭株を殺した。此比率は嚴格に維持されて一二年を経たが、これがため如何にも殺人は無くなつたそして右翼は大勝利を占めたが、これが犠牲となつて死んだ著名の士が多かつたのは申すまでもない。

甘粕 ドイツやスペインが、それだとしてもそれが我が国と何の関係があるのか。

大杉 其精神と形式をドイツから採つた日本の軍隊と軍人精神が、どう云う方面に向うか、それは俺は知らない。けれども愛国主義を高調する君等の道しるべに、これだけの事を話して置いてもいいと思つたのだ。殊に左右両翼の衝突から起る暴動は、何処の国でも奇しいまでに似ている。君は一八七一年のパリーを知っているか。始めに赤色恐怖時代があり、続いて白色恐怖があつた。そうして何万の人間が虐殺されたと思う？

甘粕 貴様は日本にそんな事があり得ると思うのか。乃至は貴様自身の所謂争闘本能がそういう事を希望するのか。

大杉 俺の目を見てくれ、俺の口調を聞いてくれ。君と相對している俺が、そんな事を夢にでも希望していると思うなら、君こそ感情に目がくらんで、公平な言説が耳に入らんだ。俺はただ、君達軍人が思う通りに左翼を圧迫して、政治を其手に収めても、ババリア【バイエルン】の現状以上に出でないかを恐れるのだ。そして君は俺が殺された頃のババリアの騒動と、之に關聯するルーデンドルフやヒットラーの醜い敗北を知っているかネ。国家の権力を背後に負うている者が、国民と共に進むことを知らず、其狭い主觀に立て籠ることは、ただに国民全体の不幸でなくて、結局は其階級自身の不幸を意味することが分らないか。

甘粕 貴様は日本やドイツの軍人計り責めるけれども、其当時の世界は殆んど独裁者の手によつて統治されて居つたではないか。そしてイタリアのファシストの機關紙も論じたように、イタリアを壊つたものは自由主義者であつて、これを救つたものは実にファシスト即ち愛国者ではなかったか、それはスペインでもトルコでも軍人が危機を救つた点に於て同一だ。

大杉 俺は世界の思潮は、大きな振子のようなものだと思う。其振子が右によつた時には、海の潮が満ちて来るように、世界の隅々まで右翼、独裁に庄せらるるを常とする。俺が君に殺された當時は如何にも君の云う通り歐羅巴の人口四億万人の内、二億五千万人までは独裁專制政治家の統治の下にあつた。ドイツ、ロシア、トルコ、ハンガリー、ギリシャ、ブリガリア【ブルガ

リア」、スペインなど皆なそうだった。此大きな右翼の潮流が東洋の日本の岸をも洗つて、小さい俺という左翼の一員が、君に殺されたと思えば、俺はチツとも誰をも恨むことはない。俺が殺されて井戸の中にあつた頃は、スペインの独裁者はムツソリニーを訪れて、お互に剣の音をガチャつかせ乍ら、天下の事、君と我あるのみと云つた調子で快談したものだった。……けれども独裁者が、それ等の国を救つたと云う君の断言は事実かネ？ 右によつた振子が、同じ速力で左に寄らないことを何人が保証し得るか！

甘粕 事実は最上の雄弁家だ、其国の以前の狀態に比べて、天下が彼等の手に歸してから、確かに改善されたではないか。

大杉 君の教育と思想的傾向から考えれば、そう思うも無理がなからう。併し君と雖も独裁政治其のものがいいと云うのではあるまい。独裁政治によつて現れる傾向が多くの場合君等の思想なり理想なりに似たものなので、『善政さえ敷けばいい』と云うような結論に到着するのに違いない。其証拠には同じ独裁政治でも露国のソビエットの如きは君が極端に排斥するところで、斯かる政府は他国の事乍ら暴力を以ても仆さねばならぬというのが、西比利亜出兵の一部の原因ではないか。既に独裁者の方がいいという理由が、単に自己の理想に叶^{かな}い實際上の仕事をするからと云うにありとすれば君と反対の主義理想を持つたものは、君がボルシェビキ政府に反対する

と同様な熱心さで暴力を以ても其転覆を計るに違いない。そうすれば国家の安定は何処にある。

甘粕 革命家の貴様は、政府の変化まで革命的に見ねば承知出来ないのか。貴様が述べた国は政府は変つたけれど革命によつて政權を奪つたのではない。それが軍人とボルシェビキと違うところなのだ。

大杉 君は左翼が天下を取る時のみが革命で、右翼がクーデターによつて政權を握るのは革命ではないと云うのだな。……併し止そう、革命と云う字義の詮索などに俺は態々今夜来たのではない。俺はただ物平らかならざれば鳴ると云うように、そして劍を持つて立つた者は劍に仆れると云うように、右なり左なりが、『力』を以て取つた天下は、結局『力』を以て取り返されればしないかと思うのだ。こう云うと俺は至極平凡なオルソドックスのデモクラッシーに落ちるようで、生きて居つた時の大杉とは似ても似つかぬ者が出来あがる訳だが、右翼の専横が憎い憎いと思つた感情を、よく突きつめて見ると、結局左翼の同じ傾向を憎いと云う事に落ちたのだ。始めに俺は云つたネ、極左と極右と何れだけの相違があると。見給え、極端なる社会主義者であつたムツソリニーがどんなに訳なく極端なる国家主義者になつたかを、又日本の高島某君という社会主義者が、至極容易に心氣一転して上杉博士などと合したかを。驚く世間が愚だ、左右に動く振子は、普通に振れば道程は長いが、円を劃する上の方は一分か二分しかの隔たりしかないのだ。

彼等は此ショート・カットの道を取ったまでサ。

甘粕 先刻貴様は世界の思潮は振り子のようなものだと言つたろう。そう必らず動くものだとすれば、一度地獄に行つた貴様が、態々出て来て、僕を口説く程の熱心を示しても此大勢をどうも出来なからうじゃないか。

大杉 それはそうだ。欧羅巴の歴史を直観しても、此振り子は常に右から左に振っている。一八四八年にリベラルだつたものが、幾変遷を経て、大正十三年には反動の最高調に達していた、而かも英国の労働党が選挙で大勝利を占めたのを先達として、其後又著しく変更して来つたあるのは出獄間近く世事に遠ざかつた君でも分るだろう。

甘粕 日本でも、君のいう振り子とやらが左に寄つたというのか。

大杉 それは君が今見る通りサ。日本で君等一流の教育が、どれだけ深く国民の頭に食い込んでゐるかは、問題の起る毎に、ただもう驚く計りだネ。左翼連の一步の蠢動は、君等右翼の十歩の前進だ。そして君等の地盤は茲^{ここ}当分決して動きつこなしだよ。今の俥で行つて政治が腐敗し、国民がこれに頼る事が出来ず、右翼か左翼かの何れかを選ばねばならぬ様な場合が現れても、其独裁者は左翼でなくて明白に右翼だネ。そして日本にムッソリニが出現しても、国民の思想なり感情なりは、此統治に甘んずる用意が充分にあるネ。ムッソリニは大正十二年の終りに、ロンド

ンのデーリー・テレグラフの記者に『議会！必要の時には俺が召集する、不要な長講談をして、何も分らぬ連中がペチャペチャ喋べる機関などは今の俺には不必要だ。若し俺が何かの問題について知りたいことがあれば、俺は新聞を読むよ、そこには専門家や、教授の説や主張があつて、議会の演説などより数倍有益だ』と語つたが、どうだ、君等から見れば、涎れでも出そうな態度だろう。もつとも日本の新聞については、君等に大不満があるように見受けるが、併しそれは慾目だ。彼等は官僚や警察のマウスピースで、君等の大なる味方なんだ。更に同じ独裁者の西班牙のド・リベラ將軍は彼を訪問した有力な新聞記者が、彼の政策を質問したのに対し『そんな下らぬことで、忙がしい俺を邪魔するより、もつと何か有益なことがありそうなものじゃないか』と一喝したそうだ。之等も君等には羨ましい豪放振りだろう。

甘粕 軍隊思想が日本に漲り、国民皆兵主義になつて、日本の国威を発揚するようになれば、日本のためにそれ程いい事はない。僕はそう云う時期の来るのを待っている。

大杉 同じ理由で俺はそれに反対する。今の俺は世界の思想を別けるに、右と左に区別しないで右と左を一諸にした極端派【エキスミリーニストextremist】と、之に對する自由派リベラルとする。そして此極端派の中には君等軍人だの警官だのと一緒に生前の大杉や所謂戰闘的主義者とを編入する。此事実の特殊は、持つて生れた争闘性乃至は争闘を主とした教育の影響から、自分が闘うと同時に、他人を

も闘わしたい点にある。よくムッソリニが引合いに出るが、彼は国内の左翼を圧迫し尽して、其争闘性を満足せしむる能わざるに至るや、一寸した事からギリシヤに最後通牒を突きつけて、コルフ島を占領して仕舞つたのは丁度俺が殺された頃だ。日本の軍人も此例に洩れるかネ？支那に手がのばされなくなると、西比利亜に出兵したくなる。これを引込まねばなくなると、今度は米国に対する宣伝だ。もつとも震災を機会に丁度所謂主義者や鮮人の騒ぎがあつたから、其争闘本能は当分之等を對手にして満足されていたが、これも済むと、又々米国辺に對し宙返りするに決っている。既に争闘本能に出發しているのだ。勝とうが負けようが——当人共は無論勝つ事に合点しているが——顧みるところでないのは当然だ。況んや戦争後どうなるかなどに就いては、テンで考えたこともないのだ。又其必要もないのだ。

甘粕 素人の貴様が戦争のことを論ずるのは臆面がましい。日本が敗けてもするというのか。

大杉 怒ったネ。君等軍人は其専門以外の思想問題や政治問題には盛んに口を出すにかかわらず軍事や戦争の事になると、他の者をして一步も踏みこましめないのは見上げた態度だ。陸軍大臣が議員の質問に逢うと、『秘密会議』というからどんな大事件が湧き出るかと思うと、テンで屁のような事だったりするのと同じ手さ。一体戦争が君たちの専門だなどと思つて居るのが、近頃以て笑止千万で、日本から三井と三菱の大將が出かけ、米国からモルガンとロックフェラー

でも来て、『支那については……』などと話し合つて見る。君等の何インチかの大砲の何倍の偉力があると思う。又此連中が話しが纏まらないで、引きあげ『国権のため、国家の存立のため』などと口を切ると君等はワーツと来るじゃないか。まア、そんな事はどうでもいいとして、ラッセルなども The prospects of Industrial Civilization で、日米戦争の起る可能性ある事を幾度も述べ、無造作に日本の敗北を予言し、又英国と雖も米国と協調して行かなければ、一撃の下に打ち敗れる事を論じているが、こんな不人気な問題を今話すのは止そう。

甘粕 止してくれ、貴様の非国家的議論を聞いて俺は頭が病めて来た。俺は二三日して此の刑務所を出て、又国家のために働かなければならんだ。そしてこれからどう云う方面に向うかも考えなければならん。

大杉 君の心は大分動揺している。君は此刑務所に這入った計りに、士官学校の同期生にあて、『所謂人間のきたなさを更に切実に見せられて、益々人間がいやになりました。そしてそれがたゞめ国の将来を恐れます……真実に私を知られたら實際軍隊教育上注意しなければならぬことがあると思います』という手紙を書いた事があるかネ？俺は君が、軍隊の内部から種々の意見を持て居る事を推察する。今夜来たのは其意見を聞きたいためでもあつた。けれども長く鍛えられた階級精神——君等はこれを軍隊精神といつて居るが——は矢張り俺という外部の者に対して、一言

もそれを言い得ないで、出て来るものは依然型にはまった軍隊手帳の序言見たようなものなのだね。併し無理もない事だ。俺は、二三十年たって、も一度君のところに来るよ。左様なら……

何処かでガタンとしたので甘粕は目を開いた。彼は壁に倚りかかった俣居眠りしている自分を発見した。『オヤ』と言つて戸をなでて見たが、手に当つたものは固い鉄錠であつた。無論誰も這入つた形勢は無かつた。彼は据り直して指を折つて見て、出獄の日の近づいたのを、嬉しいような、併し又淋しいような表情をした。外に雨が降り出したらしい。(完)

●●●
附記 甘粕氏はもう自由の身になっている。同氏の名前を借用したのは極めて軽い意味で、この場合単に仮想人物にすぎないと思つていただきたい。(筆者)

【この論文は、1929.5.5発行の本書『自由日本を漁る』に於て発表され、右翼からの攻撃に遭い、二年足らずの在籍で東京朝日新聞社を退社することになった。】

3 立小便と国粹 【第五編 「自由日本を漁る」 から】

人前で小便するのが悪い、と一体誰が決めた。私は真面目にこれを考えて見た。

私共の乗った上海丸が、鏡のような瀬戸内海をすべて神戸に入港した時のことである。

破止場が見えると船客は、皆テスリに寄つて、自分達が足を踏み入れる港の好奇に目をみはつていた。その中には暑中休業で海上旅行をする西洋人の団体も大分いた。

その時である。破止場に待つていた群集中の洋服男が船の方に向つて小便をした。——尾籠びろうな話を許して下さい。矢張云つてしまわなければ、問題は分らない——婦人の見ているところで小便をするというようなことが、西洋人にとつて如何に大事件であるかは、西洋に居つた人ならすぐに分かる。

私の近くに居つた外国婦人は、ウーンとうめくような声を出して横を向いた。同じ連れの男はチエツと舌鼓を打ちながら申訳ないような声をして下を向いた。彼等の日本に対する初めての印象はこの時何万言の排日の議論より、何千人の親日の説法より力強く彼等の胸に食い入ったのだ。

一体人前で小便をして悪いとは誰が決めた、この様子を見ながら私はこう考えた。今廻つて来た支那でも、日本人が素足で歩いたり浴衣で外出するので、支那人が馬鹿にするとあつて、天

津などでは日本警察が罰金をとって取締っている。けれども流行の国粋には、衣は肝に至り、袖腕に至る事は教えても、日本人の素足が外国で侮辱を招くなどとは間違っても教えはしない。人前で小便をする事が罪悪でない事は明らかだ。婦人が人前で乳房を出す事が悪事でないことも明瞭だ。それが何故排斥される。何故馬鹿にされる。

国粋は日本だけで保てるか。(大正十三、十、二)

35 広東政府と夢想家 【第五編 「自由日本を漁る」から】

その当時の孫逸仙は、夢想家で、法螺吹きで、非実際家であつた。

『孫逸仙か、あれに何が出来るもんか』

支邦人もいえば、西洋人もいった。日本人は無論そう云つた。その孫逸仙が死んで、もう三年になる。

屍体に、どう防腐剤を塗つても、恐らくは骨も頭の毛も、残つて居らないであろう今頃になつて孫逸仙の名は支那の南北に、恐ろしい程の力を以て甦つて来た。

『黙れ、これが孫文先生の御遺訓だぞ』

こういうとどんな我武者羅でも、大概黙つてしまう。世界を恐れず、強国を屁とも思わない広東軍の猛者も、『孫文先生』の前だけには、自然に頭が下がる。

孫文先生は実務家としては成効【成功】したことのない人であつた。支那の革命の際にこそ、少しく仕事をしたが、それも暫らくの間で、余は上海に落ちたり、広東に流れて行つたりしてゐた。殊に上海に居つた頃は、貧乏というも憐れなほどで、それから広東に行つて、少し芽は吹いたが、それも大きな手で一攫^{つか}みにすれば、握りつぶせるほどな勢力で、結局こうした状態を継続

して、淋しく——もしくは生れが陽性だったから賑やかに北京で死んで行つた。

かれが地に埋れた頃から、新らしい力が、ムクムクと大地から持ちあがつて来た。『一つの種が地に落つて大樹になる』と、確か聖書の文句かなにかにあつたが、かれは真まことにその種であつた。やがてそこに陳炯明けいめい【Chên Jōngmíng】が出来、やがてそこに蒋介石が出た。広東政府の考え方に間違ひはあろうが、……そうして私は間違つていると信ずる……間違つていても、それは大地から生えたもので、西から吹いて来る英国風や、東から吹いて行く日本風では、ビクとも動かないものなのだ。

この広東政府は、孫文の遺志を真向に振りかざして、世界に戦いを挑んだ。見よ、何百年の間、巖のような根を張つた大英帝国は、もろくも白旗を出した。いつもは東洋の霸王だなどという日本も、客を追う遊び女のようにその前に頭をたれた。

実力からいえば、広東政府はとても張作霖に及ばない。東三省を控えて、北京、天津にまで勢力が伸びている張作霖は、今のところ支那における横綱である。広東政府は、また恐らくは上海を持つてゐる孫伝芳【Sun Chuānfāng】にもかなわなからう。『孫伝芳起てば』始めの間は、誰も、かれもそう云つてゐた。

張作霖を物の数ともせず、孫伝芳などはいたかとも云わない列強が、何故それよりも余程軍事

的には微弱であろうところの広東政府を恐れること、現在の如くであろうか。日本の幣原外相の演説でも、また英国の宣言でも読んでみるがいい。それは広東政府を恐れる戦きの声といつてもいいほどのものである。

この答えは簡単である。それは多勢に対する恐さである。一つの信念が民衆の心を一貫して、それが威武を以てしても屈する能わざるものがあるからである。も少し具体的にいえば、孫逸仙という夢想家の理想が、青年の心の底に食い入って、それが、野火が燃えるように、ヤング・チャイナのハートに拡がりつつあるからである。

自覚なき、民衆に対する専制政治の強味は、強者の意志を、自由に民衆の上に行い得ることにある。これに反して、その弱味は、一人の没落が全体の欠点を暴露することである。たとえば、東三省の問題は、張作霖一人を押えつければどうにもなる。この呼吸を列強は、よく心得ている。然るに広東政府になると、その幹部の半分を圧迫し、あるいは殺し尽しても、なお残る半分は、同じ理想、同じ標的をにかけて前進し得るのである。

孫逸仙と袁世凱と、……こう二人並べると、一人は夢想政治家、一人は実際政治家であつた。そして後者は前者を嘲つた。その二人は今は何れもあの世にある。二人は天から……或は二人共随分悪いこともしたから地獄から……支那の現在を見て、何を話しあつてゐることであろう。

孫逸仙を引いて来た私は、どうしてもウイルソンを並べてみなければ気がすまない。

世の中に評判の悪い政治家もあつたけれども、末期のウイルソンほど評判の悪い政治家は少なかった。不治の病を抱いて、ワシントンのS街の私邸に引きこもっている間、かれの敵が、かれの空想の末路を嘲うと同時に、かれの友人すらも、その努力が、単に書斎から出た夢想に終つたのを憐れんだ。それは返す能力のない唾を相手に、勝手な悪罵を投げかけていると同じであつた。

ウイルソンは約四年も病床に横たわつたまま死んだ。孫逸仙は、まだ希望をいだいて、北京に行く途次、日本にまで来て法螺を吹きまくつた後で、死んだから陽気であつたが、ウイルソンの死は冬の木立に枯葉一つ散つたほど淋しかった。かれが起つたのは『戦争を絶つたための戦争』*“War to end war”*であつたが、大戦の終つた後のその頃は、もう戦争の原因が蘊釀ⁱされていた。かれは又民族自決主義を唱えて、小国の権利を主張したけれども、かれの死の床に達する世界からの報導はそれとは全く反対な現象のみで、かれの神経をいらだたせるに過ぎなかつた。

不思議なことには、かれが死の眼を落す頃から、世界は多少その歩行の向きをかえた。軍備縮小はまだ徹底的な実行を見るまでには間があるけれども、併しもう表面からこれに反対する者は、

i 恐らく「醗釀」と同意味であろう。酒を醸す意から、醸されつつあること・意を固める。

世の中から姿を消した。それはその昔、平和会議の席上で『もし私の国の軍備の問題に触れてみろ、こんなところにに一分間も居らないから』と剣をガチャつかせたという歴史に比すると、まことに隔世の感があるものである。

それよりも不思議なことは、その頃大木が朽ちるように、ポツリポツリと仆れたウイルソンと、レニンと、孫逸仙の三つの魂が、いつのまにか一緒になって、一つの大きな運動になっていくことである。試みに広東政府を見るがいい。広東政府の運動の根源を孫逸仙と、レニンとに得たというのが普通の解釈だ、常人達もいえば世間の批評家も、そう云う。併し弱小国の権利と解放を、叫んだものが、あの頃ウイルソンの外に誰がある。この叫びが、トルコを解放し、エジプトを自由にさせたのだ。それが東洋まで来る内に、いつかレニンの階級闘争、プロレタリア独裁の思想と交り、それに孫逸仙の所謂三民主義と合体して、あの運動となったのだ。三個の夢想家の種は、地に落ちて、いつの間にか、炎々天をこがす力となって来ているのだ。

人生は短し、思想は長し、と誰かが云った。短い人生を楽しく送ろうとするのには、現実を目あてにするに限る。袁世凱も、桂太郎もこの種の人である。『死んでまで目があるのではなし』彼等はそう云っているかも知れない。これも確かに一つの生き方である。併し現実はその政策を行い得なかったが故に、実行力のない夢想家、人生の失敗者だと見るのは、孫逸仙や、ウイルソ

ンを失敗者だと思ふと同じである。

ただこれ等の夢想家の思想は、支那だけには止まらない筈だ。朝鮮、台湾にも、はた又日本の内地にも、この精神は渡つて来ないであらうか。

夢想家の夢想は地球の永い如くに長い。(二九一七・一・三一)

36 張作霖の神頼み 【第五編 「自由日本を漁る」から】

苦しい時の神頼みというが、神頼みは決して馬鹿にはならない。張作霖は近頃每晚九時、香を焚いて関帝廟に戦勝を祈り『奉天軍に大勝利を得させ給わば全私財を以て、その廟を修理し、神恩に酬ゆべし』と一心不乱に御祈祷をしているようだ。

その昔欧州大戦の時には、神様も大弱りであった。カイゼルが『神よ、爾なんじは我と共に在れ』と祈ると、その敵のロシアのザーが『キリストの名によつて神よ、我を助け給え』と同じ時刻に願ひ事をする。幾ら全智全能の神様でも両方に勝たせるわけにはゆかない。そこでその頃神様が戸迷いして、東京の新聞にも、神様の搜索広告が出たとか、出なかつたとかいつている者があるくらい。

張作霖の神様は、そこは両方から頼まれる心配がないだけに効果も著しい。山海関や熱河の方面で、大分旗色のいいのも関帝様の御利益だろうし、それにこの神様はすぐ手を伸ばして、日本にも活動して御座る。

『外務省の役人共の不甲斐なしめ、こうしてくれる』と勇敢な武勇振りで外務省の役人をなぐつた志士を捕えて見れば、張作霖の張の字も知らなかつたとの事、これが神様のあらたかな御指

示でなくて何だ。直隸派を助けるといふ噂さを聞いて、恩も怨みもない飛行士をグザと刺したところなども、神様の効能と解せずしては、我等の頭では分らない。

これ程のあらたかな神様は、八百万も神様があつて、世界の何処に此してもこの点で、引けは取らぬ日本でも、余り類はないようだ。鯛の頭や狐が神様任用令も適用せずに、直ぐ神様になる日本だ。関帝様の看板をお借りして支店でも設けたらどうか。

苦しい時の神頼み、その神様には今のところ関帝様が一番だ。

(十三・十・九)

69 蒋介石君に答える 【第五編 「自由日本を漁る」から】

蒋介石足下。

あなたは東京に來られて、その第一声として『謹しんで日本国民に告ぐ』という声明書を發表されました。このあなたの呼びかけに対して、日本国民として一応これに答えるのが、礼だと信じます。私は私個人だけを代表してあなたに答えたいと思います。

私は第一に日本国民が、あなたを迎えるに如何に親切丁寧であるかを申しあげたいと思う。いふまでもなく足下は何等の官職を帯ぶるに非ず、また何等の機関を代表するでもない。謂わば一個の漫遊客乃至は亡命客といつてもいいのである。然るにこの足下に対して日本国民は実に國賓に相当する注意を以てして居るのであります。これはわが國人が、外國という兎角重大視する習癖のあるにもよりますが、又以て支那に対して如何に親善を求めつつあるかの証左とするに足ると信じます。

このわが國民の態度に対し、貴下はまるで凱旋將軍の概がある。その声明においても年來『貴國の人士が日華親善の道を講究し、その実現を期せられたるは疑いなき事實なるも、惜いかなその道を得ざりしたため今なおその実現を見ざるは、われ等の遺憾とするところである』といい、そ

れ以下一段高処にあつて、日本国民を教えるの態度をすら示しています。もし日本国民が、こうした態度を支那人以外——たとえば英米人などに見せられたとしたならば、朝野は決して不快の感なくして看過しないと信ずる。この意味からだけでも日本国民が支那の国民に対してだけは如何に遠慮と好意を有して居るかを知らることが出来ると思う。

蒋介石足下。

足下が日本国民を教えられるについては、その言葉が甘くても苦くても、われ等は喜んでこれに傾聴するものである。併しながら唯一事足下に告げたいと思うのは日本国民も全く愚かではない。正しきことはこれを受入れるけれども、正しからざる事、謬れる事は、これを鵜呑みに承認するわけにはゆかないのである。

足下の声明の中に『由来、中国々民革命運動は……既に国民的独立の精神を發揮し、各国の識者は皆その自由及び独立の能力あるを公認せざるものなきに至つたのである。故に列国の政府が能く我が党の主張を理解し、之に妨碍を加えるが如き事なくんば、革命運動は決して今日の如く停顿の状を呈せず、或は已に成功を告げたるやも知れないのである』とあります。果して然るか。支那革命の失敗は内部の暗闘と勢力争いからでなくて、外国の干渉によつたのでありますか。現にあな^なが総司令の職を抛^{なげ}たれたのは外国の圧迫によつたのでありますか。私は平生国際問題の

研究家として、足下が今更かくの如き事を平然としていわれるのを見て、啞然として驚くのみであります。

事実を打ち開くれば、私は足下が日本に来て、まず日本国民の前にその罪の許しを乞う事を期待して居ったものなのです。何故なれば例の南京事件は貴下の責任下において起り、また漢口事件も貴下に責任なしということが出来ないからである。しかもこれ等に関しては貴下は全く言及するなくして、却つて支那内乱の原因は列国にのみありというに至つては、その断定の大胆なる驚くの外はないのである。

齒に衣着せずして申しあぐれば、支那人の欠点は自己の内省足らずして、事件の原因を常に他にのみ帰することである。故に事件が起きればその責任について他人をのみ責めて居つて、自身の責任はこれを問わず、紛擾は常にこうしたところに胚胎するように思う。あなたが日本国民に与えた公開状には、この同じ欠点が見られないでありましょうか。

併し何れにしても、日本国民は常に支那国民の味方である。この点において足下は如何なる場合にも日本国民をその友人の中に数えておいていいと思う。あなたの言も相当に大胆であつたら、私の言も礼に添わないもののあるであろうことを許して下さい。（昭二・十二）

【追加資料…蒋介石声明】

——一〇月一日付新聞に、神戸港で船から降りる写真が掲載される。

昭和二年一〇月二四日付東京朝日新聞

蒋介石入京す―盛んな出迎えを受け　一まず帝国ホテルに落ちつく

「日本国民に告ぐ」蒋介石氏の声明書

余は、中国国民党孫総理の遺囑をじゅん奉して、年来民国革命に従事し、貴国の人士と久しく相見ざりしが、この度職を辞し周遊の途に登り、まず貴国に渡来せしところ入国以来各界の人士より誠※「#1字不明」な優遇を受けたるは、深く感謝に堪えざるところである。

○

貴国は我孫総理革命の策源地にして、又我国民党の前進たる同盟会誕生の※「#1字不明」なれば我中国国民革命とは至つて深い關係を有つて居る。余は貴国国民の中華民族に対する※「#1字不明」念は彼我の別なく平等の精神に満ちつつあるを見て、極めて※「#2字不明」なる印象を得た。由来中国国民革命運動は我が党の奮闘に由り既に国民的独立の精神を發揮し、各国の識者は皆その自由および独立の能力あるを公認せざるものなきに至つたのである。故に列強の政府が能く我が党の主張を理解し、これに妨害を加えるが如き事なくんば、革命運動は決して今日の如く停頓

の状を呈せず、あるいは已に成功を告げたるやも知れないのである。国民も必ずや中華民族の自由と独立とを希望するは他国国民より一層切なるものあるべきを信ずるものである。

○

年来貴国の人士が日華親善の道を講究し、その実現を期せられたるは疑なき事実なるも惜しいかなその道を得ざりしたため今※「#1字不明」その実現を見ざるは、我等の共に遺憾とするところである。されば貴我両国間における一切の誤解と悪感とを一掃するには須くまず貴国の朝野は我が国民革命運動に対して徹底的了解を持ち、これに向つて道徳的精神的の援助を与え一時の利害に動かされず、万惡の軍閥を利用してこれを妨害するが如き事なきは、即ち我が国民革命運動にばく大なる助力たると同時に又両国親善の根本的要請たることを知らねばならぬ。

1 満蒙と日米の立場 【第六編 「世界は動く」から】

一 モンロー主義と日本

国際問題においては、一つの問題について長く、根気よく執着していれば、それが何時の間にか国際間に認められるという特徴がある。この一つの例はモンロー主義であり、他の例は、もう少し狭い意味ではあるけれども、満蒙における日本の特殊地位である。

日本は満蒙に対するその特殊地位については、かつて自から毫末も疑いを挿^さはさんだことはない。この事の可否得失については、政治論として無論大いに論ずる価値はありうる。併しながら実際問題としては、歴代の政府、政治家、責任者の間において、この事は問題になったことすらもないと思う。対支政策については、その政党及び当該大臣の態度によつて、多少の相違はあるが、事一度び満蒙に対する根本問題に関するや、それは全然同一だということが出来る。

田中内閣がその成立早々、支那に対する態度を決し及び打合せをなしておく必要ありとなし、所謂東方会議なるものを召集したが、その終了に当つて田中首相は、日本は満蒙の治安維持に任ずる旨を声明したのであった。満蒙という兎にも角にも支那主権の下にある地域に対し、日本という隣国が治安維持の責任を帯ぶるという声明は驚くべき事であるが、併し田中内閣の決心は疑い

もなくそこにある。現に先に南北の衝突あるや、帝国政府は五月十八日、張作霖氏及び南方政府に覚書きを交附したが、その一部にはこうある――

『満州の治安維持は帝国の最も重視するところにして、苟も同地方の治安を乱し、若しくはこれを乱すの原因をなすが如き事態の発生は帝国政府の極力防止せんとする所なるが故に、戦乱京津地方に進展し、その禍乱満州に及ばんとする場合には、帝国政府としては満州治安維持のため適当にかつ有効なる処置をとらざるを得ざることあるべし』

右の声明によつて日本政府が満州の治安を保障していることは明らかである。謂うところの『適当にしてかつ有効なる処置』とは何であるか、そして『治安』とは如何なる程度までを意味するかは、なお後に残る問題であるが、併し日本政府の牢^{ろうし}平たる決心に至つては即ち疑うべからずである。

二 各政党の満蒙観

併しながらこれは何も政友会内閣の専売ではない。この前の憲政会内閣もそうである。同内閣は外相に幣原氏を有し、対支親善政策をとつて、その消極的態度を攻撃されたものであるが、併しその満蒙に対する根本觀念に至つては、田中内閣との間に殆んど何等の相違もない。

当時の若槻首相は貴族院における質問に対して左の如く答えた。

『帝国の接壤地域であります所の南満州及東部内蒙古に於ける我が特種利益の確保擁護に關しましては、政府は常に深甚の注意を怠らぬ所であります。若し同地方の秩序紊乱の為に帝国の康寧こうへいに影響するか如き虞のあります事態の生じました場合に於きましては、政府は必ず適當の手段を講じて治安の維持に努むることに於いて万違算なきを期する積りであります。又同地方に於きまして同胞国民の生命財産の安固を保持し正当なる我が權利々益を確保し国民の經濟的發展の助長に資することにつきましては、政府の最善の努力を致すことは申す迄もないことであります』(大正十五年三月廿四日貴族院において)

見るべし、對外強硬政策を以て鳴る田中内閣と、對外消極政策を以て称されし若槻内閣との間には、その根本問題については何等の相違がないばかりでなく、その文字言語の使用法すらも同一であることを。もしこの兩者間に何等かの相違があるとすれば、それは根本問題の相違でなく、単なる方法の相違といつてもいい程度のものである。

三 日本の主張の根拠

然らば日本が、かくの如く特殊地位を主張する根拠は何処にあるか。これについては『日米兩

国の満蒙觀の相違』を検討することを以て目的とする本論において、詳細に述ぶることは困難であるが、大体左の数項に含まるべきものではないかと思う。

第一には歴史的理由である。即ち日本が国運を賭して満州をロシアの手から奪つたということである。この感情は冷めたい理論が含む内容よりも、満蒙を日本の特殊地域と信ずることに重大なバートをつとめている。殊に現在日本の政局を担任して居る人々は、日露戦争の頃は壮年であつて、所謂臥薪嘗胆の苦を経験した人々である。従つてこの人々が満蒙に対し正當以上に執着して居るのは、情において同情すべきことであつて、彼等が二タ口目には、『明治天皇の御偉業により』を担ぎ出すのは、元より故あることである。

併しながらこの事は日本人にアピールするように支那人及び世界列強にアピールしないであらうことは確實である。ロシアが帝國主義的野心を以て満蒙に勢力を張つたことに對し感謝しなかつた支那及び列強が、それがたまたま日本に移つたからとて、これに感謝する理由がないであらうことは、われ等もこれを公平に認めざるを得ない。

第二には接壤地域としての特種地位である。これはワシントン會議の際廢棄されたところの有名な石井ランシング協定にも規定してあり、また日本が機會あれば持ち出すところのものである。現に一九二〇年對支借款團組織當時の日本政府の声明にもこうある。

『然れども新借款団問題は他の關係国に取りては主として單純なる業務上の利害問題たるに止まるも、日本に取りては往々国家の緊切なる利害問題を包含し、その我領土に接続せる關係上国防並に國民の經濟的生存に重要緊密なる關係を有せり、然り而して如上日本の特殊地位に關しては從來關係国政府に於ても之を諒認するに躊躇せざりし所なりと雖も……』

即ち接壤地なるが故に日本が特殊の關係にありとの事實は、大体に列国に承認されたるものであるといふのである。併し支那は元よりこれを認めず、ワシントン會議において『日本に接壤地として満州が大切であれば、同じ理由で支那は接壤地として朝鮮の特殊地位を主張せねばならぬ』といった意味の反駁をなし、更に最近の日本に対する回答において南北政府共左のように述べている。

（北京政府、昭和三年五月廿五日）日本政府は東三省に影響を及ぼす場合は、日本政府は適當かつ有効なる処置を取らざるを得ずとの一節は支那政府の承認し難いところである。即ち東三省及び京津地方は何れも支那領土主権のあるところであつて、如何なる影響があつても外人の安全は支那政府が自ら保護の責任を負うべきである。

（南京政府、五月廿九日）貴国覚書中、東三省の治安を維持せんがため、或は止むを得ず適當且つ有

效の措置を執るべし云々とある所のこの措置は、支那の内政に干渉し、且つ明らかに國際公法上列國相互に領土主權を尊重するの原則に違背し國民政府の斷じて承認し難き所なり。

右によつて日本の特殊地位の主張に対し支那だけはこれを承認せざることを明らかにである。

第三に日本がその特殊地位を主張する理由は、日本の甚大なる利害が含まれていることである。支那自身は關東州及び滿鉄、安奉線の租借權九十九箇年延長の有効を認めず、その返還を迫つたけれども、列國にして未だこの点に關して日本の權利を否定したものはない。既に關東州及び滿鉄が完全なる日本の支配下にあるとすれば、その秩序を維持する上からも、何等かの意味の特殊地位は生れざるをえない。

第四には日本が生存するために滿蒙を必要するという議論である。國が生存せんがために、他國の領土を必要とし、それが特殊地位を形成し得る理由になりうるかどうかは元より議論の分るところである。併しながら日本の富源の少なき事、將來産業國として立つためには地勢上滿蒙を要すべき事情は、案外有力に第三者に對し、日本の特殊地位を是認せしむべき理由となつて居るのである。

日本の滿蒙における特殊地位を主張する理由は、説いて詳かなるをえざるは遺憾であるが、大体之以上のものであると思う。即ちそれは條約的であるよりも慣習的、歴史的であり、理論的で

あるよりも、やや感情的であり、またモンロー主義と同じように多分に Self-assertion 【自己主張】でもある。然らば【これ】に対し米国の立場は如何。

四 日米両国の相違

今のところ満蒙に対する立場について大別すれば、結局日本と米国とのそれに帰しうると思う。英露両国とも、そこに有する利害は決して少なしということは出来ないけれども、その支那に対し有する利害が多いだけに却って明らかなヴォイスを発することが不可能な状態に置かれている。日本の主張に対し表面からチャレンヂし得るものは、米国あるのみといつてもいいと思う。

これを正面的立場からすれば、支那全体に対しまた満蒙に対する政策について、日米両国の意見の相違はないといつても差し支えない。米国の対支政策は何人も知るように支那の独立及び領土保全、支那における商工業の機会均等主義、即ち門戸開放主義であるが、これについては日本は何回も列国に対して声約ⁱして、今更この根本主義に疑いを持ちえないまでになっている。即ち日本は日英同盟協約（一九〇二年、一九〇五年、一九一一年）、日仏協約（一九〇七年）、ポーツマス条約（一九〇五年）、日露協約（一九〇七年）、高平ルート協約（一九〇八年）、石井ラン

ⁱ 「誓約」か、口先だけで約しているという意でないとすれば、声明で約しているという意であらう。

シング協定（一九一七年）等において、何れもこの意味のことを声明して居り、従つてこれに対し忠実に実行するの責任を負つて居るのである。

併しながら實際問題としては、支那に何等エキスクリユーシヴな【exclusive 占有的】利権を有せず、単に商業を目標とする米国と、重大なる利権を有する列国殊に日本とは、自然にその意見及び政策の相違が出て来るのを常とした。この場合米国は極めて敏感に門戸開放主義に反する如何なる国に対しても反対して來たのである。

元來、米国には二つの外交的国策がある。一つは欧州及び両米大陸に関するものでモンロー主義であり、他は東洋に対するもので門戸開放主義である。米国は東洋に関する限り如何なる場合でも門戸開放主義に執着して來た。始め滿蒙に蟠居して門戸を閉鎖せんとしたロシアに反対したのは、これがためであつて、このロシアを破るために戦つた日本に、熱心なる声援を与えたのも当然である。然るにそのロシアが敗れて日本がこれに代るに及んで、米国の支那における目標は日本になつた。日本は常に米国の注意をひかねばならなかつた。

かの一九一五年において日本が所謂二十一箇条の要求を支那に提出するや、これに正面から反対した唯一の国は米国であつた。米国は五月十一日に日支兩國に通告して、兩國の間に締結する協約にして『支那における合衆国及びその市民の条約權を毀損する、支那共和国の政治的或は領

土的保全を害する、乃至は支那に関する国際的政策＝普通門戸開放政策として知らるるものを害う』ところの如何なる協約をも認むることを得ざる旨を声明したのであった。

この米国の門戸開放政策は、右の抗議をも一つの理由として、日本の対支要求を多少緩和せしめたのが、第一の勝利であり、その後一九二〇年新借款団組織に際して、日本をして南滿及び東部内蒙古における鉄道建設に関する借款の独占権を、特定のものを除いて放棄せしめたのが第二の勝利であり、更にその後一九二二年のワシントン會議において九箇国条約を成立せしめ、門戸開放主義を正式に条約化、国際法化せしめたのが米国の圧倒的勝利であつた。

この幾つもの条約、声明に縛されている日本は、今や田中内閣の蛮勇を以てしても、『治安維持』の目的以外には兵を動かすことができないことになって居る。これは注目すべきことである。

五 米国の対滿蒙觀

米國が滿蒙に対する態度を明らかにしたことは無論一にして止まらない。併しワシントン會議の際（一九二二年二月三日）極東委員會における当時の國務長官ヒューズ氏の陳述はここに引用する価値がある。同氏は『右地域において外国資本に依り企画せらるることあるべき此の種性質の企業は殆んど悉く右財団に依り実行せらるるに至るべきは疑なき事實なり』といい、『併しな

がらこの事は排他的なるものに非ず、何れの国民も完全に投資の自由を有す』と述べ、

『故に予は一九一五年の条約に基きたる南滿州及東部内蒙古における鐵道敷設に関する及び地方収入を担保とする財政的活動に関する独占的地位の主張を拋棄すべき旨の日本国政府の声明は此の意味を以て解釈するの正当なることを信ずるものなり』

と釘を打ち、日支間の条約に『南滿州において日本国民が商工業上及び農業を經營するため土地を商租する權利』を許与した条項があるが（一九一五年五月廿五日の条約第二、三、四条）、この条約が効力を生じた場合には米国も最惠国條款に基いてこれが權利を得べしと述べ、最後に

『合衆国はその人民の支那に於て商工業に従事し得る一般的權利に影響ある一切の問題に付爲したるが如く本件に付ても一切の国民に対する平等主義を主張するは合衆国政府の伝統的政策たり（下略）』
といつて居る。

かくして米国は一九一七年十一月二日両国間に交換された石井ランシング協定（日本の支那、特にその近接の地における特殊利益を認めたるもの）を廃棄することに成功し、またこれに加えて滿蒙における日本の特殊地位を、結果において認めたところの日英同盟をも併せて終止せしめ、これに代えて門戸開放主義一点張りの九箇国条約及び四箇国条約を成立せしめたのである。

この日英同盟の廃棄に対して米国が如何に苦慮したかは想像の外である。かの四箇国条約には

その第四条において同法が効力を生ずると同時に、日英同盟が廃棄さるべきことを規定しているが、これに対して当時の上院外交委員長ロッヂ氏は一九二二年三月八日上院において

『該条約の主たる且つ最も重要なポイントは日英同盟の終熄である、これが同条約の主なる目的である。……日英同盟はわが国と極東及び太平洋の關係において最も危険なる要素である。』

と述べている。そして日英同盟を嫌うた理由は種々あろうが、その大なるものが、日本の満蒙における特殊地位に関するものであることに識者の觀察は一致している。(*"Dollar Diplomacy"* By Scott Nearing, p. 62)

六 不用意なる真意

米国の満蒙に対する態度は以上のような表面的な事実及び文書において明らかであるが、併しもっと明瞭に分るのは、彼等の不用意に発する言によつてである。今回田中内閣が『満蒙の治安維持に関する声明をなすと、二三日してからワシントン電報は直ちに米国々務長官ケロッグ氏の談話を伝えて来た。

それによるとケロッグ氏は五月十九日ワシントンの新聞会議において

『米国は日本の声明に関して何等の相談も受けるところがなかった。しかして米国は満州を以て支那

の領土と認め、且つ日本が満州において特殊の勢力範囲を有するとの意見を承服するものでない。』との説を吐いたとのことである。（朝日新聞及びジャパン・アドバタイザーの特電等）

この説が日本において意外の反対を惹起するや続いてワシントン電報は日本側に誤つて引用された』とて

『国務省が釈明するところによるとケロッグ氏は先週新聞記者団との非公式会談において単に米国は満州を以て常に支那の領土と思惟し来て居る事、及び石井ランシング協定は既に廃棄されたことを述べたが、同時に遼東半島における日本の権利と南満州鉄道の租借権とは米国も之を認めて居ると言明した筈だ』

と弁明して居る。これ等の談話を見てケロッグ氏の意志感情が何処にあるかは明らかである。

こういう不用意な談話は何も今回が初めてではない。一九〇八年十二月にタフト大統領は米国の駐支公使としてクレーンを挙げた。同公使は命を受け支那に出発せんとして居つたが、なお国内に居る時に、米国の対支政策を公然発表して、南満州及び安奉線沿道における日本の採鉱権に対し、米国は日米新協商の趣旨によつて日本に向い抗議するつもりであると公言した。米国政府はこの不用意な公言に驚いて赴任の途中より同氏を召喚したことがあるが、國務長官ノックスが、満州鉄道の中立を提案したのは、それから間もない頃のことであつた。

不用意な言葉が却つて用意された言葉より真意を知るに便利なことがある。この二つの事件は果して何れの事を示すものであらうか。

七 米国の対満蒙失策

かくの如くして満蒙に対する米国の態度は明瞭であるが、併し私の考えるところでは、この米国の態度は積極的でなくて、消極的である一事である。将来、米国の富と活力が外にあふれ出す場合には如何なるかは不明であるが、過去現在において、そして又近い将来においてそれが積極的になるべしとは考えられない。

こういうと論者は、かのストレート及びハリマン両氏の活動から、ノックス國務長官の鉄道中立提唱を引用して、その然らざることを述べられるであらう。併し私の考えでは、これ等の事件は米国外交の脱線の事例と見るべくして、継続的、恒久的な米国の政策の現れと見るのは誤りだと思ふ。

この主張を裏書きする者は米国人自身にもある。最近発行されたニコラス・ルーズベルト氏の著書“The Restless Pacific”などがそれである。同氏はニュー・ヨーク・タイムスの論説記者で先頃東洋を視察して帰米した人である。同氏はノックス氏の提案を以て米国の外交史に於て稀に見

る大失策だといっている。(同書一二〇頁)

『米国政府によつてなされた外交的失敗にして南滿鐵道の國際化を企図した如き大失敗はない。この計画は日本に対する不必要なる侮辱である。それは日本の誠意と能力に対する批難である。それに又日本の日露戦争の収益を奪わんと欲したものである』

こういつて来て同氏は筆を進める、『かりにその計画が成効したとしても、それにより米国は東洋における帝国主義者の衝突に深く巻き込まれ、米国が帝国主義のチャンピオンたるに至つたであろう。米国はこの戦術的な鐵道の中立を提議した主なる責任者として、その立場を支持し、また必要ならば、武力を以てこれを固持する道徳的責任を負わねばならなかつた筈である。その内には日本との戦争が不可避となるべく、更にまた米国をロシアとの重大な繋争にも巻き込ましめたであらう。』

この論者の批評は正しいと思う。米国は両米でならば、兎に角として、東洋において戦争を預期してまでもその利権を植えつける意志ありとはわれ等の信ずる能わざるところである。殊に米国としては門戸開放主義に関する限り常にオフェンシヴな、有利な立場に立つて居られる。かれはこれを氣長く主張して居ればいいのである。これがモンロー主義の如く米国が防禦側に立つものとは自ずから異なる所以である。

八 日本は被告の立場

米國が門戶開放主義の擁護者として自から居ることは、われ等の同情を惜まないところであるけれども、併しながら現在米國の行動が、必要以上に自分勝手であり、また時に他國の費用において自から利せんとする傾向あることは甚だ遺憾とするところである。

元來、米國の外交は欧州に対してこそ孤立政策であるけれども、東洋に対しては常に協調政策をとつて居る。義和團事件から關稅會議に至るまで、米國は特殊の地位を占めて居る。特にワシントン會議はその主權國である關係から、九箇國條約に關しては特別な役目をつとめているのである。前述した如く支那に対する列國の政策は、今や門戶開放主義以外の何ものでもなく、此の點は米國外交の勝利といつてもいいのである。

すでに米國のリーダーシップによつて門戶開放主義の政策が確立したとすれば、米國は更に『門戶開放』後の支那と列國の關係について、相當踏み込んだ責任を負わねばならぬ筈である。即ち米國は各國が帝國主義的領土侵略的なる場合においてのみ、門戶開放主義を以て、これ等に対抗するのは當然であつたけれども、列國が『門戶開放』に歸つた以上は、これ等と協力するのはその道德的義務である。支那と列國との關係を憂慮する事、謂うが如く甚大ならば、門戶開放後に

において米国が列国と協調して、支那と列国のために計るべきことは当然でなければならぬ。

然るに事実問題としては、米国は自分勝手の時には列国を引きずつてその態度に同ぜしめるけれども、然らざる時は自由に行動して列国の歩調を壊すのを常として居る。南京事件の跡始末においてそうである。京奉線唐山警備について他国の諒解なくして撤退した如きも然りである。

何人にも明瞭である如く、今回の京津防備の如きは如何に解釈するも帝國主義的行動ではない。それは支那の動乱から自国民を保護する目的にすぎない。それなればこそ日、英、仏、伊その他が共同してこれに当り得るのである。元より唐山附近における米国の利害については余りに多しとはいえないかも知れない。併しながら支那の無意味なる動乱から外国人を保護することが、結局その防備の目的であるとすれば、列強の足並みを無用にくずさないだけでも、同一の行動をとる義務がある筈である。それは米国の東洋に対するヴォイスの大なるに鑑みて当然の義務である。米国は自から支那に租借地のないのを誇つて居る。併しながら自己の租界を有しない米国は、その国人を他国の有する租界に住居せしめ、他国の犠牲と保護の下に安住して居るのである。この事実を顧みずして、その租界の責任者が自から守る場合にすらも、内部から異議を唱えるに至つてはこれ普通の意味の道義にも合せざるものである。われ等は門戸開放主義のために奮闘した米国の努力を感謝すると同時に、この政策が確立したる後において、その努力を支那と列国の新

関係の樹立に払い苟も他国の費用において、自己を利する如きことなきを希望せざるを得ぬ。

いづれにしても満蒙に対する日米の見解の相違は文字の上にはない。それは解釈についてである。そしてこの場合日本の立場は防禦的被告的であり、米国のそれは原告的である。日本は米国の態度を無視することを与えない。それは丁度モンロー主義を固守する米国は、その問題に関する限り防禦的であると同じ立場、同じ意味においてである、（一九二八・六・一）

2 不戦条約調印の日【第六編 「世界は動く」から】

六十年目の独逸使節のパリ入り

今日こそ不戦条約調印の日だ。そう考えてパリの市民は、沸きたつような感情に熱するのだった。

パリの市民が不戦条約を殊に意義深く感じたのは、なにも仏国民だけが世界各国民に増して、平和を熱愛するからというのではない。また必らずしも不戦条約の発案者が、フランスの外相ブリアン君だからというでもない。否、これ等は無論、感情に強いパリ市民を刺激したものであるではあろう。が、もつと重大な原因は、十年以前は正面の敵として、よし天地はその処を変え、することはあつても、絶対に相握手することはあるまいとまで決心したドイツの外務大臣が、不戦条約成立を機会に堂々とパリに乗り込んで来たからである。

『ストレゼマン君万歳！』

昨日、ドイツ外相がパリの停車場についた時に、その附近には山のような群衆が集つて、こう叫んで歓迎したものだつた。昨日の正敵、今は味方か。過去における両国の血で縫うた格闘の歴史を想い来つて、この光景を見る時に、両国に關係なき観察者の眼にも涙があつた。

パリ人がこう狂喜するのも無理のないことであつた。誰も知るように仏国とドイツは、敵の末として生れ落ちたかと思われるほど、お互いに仲が悪かつた。牆一重……と云いたいが、実はその牆すらもない隣り同志として住みながら、過去六十一ヶ年の間、ドイツの國務大臣が正式にパリを訪問したことは、一度もなかつた。従つてまたパリがドイツの正式代表を公式に歓迎したことのなかつたことも無論である。

ドイツの代表者が最後にパリを訪問したのは、あの鉄血宰相ビスマルクが一八六七年（慶応三年）のパリの大博覧会に出席した時である。何しろビスマルクといえど、当時欧州で鳴らせたもの、この時のパリ入りは元より堂々たるもので、それがまだ仏国の長老の間には語り草になつてゐる。それから半世紀以上を経た現在なのだ。

ここで一寸道草を食うが、このパリ大博覧会には日本からも使節が行つて、現に渋沢栄一子は、その時始めて洋行した一人である。一行の正使は慶喜將軍の弟にあたる民部大輔の昭武で當時十五歳の少年、これに二十五人許りの従者がついて行つた。何しろ外国の事情などは少しも知らぬ頃だ。大小をたばさんで、あの武士姿で闊歩したものだ。

各国の代表者が揃つたから、いよいよ觀兵式を行うということになると、日本使節は戦争の実演をするんだから、こちらでも武裝しなければなるまいと、かねて用意の鎧兜で出たものだ。する

とこの怪奇の姿に、騎兵の馬が驚いてナポレオン三世陛下の行列の中に駆け入り、その行列を乱して一大事を惹起したが、ナポレオン三世もその原因が日本使節の服装にあったと分つて、笑つて咎めなかつたという一つ話しがある。

ドイツ國務大臣の仏国訪問はこの時が最後である。その後世界大戰の終結の時に、ドイツは代表者をヴェルサイユに送つたが、これは敗惨の国として聯合國の法廷に引き出されたといつてもいいほどのもの、元より歓迎どころの騒ぎではない。

こういう事情にあるところへ、今度ドイツ外相が乗り込んだのだ。両方共無量の感慨に打たれたのは当然であつた。

(二) 由緒多き『時計の間』で正式署名の会合

ドイツ外相ストレゼマン氏に前後してパリに入つたのは米國國務長官ケログ氏であつた。ケログ氏は不戰條約の正式の提案者であり、生みの親である。世界の歴史は、永遠にこれをケログ條約として、将来に伝えるであらう。

ドイツ外相のパリ入りが、劇的光景であつたのに対して、米國正客の都入りは甚だ花々しくなかつた。ケログ氏はニューヨークを出発した時から、自から箱口令かんこうをしいた。大統領選挙が近

づいて、それに利用されるのを嫌った結果でもあろうし、また例のサッコ、ヴァレンチという二人の無政府主義者を米国裁判所が死刑に処したので、これに対する仏国同主義者の抗議の示威運動をする計画があつたのを避けるためでもあつたろう。かれの乗った汽車は予定よりも一時間も早くパリについて、歡迎者や新聞記者を失望させた。

『新聞記者に会見します』

それから暫らくして米国大使館からこういう通知があつた。世界の有力な新聞を代表する特派員が百名も大使館の庭に集つた。待っているとそこへケロッグ氏が現れて、階段の上から挨拶をした。

『諸君、私は当地に参りましたことを頗ぶる喜びと致します。……』

ケロッグ氏の挨拶は紋切り型の短いものであつた。何か質問しようすると、姿はその俚家の中に消えてしまった。果然不平は新聞記者から起つた。ジャーナル紙のブライス君はその場で、この『失敬な待遇』に抗議した。有力なエコー・ド・パリ紙の如きも『政党の一弁護士が単なる機会から不朽の名を得て……』などと不快な筆を弄した。

こうした種々な場面があつて後、今日——昭和三年八月廿七日というに、いよいよ各国の代表者によつて署名されることになった。場処は仏国外務省の『時計の間』、珍らしや、それはあの

ヴェルサイユ条約が、署名捺印された同じ部屋であり、同じテーブルであつた。中央には不戦条約の正文があつて、ただ名前を書き入れるだけになつて居り、その横には古いインキ壺がある。ルイ十六世大帝が造られたもので、ヴェルサイユ条約で西園寺公望公などが、日本の全権として、その名を署されたのも、このインキ壺からである。ペンは今度ハーバ市から米国务務長官ケロツグ氏に贈呈したもので、その表には“*Si vis pacem para pacem*”【汝平和を欲さば、戦の備えをせよ】と彫り込んである。

『これから開会致します』

馬蹄型のテーブルの真中に座を占めていた仏国外相ブリアン氏は、その国の責任者として議長役をつとめ、こう口を切つた。見るとこの部屋を像徴する時計の針は、今し午後三時を指していた。

忽ち目まぐるしい燈燭とうしよくが光り出した。世界の各地から来た発声映画の技師は、この歴史的光景を映写すべくせわしく、その機械を回転させるのだつた。

(三) 主人役の仏国外相の司会振り

ブリアン氏は立つてまず一場の演説をした。元来かれは如何なる場合でも、草稿を持たないの

を常としている。個条書き一つ持たずに、無造作に突立つて、それで数万言を重ね、それが立派な文章になるのが、かれの特長である。が、そのかれも流石に今日という今日は、丁寧に用意した原稿を朗読し始めた。

『矢張り原稿に囚われるせ駄目だね。今日の先生の演説は案外精彩がないね』

新聞記者席からそんな声も洩れるのであった。

『世界始つてから今こそ始めて、戦争の手段に訴えないで、訴えたと同じように難問題を解決し得る方法が、各国の前におかれたのであります。各国とも過去長い間、政治的闘争の歴史を持つて居ります。しかもこの大国が厳肅に、自国の名誉を含む条約に宣誓して、国策としての戦争を廃棄することを誓うのであります。国策としての戦争を廃棄するとは何ぞや、それは自我的な、惡意的な戦争を廃棄するの意味なのである』

ブリアンは演説を進めた。階子段を一つ一つ踏みしめて行くように、かれの口調にはいつもの熱はなかったが、力はあつた。

『今まで戦争は神が与えた権利かの如く信じられていたものであります。それは主権に附随する特権かの如く信じられて来た。この「戦争は正當な事である。合理的なことである」という危険な思想が、今や法律的に不法なことに決定されたのである。それが重要なことでなく

て何であろう……今や平和は宣言された。それは重大なことであります。併しそれを組織化する事業は尚将来に残っている。この難事業を解決するために必要なのは正義であつて力ではない。そしてこれは明らかに明日の仕事なのであります』

仏語の演説は英語に翻訳された。その間ブリアンは喜ばしけに立っていた。

列席の者は改めて今日の主人公を観た。彼等は余り風采のあがないブリアン氏を見ながら、この人が世界とフランスの政治に、かほどまでの感化力があるかを驚いていた。ブリアン氏がサナゼールという片田舎の小酒屋の息子であることは知れ渡つた事実である。かれは学校らしい学校へは行かなかつたが、その学校でも決して好成绩ではなかつた。田舎に居ることが嫌さに、米俵のような洋服を着て、あの恰好の悪い足取りをしながら花のバリに出て来たのは、青年というにはまだ若すぎる頃であつた。

かれはバリでは下街を本拠にしていた。地下室のカフェーや、小ぎたないレストランに陣取つては、社会主義だ、直接行動だというような物騒なことばかり説いていた。かれこそ字義なりの放浪児であつた。

その放浪児が一度代議士になつてから運が向いて来た。ある日かれの議会における演説を聞いていた有名なクレマンソーが云つた。

『おれがネ、もしあのノートルダム寺院の塔でも盗んで、牢屋に打ち込まれることがあつたら、おれは弁護士としてあの若僧を頼むネ。なにしろあの下らないことを有難そうにいうところは天下第一品だよ』

かれはその頃、放浪しながらも勉強していて弁護士になつていた。最近かれは『いい弁護士は最も悪い政治家だよ』と、ある人にあてつけて云つた。するとその對手が『あんたも弁護士ではありませんか』という、『だがおれは最も下手な弁護士なんだ』と、時に政治家としてかれの自信を現したことがある。

いかにもかれは政治家として仏国独歩の観がある。総理大臣になる事十回、平大臣になること十六回、そして現在の外務大臣として、総理大臣は代つても、かれだけは代らないのだ。

(四) 各国の使節順次に署名

ブリアンの演説がすむと、直ちに各国の代表者が署名することになった。折角の会が皆な勝手な事を云い出して滅茶々々になつては困るという米國側の心配によつてである。用意して来た大演説が無駄になつた使節もあつた。まず立つたのはドイツ外相のストレーゼマン氏である。

『見ろ、あの苦しそうなことを』

新聞記者席からは私語が起った。見るとストレゼマン氏の首の辺からはダラダラと汗が流れていた。かれは久しい間、病氣だった。『到底あの病氣では不戦条約の調印にはパリに來られまい』かれの知人も、新聞も皆なそう噂さしていた。

『行く。大事な場合だから、途中で仆れても行く』

かれは断然云い放った。そして医者と看護婦を連れてやって來たのである。それはあの有名なベルリン會議の時に、英国の大宰相ヂスレーリが、病体をしのんでベルリンに行つて、ビスマルクや露国使節と折衝したのと似ている。

ストレゼマン氏にして見ればこれは大事な場合である。由來ドイツは偉大な外交家を出さないことをその欠点としている。

『ドイツは偉大な芸術家を出した、偉大な文学者を出した。偉大な音楽家を出した、偉大な発明家も出た。偉大な政治家、偉大な軍人もあつた。が、一人の偉大な外交家を持つて居らないではないか。外交家のないことが、世界大戰に惨めに敗けた所以であるのだ』

そうある文明批評家は評した。この外交家欠乏のドイツに唯一の売はわがストレゼマン氏である。かれは中央党をひきいて、誰が首相になろうが、重要な外相の位置に押されて動かない。既に任を享けて外相の重任にあたる以上、世界の劃期的事件に参加して、ドイツの誠意を示さない

でよからうか、かれが病いを冒してこの會議に列席したのはこれためである。

ドイツ外相に続いて米国國務長官ケログ氏が立つた。前に書いたように、ケログ氏はこの不戰条約の生みの親で、今日の晴れの立役者である。

『政黨の一弁護士が偶然の機會から名を不朽に伝えて……』

その朝、パリの新聞が書いた嫌味が想い出された。かれが弁護士出身であることは事實である。今から七十一年以前に、かれはニューヨーク州の貧乏人の子に生れた。今偉くなっている米國の成功家が多くはそうであるように、かれも全く自力で勞働して現在の位置を造りあげたのである。商店の小僧もやった、新聞売子もやった。そして學校へも行かずに、弁護士試験の関門を突破し、政治家になつたのである。

かれが署名しようとする、その記念の万年筆からインキが出ない。かれはそれを腹立たしげにはげしく振つた。それでも旨く書けないので、ポツリとルイ十六世のインキ壺に入れてインキを妊はらませた。

ケログ氏が席につくと、今度は英國の代表者が続いた。元來なら外相のチェンバレーン氏が来るところであるが、過勞の結果か性質の悪い病氣になつて、今、船で大洋を旅行しつつある。その代りに來たのが、クッシェンダンその人である。

クッシェンダン卿というのは嘗てはマクネールといつて長く外務次官を勤めた人である。(英国では華族になると名が代る、例えばアスキスがオクスフォード卿となり、スミスがノースクリッフ卿となつたように)。この前、ジュネーヴの軍縮會議に、かれは英国の全權として参列した。その時である。かれが一時に名をあげたのは。

誰も知るようにこの会には労農ロシアの代表者が出席した。英国とロシアと仲の悪いのは猿と犬との比ではない。ロシアは久し振りで憎い敵と同席したのであるから、世界環視の中で手ひどく英国に赤恥をかかしてやろうと思つて来た。あの雄弁なりトヴィノフが、練りにねつた原稿を以て、縦横に論じ来たり論じ去つた。

ロシアの代表者の長広吉が終ると、丈の高い――六尺五六寸もある巨人が無造作に立つた。それはロシアの正面の敵たる英国の代表者クッシェンダン卿であつた。かれは準備もなく、このロシア側の巨砲に答えた。礼を尽した言辞を以て前後二時間余、滔々としてロシア側の論拠を粉砕し尽した。

『巨人クッシェンダン卿！。かれの前に惨めにロシアは敗北した』

そんな風な通信記事が、世界の隅から隅まで載つた。それを一転機として今まで世間的には無名であつた外交官は、一躍して世界屈指の名外交官として持てはやされることになつた。

こうして不戦条約の署名行列は続いた。日本の内田伯も立てば、カナダの代表者も捺印した、参加総国数十五ヶ国、（この中には印度を始め英国自治領がある）。

（五） 不戦条約の効果とその特長

『不戦条約の調印はキリストが生れた時から以来の最大の出来事だ』

そう批評して、この不戦条約の成立を喜んだ新聞があつた。かと思ふと、
『みんな後の方に喧嘩棒を隠していながら、喧嘩をしないことにしようなどと、約束したつて何になる』

と白い眼をむいて馬鹿にしているものもある。一体どちらがほんとなのか。

どちらもほんとなのだ。証書何枚取交わしていても、少しもその約束を守ろうとしないものが、個人の間であるように、国家でもその国家が始めから、約束というものを反古にする気で判をつけば、条約などは幾つあつても頼みになるものではない。

殊に昔から国家と国家との間には、不思議な考えがあつた。それは個人としては嘘をいつたり、約束を間違えたりすることは非常な悪徳と心得ている者が、さて国家の間の事になると、嘘を巧に云うこと、相手の不意に乗じて、高価な財物や土地を搔^{かっば}払うことを外交の要諦と心得ている者

が多いことである。

ルイ十一世が毎日髻を削らせる髪床があつた。この親父が職掌柄、頗る口がうまい。殊に客を胡麻化したり、下らない話しを大袈裟に吹聴したりすることが、実に手に入つたものであつた。

『こんな男を外交官にして相手の国を胡麻化したらいいで』

ルイ十一世陛下はジャリジャリ髻を削られながら、こう考へついた。そこで国王は早速この髪床の主人オリヴィエ・ルダイムを外交官に抜擢して思い切り巧妙に嘘をつかせたことがある。

こういう風に始めから対手を欺す気なら不戦条約などは何にもなるものではない。これでは他の国を油断させて、その隙に乘^{すき}じて、他国の領土でもとる智慧ぐらいしか出はすまい。併し喧嘩すれば結局両方損で、これは如何しても避けねばならぬと信ずるものにとつてはこれぐらい結構な条約はない。

いずれにしても、今までは戦争というものは公然やつていいものであつた。それがこの条約によつて戦争は不正不義なものとなつたのである。如何なる場合でも戦争には訴えない。まず平和手段を以て解決する。それを『人民の名において』宣誓する。これがこの条約の骨子なのだ。

最後にこの条約の原文たる『人民の名において』が、日本の政界に問題になつてゐるから試みに長い原文からこの一項だけを紹介しておいてみる。

ARTICLE I

The High Contracting Parties solemnly declare in the names of their respective peoples that they condemn recourse to war for the solution of international controversies, and renounce it, as an instrument of national policy in their relations with one another.

不戦条約の本文は三ヶ条からなっていてこれはただ一個条だけだ。この『人民の名において』の文字が問題になったばかりに 却って日本では一般の人々に記憶されて来たのは世の中は何が幸いになるか分ったものでない。(昭三・一〇・二〇)

〔# 宣言(昭和四年六月二十七日) 帝国政府は、一九二八年八月二十七日パリに於て署名せられたる戦争抛棄に関する条約第一条中の「その各自の人民の名に於いて in the names of their respective peoples」なる字句は、帝国憲法の条章より観て、日本国に限り適用なきものと了解することを宣言す

ARTICLE II

The High Contracting Parties agree that the settlement or solution of all disputes or conflicts of whatever nature or of whatever origin they may be, which may arise among them, shall never be sought except by pacific means.

ARTICLE III

The present Treaty shall be ratified by the High Contracting Parties named in the Preamble in accordance with their respective constitutional requirements, and shall take effect as between them as soon as all their several instruments of ratification shall have been deposited at Washington.]

6 張作霖の最後 【第六編 「世界は動く」 から】

一 事実の真相日を経て益々不明

張作霖は誰が殺したか。

かれが非業の死を遂げてから、最早数ヶ月の月日は流れた。しかも時日が経過すればするほど、その下手人の本体は不明になって行くのである。生きては東三省の独裁者として、正面から凝視する者すらなかったほどの権威を有したかれが、四辺の明るい早朝、自己の領土内において、しかも自己の百官、護衛隊、憲兵に取巻かれて爆殺されたに拘わらず、その百ヶ日を過ぎんとする今、犯人については殆んど手がかりだにないというのは何故であろうか。

張作霖が殺された頃、長男の張学良は兵を纏めて関内にいた。父の訃報は元より逸早くかれのところに通ぜられたであろうのに、かれは中々奉天に帰って来なかった。かれが帰奉したのは、それから丁度二週間を経た後であつて、かれの親近者の伝えるところによると、かれは鉄道の守備軍の一兵卒に身を変装して、窃かに奉天域内に入ったとのことである。かれはその後人の顔さへ見ると——特に知った西洋人などに対しては、執拗なほど『おれの親父を殺したのは誰だ』と聞いて歩いたといわれる。

張學良ならずとも父の仇が誰であるかを知りたいのは人情であろう。かれは今や推されて東三省の総司令であり、誰がかれの父を殺したかを調査するには絶好の立場に居る。しかも爾來數ヶ月余、この点に關して奉天側から何等の光明が齎らされて居らないのである。これは何故であらうか。

併し奇怪なる事實はこれに止まらない。われ等の聞くところにして謬りなければ、支那においては南も北も、張作霖を殺した犯人を以て、日本人なりとすることに毫末も疑いを懷かないまでになつて居ることである。最近、國民政府が張學良に対し、三民主義奉戴に關し、その言質の復古を責めるや『父の敵は俱に天をいただく、日本を味方として諸君を敵とするようなことは絶対にない安心を乞う』と使を以て言わしめた事實がある。この言葉にどれだけの決心と、重大性があるかは自ずから別問題である。『おれの父を殺した者は誰だ』と問うた者が、自からこう答えるに至つた点に張作霖爆殺事件に關するかれの態度を知ることが出来るではないか。

日本においては從來この問題については、不思議なほど何事も論ぜられて居らない。支那問題が国内問題と同じような興味を有する現在においては驚くべきことである。その論ぜられない理由は無論種々あるであらう。第一は多數の者の無頓着に歸し得べく、第二には當時の新聞は拳げてその犯人を南方政府の便衣隊乃至は楊宇霆【Yang Yüing】一派の所業の如くに報導したから、

その通りに信じて居るのであろうし、第三にある一部のものはこの問題を深く調査することは結局日本のために非ずと信ずるが故であらう。

併しながらその理由が何れにあるを問わず、日本が沈黙を守ることは、少しも日本のために事態を好化しないのである。支那と、そして世界の輿論は、日本の沈黙如何に関せず形造られて居る。日本が論議しないが故に、世界がこれを知らずとする者は、自己の耳を蔽うて世上音のなきを安んずる如きものである。日本は始めから積極的にこの問題に関し事件の真相を調査すべきであつた。そしてこの点において田中内閣は、その責務を果すに充分であつたといえないことは後段説く如くである。

二 張作霖の都落ち

張作霖爆殺の責任者が何人であつたかを詮議する前に、われ等は順序としてまず当時の模様を知つておく必要がある。

昭和三年の春、雪が解けて支那の所謂戦争シーズンが始まると、南方軍は先年来の継続事業である北伐を開始した。途中、済南において日本軍と衝突し、一時出鼻を折られた観があつたけれども北伐そのものは大した障害を受けないで、閻、馮、蔣の三軍は三方面から京津【北京―天津】

に攻めよった。当時、大元帥として北京に頑張っていた張作霖は、持前の強気から飽くまで一戦を交える気で『敵は二十五万、われは四十一万の兵力があり、銃器、弾薬も南軍のそれに比し著るしく優勢だ』とて兎角引き込み勝ちであった周囲を叱咤し、身を以て教えるつもりか、その頃になつて最もお気に入り第五夫人を、わざわざ奉天から呼び寄せたりした。

こうして大衝突の機熟して居った時、日本政府は突然芳沢公使を以て、張作霖に対し関内を引揚げ東三省に帰ることを勧告した。張作霖がこの勧告を如何に憤慨を以て迎えたかは当時の聯合通信がこれを伝えている。

『張作霖氏は極めて嚴肅なる面持ちで有野通訳官の通訳せる右覚書内容を傾聴していたが、談一度引揚勧告に移るや、にわかに昂奮の色をみせ、京漢線方面における奉天軍は極めて有利に進展しつつあり、関外引揚の要は断じてない。京津地方の赤化は国民のため忍びざること、予は最後まで赤賊を防止する。日本が支那赤化の脅威を受くる結果となることは不利であると、持前の肝癪を起し、怒りに煩を瘰癧させ腕を振りつつ足音荒く室内を歩き廻った』

他の外務省辺から出たと思われる記事には『激昂の余り言語を発する能わざる有様で会談四時間に亘るも議論終結せず』とあり、いずれにしてもかれが如何にこの勧告に不快を感じたかが解る。(この時の勧告といい、最近の張学良に対する南北妥協反対の勧告といい、一国の代表者を

通して勧告することを、時候の拶挨ぐらゐにしか思つて居らないのが田中外交の特長だ。

張作霖は一時怒つて見たけれども、満州に育つて日本の恐さは骨身に染みて知つてゐる。かれは結局北京を撤退することになった。今までの大總統の都落ちが、何時でも惨めだったというので、芳沢公使などの勧めもあつて、外交官連を招いて盛大なる別離の宴を催したり、元老王士珍を招いて、治安維持の後事を托したり、かれは兎に角水鳥の立つ跡を濁さないことをつとめた。

張作霖一行を乗せた汽車は六月三日午前一時十五分という到北京停車場を出発した。珍らしいほど月の明るい夜で、プラットフォームに張学良、楊宇霆、孫伝芳などと別れを惜むのが如何にも淋しそうに見えた。汽車が煙を吐き出すと軍樂隊が劉曉^{りゅうりょう}たる奏樂をしてこれを送った。

汽車の発車は無論絶対秘密にしていた。天津についたのが三日午前六時廿六分で、三十分計り停車した後、一路奉天に向つた。山海関には呉俊陞^{しゅんしやう}【Wu Junsheng】が出迎えて居つたので、更に一つの車を加えるため四十分計り停車した。その後は何処にも停まらず、普通は屹度^{きど}停車する皇姑屯駅^{こうこ屯}すらも除行して過ぎた。

三 爆発当時の現状

六月四日午前五時半頃、張作霖は瀋陽駅（奉天）に近いので起きていた。自用列車のスモーク

ングに、山海関から乗り込んだ黒竜江督弁呉俊陞と二人で話し込んでみると、そこへ北京から同行して来た大元帥顧問儀ぎ我誠也少佐がやって来て、二人の間に据って話し込んでいた。

列車が爆発したのはこの時のことである。儀我少佐自身の話しでは『午前五時半頃、クロス・ガードの下を潜ったかと思う頃、呉俊陞氏が張作霖氏と私に「寒いから外套でも着なさい」といしながら私の外套を着せかけようとした時であつた。私共の車の右前の方で大爆音起り、煙と車輛の天井が落ちて来たので、張作霖氏の顔も呉俊陞氏の顔も見えなくなつた』という。（『大阪毎日』五日所載奉天特電）

それから状況は当時、詳しく新聞に報ぜられたから書く必要はない。呉俊陞はまず死し、張作霖も続いて死んだ。一緒に居つた儀我小佐は、幸いに膝部に打撲傷と、顔、腕に微傷を負うたのみで無事であつた。一行の死傷者は張の第六夫人及び婢女は即死し、従者に廿一名、衛隊に三十余名を出だし、現場は奉天駅に近いこととて、混乱の巷と化した。

この報が伝わるや、支那側は極度に狼狽した。彼等は直覺的に（大した理論的根拠もなしに）それが日本人の陰謀であると信じ込んだ。支那兵は爆発直後、小銃機関銃を乱射した。張作霖の病室には日本人医師は無論として、日本人は一切寄せつけなかった。城内の人氣は殺氣立って、日本人は多く引きあげた。日本学生にして通学の途中支那兵に刺されたものもあつた。甚だしき

は平素は人一人あげない城壁の上に砲兵、歩兵を多数あげて、野砲機関銃を据えつけたりした。元来、奉天辺では問題が起る毎に、支那人は必ず日本居留地に引きあげ、家賃の暴騰を見るのを常とするが、今回に限っては居留地に居るものも却つて城内に帰つて、奉天街の家賃が下落するという奇現象を示した。

それ計りではない。張作霖自身もこれを以て日本の陰謀だと明言したという説すらも伝わった。即ち当日(四日)意識明瞭となつた時に、『今回の事件は日本の行為に相違ない、一刻も早く張学良、楊宇霆に詳報し、かつ南方軍とも提携して対策を講ぜねばならぬ』といい、大元帥府秘書長談国桓を天津に派遣し、閻、蔣、馮の三者にも『今後支那全土をあげて、この日本側の陰謀に対抗せねばならぬ』と通告したといわれる。

これを日本側の陰謀と考えたのは、^{ただ}啻に張周囲のものばかりではない。私の知っている某貴族院議員にして、支那に二十年近くを過して、支那人の間には極めて有力なる人が、その朝総理潘復の家に行った。挨拶がすむと直ぐ『今朝、張作霖の列車が爆破されたが知っているか』と聞いた。『知らん、何処で』と聞き返すと『満鉄の鉄橋下だ』といいながら、小さい声で『オイ知つているだろう、ほんとの事を話してくれよ』と云つたという。『その様子でこれは弁解したつて無駄だと感じて、私は何にもいうことを止してしまつた。實際また当時は何にも知らなかつたの

だし』と、その人が後で私に話していた。

四 犯人を想像して

支那側が頭からそう信じてかかったということは、併しながら客觀的事実がそうであつたということは無論別である。

当時、張作霖の列車爆破と共に何人もの頭を襲つたのは『犯人は誰だ』という疑問であつた。そしてこれには大体五つのソース【source】を数え得た。第一には無論南方政府より派遣された便衣隊の所為なりとする説であつた。これは常識的にも首肯し得られる想像であつて、当時南方唯一の敵は張作霖であつた。その後の変化でも判るように、かれの配下の若い有力者は何れも南方の指導精神及び勢力と一味の諒解あるに拘わらず、かれのみは頑としてこれに応ぜず、飽まで赤賊討伐を標的としていた。この大なる障害物に対して南方が何等かの方法を用いて除き去らんと努力したであろうことは、容易に推測し得ることである。

殊に爆破事件の当日午前三時頃、『怪しき支那人三名潜かに満鉄線鉄道堤を上らんとしつつあるを発見せる我監視兵は直ちに之に近づき誰何せしに、該支那人は我兵に向い爆弾を投擲せんとしたるため我兵は直ちに其二名を刺殺したるに、他の一名は遂に逃走せり。我兵は該支那人の屍

体を検査したるに爆弾一個及び三通の書信を発見せり。其内三通は全く私信に過ぎざりしも、一通は国民軍閥東招撫使の書信の破片にして是等の点より考察すれば、南方便衣隊員なること疑なし』(六月十一日陸軍省発表)とあり、南方の行為なることが益々疑われるのである。

ただ残念なことはその屍体を支那官憲側に引渡さなかつたことであり、従つて支那側では便衣隊が殺されたことを、共同調査で否定して居り、便衣隊所有の手紙なりとして発表された文書に對しても『支那人が書く文章にあらず』と一笑に附して居る模様がある。その後、南方に關係ある凌印閣を捕えて『有力な証拠』を握つた旨電報があつたが、その後如何なつたか判明しない。

第二に爆破の主謀者として疑われるのは楊宇霆である。楊宇霆が若手の勢力家として、大志をいだいているのは以前から知れ渡つた事実である。殊に當時、かれの無二の腹心常蔭槐は交通次長として鉄道界を自由になし得る地位にあり、この人にして努力すれば、列車爆破のことは決して困難ではない。現に事件後二週間を過ぎて新聞は、左のような報導を伝えた。

『常蔭槐氏は十六日京奉線機務処長孫鴻哲氏と共に天津より唐山に赴いた際、孫氏が南軍と通謀しおれることが明瞭となり、張學良旗下の第三方面軍に捕えられた。然るに又孫氏の口より常氏の爆発事件に關係あることが判明し、常氏も直ちに同地で捕縛されたと伝えられる。もし常氏の捕縛が事実とすれば、これに關係し楊宇霆氏にも疑問の眼が向けらるべく延いては如何なる事件を引起すや

も知れず』（東京朝日六月十九日北京特電）

その後楊が殺されたとの風説が確からしいとて関東庁から報告され、閣議で話しの種になったことすらある。【この時は未だ生存、1929.1.10 張学良により、捕縛中ではない常蔭槐と共に殺された。】

第三に疑われるのは労農口シアである。今でこそこれを疑う者は余りないようだが、当時は口シアに対する疑惑が深かった。東支鉄道において張作霖が一敵国である関係から、一応これを疑うことは必らずしも無理ではない。

第四には楊宇霆以外の張作霖部下の不平分子である。さきの郭松齡の反逆以来、かれに表面帰順して居りながら、異志を抱くものは決して少ないといえない。この人々の策動も無視出来ないことである。

第五に疑われたのは日本である。その爆発の現場が、日本の鉄道租借地なりしが故に、日本は正當以上に疑われた。支那字新聞で南方便衣隊の所為だと書いたのは日本人経営の盛京新報だけである。

五 問題の三条項

爆発後、支那側はこれに関し一切の記事を差し止め、日支両官憲は直ちに現場について共同調

査を行つた。共同調査の内容については後で説くやうに、支那側の拒絶により発表されないが、重点は左の条項を出でないであらう。

(一) まず責任の帰するところである。これについては日本の陸軍省は早くも日本側に責任のないことを発表した。その趣意は『元來同所は京奉鐵道と満鉄と交叉する地点で、満鉄の鉄橋の下を京奉線が通つて居る關係から、日本が警備に當る場處であるのは事實だ』

『然るに今次張作霖の停車に際しては此交叉点に支那憲兵を配置して警戒し度旨六月三日支那側より申出であり、我守備隊に於ても時節柄支那側の申出も尤もの事と思惟し、各方面と打合の上支那側の申し出を容諾し、支那側は皇姑屯駅より潘陽駅に至る約一哩の間の京奉線路上に騎兵及憲兵約五十名を配置し、此交叉点には三日午後八時頃より金中尉外数名の支那憲兵警戒配置につけり』

とて日本側の警備責任は上方の満鉄線だけで、下方の京奉線については、全然これなしと主張している。

(二) 次ぎに問題になるのは犯人が何人なるかである。張作霖の列車は発着の時間を秘密にしたのは無論として、その何番目の列車にかが乗つて居つたかは、極めて少数の人より知るもののはなかつた。当時の列車の編成は左のようであつた。

(一) 機関車二輛 (二) 護衛隊乗用三等客車三輛 (三) 奉天側高官、張作霖第三息 (四) 一等客

車三輛（五）同高官用津浦線一等甲鉄車一輛（六）張作霖乗用車（第八十号）一輛（七）食堂車』。

この長い列車において、外部のものが張が何の列車に乗つて居るかを、如何にして判り得たかである。況んや山海開で呉俊陞を加えたがために、列車は編成替えをして居る。内部に策応者があるか、然らざれば余程の通信機関を有して居るのでなければ、到底あのような手際を以て大事を行うことは不可能である。即ち

一、同列車に同乗し、車輛の位置に通曉し、爆破敢行者に之を知らしめたもの

二、張作霖乗列車爆破のため緩急宜しきを得、爆破場所附近で特に速力を緩めたる列車運転機関従業員

三、爆破をした下手人

の三つが、独立的にか、策応的にか行動したことは事実であろう。（一）駅までには尚一キロもあつて普通なら相当の速力を出すべきに、列車が爆破したにも拘わらず、後の列車が折り重ならないで、直線的に停車し毫も異状なかつた事実なども、除行した証拠であり、（二）元来爆弾では汽車が燃えることはないのに直ちに燃えたことなども不思議だと、日本及び支那側の相当有力な技師が述べている。

（三）つぎは爆破薬の種類及び装置の場処である。専門家の意見では黄色薬にあらずして、ダイ

ナマイトであろう。そして薬量は少くとも三十キログラムを下らないであろうといわれる。然らばその爆薬装置の場所は何れであるか。鉄橋の上にあつたとすれば日本軍警備の責任であり、その下方乃至は列車に仕かけられて居つたとすれば支那側の責任である。日本軍部の発表では

『破壊の程度より見て爆薬量に相当大なるものと推測せられ、投擲せるものとは認め難く又張間（橋の）飛散の状態に照すも満鉄線路の上面に爆薬を装置したるに非ざることは確実にして或は張間の下面若くは橋脚附近に装置されしならんと想像せられあり』。

とあり。更に上海七月十六日発のルーター電報によれば

一、爆発は多量の爆薬を使用せるもので、鉄橋北側及び中央スパンの下方、及び側方にある北側ピアースに装置せられたものだ。

二、爆発装置は鉄橋の安全距離にある位置より電気装置を以て行いたるものなるべく、発電位置から電線によつて連絡せる電気装置によつたものならん。

三、爆薬の措置及び発火方法は極めて専門的に熟練せる技能あるものによつて実行せられたものであろう。

四、専門家の判定によれば電気装置による斯くの如き大爆発を行うには熟練せる専門家四五名を用い行うも六時間を要するであろう。

と報導している。

六 日本を誣ふるものの論拠

爆発事件に関する日支官憲の共同調査は、約一週間の後に完了したが、支那側は意見に相違ありとして、これが共同報告書の作成を拒絶した。

この内容については元より窺知することは出来ないが、七月十日のロイテル電報はこれに重要な説明を加えている。��通信員は林総領事から外務省に提出した報告書を入手したとて曰く

『右報告中まず驚くべき事とは、日支双方共爆発に関する専門家の意見を徴せなかったことだ。次に

(一) 警備問題に関しては日本側は支那側司令官の要求で事件發生の前夜、鉄橋の下を監視するため、支那兵の派遣を許可したというに對し、支那側は右は一旦許可されたけれども、六月三日午後八時支那兵派遣の際日本側はこれを拒絶したと主張した。尚この点に関する報告書の字句は極めて曖昧あるが、鉄橋及び橋梁の爆破状態を目撃したものは、恐らく爆薬が日本側警備区域たる陸橋の上部にある橋梁附近に装置せられたものであつたことを推断し得べく、果して然りとせば日本警備隊の目につかなかつたものであらう。

(二) 事件發生前、現地附近に起つた疑問の支那人三名の射殺については、支那側は全然事實を否

認し、もし彼等にして日本側のいうが如く連類者であるとすれば、爆発装置を終った後、態々手榴弾及び証拠物たる手紙を携えて、現地附近を徘徊するような愚をなさないであろうといっている。

(三) 爆破の原因については、爆薬の猛烈にして電気仕掛によつたであろうことは記載しているが、装置所については何等の決定に達せないものの如く、単に橋上又は地上に装置せられたものであることを記載せるに止まる。(中略) その他或は橋柱の上とか、或は列車の上とか詳説をあげたるも、何れも証拠をあげず、要するに事件の原因は依然不明だ』

外国通信は何れも日本に向つて不利な報導をしているが、これを極めて大胆に発表したのは、リノックス・シンプソン(ブットナム・ウィール)である。かれは北京に英文雑誌を経営し、兼ねて張作霖の顧問であつた。張の葬儀が行わるるや、かれは奉天に赴き自からこの問題を研究して帰来後『張作霖を殺したものは日本の秘密結社である。そしてこれに日本陸軍のある部分の者が助けた』と公表したのである。かれは張学良とも交つてゐるから、かれの発表に奉天側の意志が含まれてゐると見ていいであらう。かれはこれについて数種の理由をあげた。

(一) 日本人が鉄道交差点に十二の八十ポンド爆薬機械を据えた。

(二) 日本人顧問(儀我少佐の事)が、交差点を夜明けに通るべく汽車を除行することを勧めた(三) 日本軍人が交叉点の三百メートル以内に支那軍人の入るを許さなかつた(四) その晩日本兵は何人

をも捕えなかった（五）日本人顧問は北京から何行したが天津で下りた（町野大佐のことであろう）（六）爆発後一台の自動車が列車の方に疾送して来た（七）ある有力な日本人が自分の家の屋根から汽車の到着を眺めて居り爆発後家に入った（八）張作霖の部下が殺したのでない証拠には張の死後かれに反旗を翻したものはないではないか。

こうした理由をあげた後、かれは大胆にもその下手人が黒龍会の如き団体であることを明らかにしている。

『日本にはサラジエボを殺したセルビアの如き団体がある。例えば黒龍会の如きで支那の事件に興味を持ち、廿一條の要求を製造し、壮士を雇つておく。日本の行政長官が爆殺事件後、奉天より送還したる如き人間がそれである』。

このシンプソンの説に対しわが外務省も黒龍会も英字新聞においてこれを否定した。（八月十八日ジャパン・アドバタイザー紙参照）殊に外務省の反駁はシンプソンの理由十ヶ条を一々駁し、更にその下手人が日本側であり得ない事七ヶ条をあげているが、その何人の手になったかは知らず、強い議論の上に立っている。

七 所謂支那浪人の策動

支那人及び一部の西洋人が主張する『日本』というものの限界は極めて不明である。それは時に無名の個人を意味し、また時には政府をも意味する。

もし張作霖爆殺の陰謀が日本政府によつて計画されたというものあらば、識者は決してこれを感じないであろう（かれの関外撤退を勧告したのは田中内閣だから、爆発の責任も田中にあるなどという遠廻しの議論は別として）。田中首相は張作霖の将来について、余り多くを期待しなかつたのは事実であるが、この人なき後に東三省を統治する者なきに顧みて、暫らくかれを利用するつもりでいた。それも今までは大元帥として鼻息が荒かつたので、かれが旗を巻いて一応奉天に帰れば直ちに、継続中の土地商租権問題や鉄道問題を押しつけて解決する意志を持っていたと信ずべき理由がある。故に、張の死亡によつて予定の筋書が狂い、最も失望したのは恐らく田中首相であろう。われ等の常識は安心して、この事件に政府の手が加わっていないことを断言し得ると思う。

併しながら支那及び支那同情者が、『この陰謀の蔭に所謂壮士の活動があつた』と主張する点は実際の証拠は何にもないが、やや疑問を存している。当時の新聞に出たことであるが、田中首相は林樞助男をして張学良にいわしめて『日本政府の意志は林総領事を通してのみ通知するから、他の人の言を信じてくれるな』と繰り返し述べた。一国の政府の意志が、その国の正式代表者の

口を通して相手に伝えらるべきは、余りに明白すぎる事である。然るにこの事を特に高調せねばならぬ理由は何処にあるか。それは林総領事以外に活動する者があるのを示すものに外ならない。

元来、満州における日本人の策動は団体中心であるよりも、個人中心であるようである。従つて所謂満州浪人が何を考へて居るかを全体として断定することは困難である。ただ彼等の内に真面目に満州独立論という如き空想を画いている者のあるのは否定出来ない。かれ等の筋書によれば、張作霖の如きは昔から日本の厄介になりながら、日本に酬うところを知らない。故に日本としては別な方法を講ずる必要があるというのである。

この筋書から出たものが、満州人のための満州といったような標的から、今は天津に居る宣統廃帝を連れて来るとか、大連に居る恭親王を推戴するとかという芝居である。この筋書を実行するには、併し平和ではいけない。満州を一応擾乱じょうらんの巷に陥れて、細工は粒々仕上げを見てくれというわけである。

こうした目で見ると、如何にも張作霖爆殺後、種々な不思議な事件はあつた。安奉線で爆弾を所持した日本人が捕えられ、時節柄記事掲載を差止めて調査したのは事実だ。捕えられたのは二人で一人は本溪湖、他は安東で発見捕縛された。また不発に終つたけれども、東支鉄道西線（ハルビンの西方）の海林で、ある日本人が爆弾装置を試みたという事実もある。

爆発事件があつた後で、奉天の日本人居留民会を始め、一夜に六七回づつ家屋が爆破され、新聞は筆を揃えて南方便衣隊の所業なることを報じた。新聞記者が支那官憲に詰問すると

「巡警を増し憲兵を派して商埠地の警戒を厳にする積りであるといつて居るが、なおこの事件に対する犯人の見当については笑つて多くを語らなかつた」(東京朝日十二日奉天特電)

とある。『笑つて多くを語らない』は意味深長ではないか。

不思議なことは『張作霖を殺したのは自分だ』と料理屋などで豪語するものが二十人も三十人も居ることである。官憲が調べてみると爆弾薬に関する初歩的な智識すらもないという滑稽な事件もある。またある関東庁の高官のところに来て『張を殺したことにして南方人を南京に届けたいから、〇〇〇〇円計り出して貰いたい』といつて来たものもあるという。日本の新聞に宣統皇帝を擁して東三省に大清帝国を復活する運動が流行したと大きく報ぜられたのもこの頃の事である。

説いて明らかであるを得ない遺憾であるが、一部人士の策動の様を知るべきではないか。

八 根本的調査を要す

先頃、シアトルに国際会議が開かれた。そこへ日本からは英文学者の頭本元貞君が出席した。

丁度その前に爆発事件があつたので、この問題が必ず話題の中心になるだろうと思つて、同君は態々奉天に行つて調べあげた。そして沢山の材量を探つて出かけたものである。

然るにシアトルにおいても、またウィリアムス・タウンにおいても、これが少しも問題にならぬ。ブットナム・ウィールの記事なども新聞の偶にかかげたぐらいだとのことで、かの排日家ハーストのブリスベーンすら『日本に政府があるのだから、秘密結社の黒龍会が下手人だったら、これを捕えるだろう』と、クー・クラックス・クランにあてつけたに過ぎないと話していた。

これによつても分るように、支那の宣伝は従來の宣伝に溺れすぎて、最早英米の識者の注意を惹くに足らない。故にこの事件に関しても、支那における一部外人は別として、大勢が日本に非常に不利に動くようなことはないかも知れないと思う。

併しながら前述した通り事件の始めから日本に深い疑問がかけられて來たのは事實である。そして爆発事件が相当周到な準備を必要とする点から、軍部をまで誣いる者があるのである。田中内閣は何故最初に、断乎として徹底的にこれが調査をなし、苟も疑いのある者は悉く糺明して、事實を天下に明らかにしなかつたか。個人として自己の短見から國家を謬つたものは今までとて決して少なくない。三浦子の朝鮮王宮事件、李鴻章、ロシア皇太子等に対する加害などはその例である、しかも當時は何れも極めて公平にこれ等を調査して責任の歸するところを示している。

今回の事件においても日本だけが不利な批難を受くべき理由はない。南方の便衣隊、楊宇霆一派に対する疑いなどが何時の間にか去つて、日本だけが疑問の矢表に立つに至つたのは、田中内閣がその事件を明らかにするに怠慢であつたからである。警備の責任が先方にありとの主張を以て、再審終れりとする如きは事の輕重を知らないものである。今こそ南方政府は強敵張作霖が殺されたので喜びと満足から黙っているけれども、喉元過ぎた後は必らず、これを以て日本を打つ道具とすることは明らかである。

先頃、田中首相は対支政策し關して伊東己代治伯を訪問した。この時に伊東伯はこの張作霖爆殺事件を持ち出して、政府が何故これを根本的に取調べなかつたかを責めたとのことである。その人を以てその言を捨てず、私はこの点で伊東伯の説に賛する。一国に対する外交は正邪を明らかにすることから始まる。私は田中内閣の名譽のためにも——西比利亜出兵、滿州緩衝地帶説の本家として、田中首相自身が浪人の策動に近い考えを有しては居らないだろうかというような疑いを晴らすだけでも、田中内閣がこの事件を根本から調査して、苟も手の黒きものあらば寸毫も仮借せざることを希望せざるを得ないのである。（昭三・九・六）

（附記）右は日本はおける恐らくは唯一の同事件に關する記述であろう。その後記事が掲載禁止に

なり議会で問題になったけれども、新聞には発表されなかった。現在からいえば書き足したいこともあるけれども、それは許されない。

「# この事件は、戦前には委細が公表されなかった。1929（昭和四）年七月二日満州某重大事件につき関東軍の関係者の処分が公表された。爆殺事件に絡んだものであることは明らかであったが、停職など軽微なものであり、殺人実行者の処分としては異常に軽いものだった。田中義一首相は再度の奏上を拒絶され、二日内閣総辞職をしたが、その理由は人心一新と公表された。新聞等は某事件に絡んだものであらうと伝えていたが。」

自由日本を漁る（をはり）

作成者：石井彰文

作成日：2013.6.6